田野町文化財調査報告書　第49集

黒草第２遺跡

県営農地保全整備事業（元野地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

宮崎郡田野町教育委員会

田野町文化財調査報告書第49集　正誤表

頁	場所	誤	正
目次	図版16	(土器：ＸⅡ～ＸⅣ類)	(土器：ＸⅡ, ＸⅣ類)
目次	図版17	(土器:ＸⅣ, ＸＶ類)	(土器:ＸＶ類)
9	第7図	南側のSI-03を消去	
集石遺構図面		方位欠落あり。第38集を参考にしてください。	
38	120備考	100・124と同一個体	100・127と同一個体
38	127備考		100・120と同一個体を追加
40	155備考	130と同一個体	消去
40	161備考		162と同一個体を追加
41	182備考	146と同一個体	消去
67	図37内	南側の21を消去	
71	32	1998「井手ノ尾遺跡」	1992「井手ノ尾遺跡」
96	上	スグレイパー	スクレイパー

序

田野町は遺跡の宝庫と言われておりまして、町内あちこちで遺跡が出土いたしています。

黒草第2遺跡は、県営農地保全整備事業(元野地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査により発掘されたものであり、旧石器時代から縄文時代にかけてのものです。

この報告書は町内遺跡としては、第49集めでありまして、田野町の埋蔵文化財がこのように集大成されますことは、喜びにたえません。

南九州は縄文時代早期の遺跡が多い地域でありますが、この殆どは早期の後葉までであり、黒草第2遺跡のように縄文時代早期末の遺跡はごく稀であります。

このことからも、この報告書が貴重なものであるがゆえに、学術の資料として、また、町民を始め多くの皆さんにお役にたてることをご期待いたしています。

最後になりましたが、この発掘調査にあたってご指導いただいた県教育委員会文化課並びにご理解、ご協力を頂いた地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成15年７月

田野町教育委員会
教育長　西田　英介

例　言

1.本書は、平成12年県営農地保全整備事業元野地区における調査結果を報告するものである。

2.本遺跡の現地調査及び室内整理作業は、宮崎県中部農林振興局からの受託事業ならびに文化庁の国庫補助事業として田野町教育委員会が実施した。調査体制は以下の通りである。

調査主体　宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

(平成12年度)	教育長		堀内　侃
	社会教育課長		永谷　弘
	社会教育課長補佐		川越　修治
	社会教育係長		有村　勝弘
	埋蔵文化財担当	同主査	森田　浩史
		同主任主事	金丸　武司
		同調査員	田鍬　美紀
(平成14年度)	教育長		西田　英介
	教育次長兼・社会教育課長		新坂　政光
	社会教育課長補佐		川越　修治
	社会教育係長		後藤　敏典
	埋蔵文化財担当	同主査	森田　浩史
		同主事	金丸　武司
		同調査員	吉住　さと子
(平成15年度)	教育長		西田　英介
	教育次長兼・社会教育課長		新坂　政光
	社会教育課長補佐		川越　修治
	社会教育係長		後藤　敏典
	埋蔵文化財担当	同主査	森田　浩史
		同主任	金丸　武司

3.現地の作業員として、田野町内の方から多数の参加をいただいた。

4.室内調査の実施にあたり、下記の方々の協力を得た(五十音順・敬称略)。

5．作業の分担は、以下のとおりである。

(現地)　遺構実測　株式会社埋蔵文化財サポートシステム　及び屋外作業員

遺構写真撮影　金丸武司・田鍬美紀

(室内)　土器実測･トレース　吉住さと子　及び室内整理作業員

石器実測･トレース　金丸　武司　及び室内整理作業員

図面作成　金丸　武司・田鍬美紀　及び室内整理作業員

遺物写真撮影　金丸　武司

写真図版作成　金丸　武司　及び室内整理作業員

観察表作成　金丸　武司　及び室内整理作業員

執筆・編集　金丸　武司

6．本書で用いた方位は磁北、標高は海抜絶対高である。

7．本書の色調表示は、農水省農林水産技術会議事務局監修の『標準土色帖』を参考にした。

8．本書で用いた遺構略号は以下の通りである。集石遺構：SI、土坑：SC

9．調査にあたっては、以下の方々にご指導・ご助言を賜った(五十音順・敬称略)。

秋成雅博・雨宮瑞生・黒川忠広・重留康宏・馬籠亮道・松田清孝・山下実

10．本遺跡の報告にあたっては、概要報告時より以下の点を変更した。

＊遺跡内の調査区名は、概要報告では英大文字かつ「地区」としていたが、同一期間の調査であることを考慮して、英小文字かつ「区」と表記した。

＊土層の名称は、概要報告時はローマ数字で層を表記したが、出土土器の分類名称との混乱を避けるため、英数字に直した。また、調査区全般のみならず、遺物が確認されなかった地点や、調査区周辺地域の断面で確認された土層も含めたため、層の名称を変更することにした。概要告時の層は、括弧書きで併記した。

11．本遺跡における時期区分の名称と基準は以下のとおりである。

細石刃文化期以前：　旧石器時代

神子柴系遺物～岩本式以前：縄文時代草創期

前平式～別府原・石坂式：　縄文時代早期前葉

下剥峯～手向山式：　縄文時代早期中葉

妙見・天道ヶ尾～塞ノ神式：縄文時代早期後葉

＊なお、苦浜式～条痕文土器は、全国的には早期と前期の過渡期にあたるが、詳細な時期区分はまだ不明瞭であることから、時期を表記せず「アカホヤ直下」とした。

12．本遺跡の出土遺物や、図面等の記録類は、田野町教育委員会で保管している。

凡　例

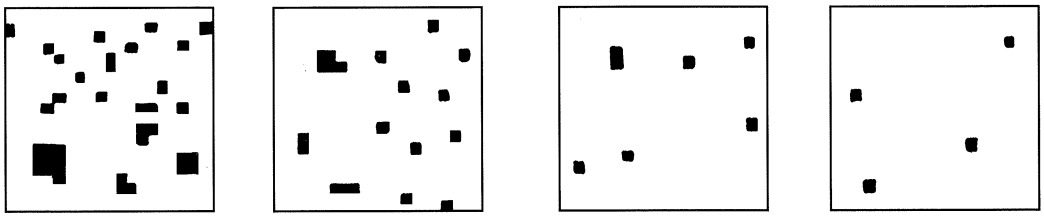
遺構について

遺構の断面は、検出面が確認できたものを実線で表し、検出面が不明瞭だったものは一点破線で、検出面が予測可能であるが、削平や掘り過ぎにより残存していないものは破線で表した。

土器について

＊観察表＊

胎土中に含まれる混和材の割合は、標準土色帖の面積割合を参考にし、下図のような基準で分類した。



(多量)　(中量)　(少量)　(微量)

・明らかに調整の方向が分かるもの以外は、調整方法のみを記載した。
・軽い押引きとは、連続的に押引き施文を行うのではなく、器面から施文具を一度離し、再び押引きを行う施文方法をいう。
・ミガキとは、光沢が見られるものの総称として用いた。
・炭化物の表記は、内面に付着するものを炭化物とし、外面のうち口縁部付近は煮こぼれ、頸部以下は煤と記載した。
・口唇部の調整は、ナデ以外のみ備考欄に記載した。

＊実測図面＊

・口縁部の表記は、以下のとおりである。

(平口縁)　(波状口縁=波頂部)　(波状口縁=波頂部以外)

・断面の表記は、以下のとおりである。

(通常の断面)　(粘土紐の継ぎ目の見られるもの)

石器について

＊観察表＊

・黒曜石は、以下の基準で分類を行った。なお、分類は鹿児島県立埋蔵文化財センターの馬籠亮道氏の御指導に従った。

黒曜石A：黒色で透明度が高く、小粒で透明な気泡を混入するもの。

黒曜石B：乳白色で表面がざらざらしており、稀に赤色粒子を混入するもの。

黒曜石C：漆黒であるが、風化面は灰色がかかるもの。

黒曜石D：漆黒であり、透明度は低い。混入物は白色で気泡よりも大きいもの。

黒曜石E：黒色であり、透明度は全くないもの。

黒曜石F：A～E・G以外、もしくは判別不能なもの。

黒曜石G：黒色で、透明度は低く、小粒な気泡を多く混入するもの。

・チャートは、ほぼ全てが良質であったため、質の記載は行わなかった。

・張質安山岩質のものは、「サヌカイト」とした。

・ホルンフェルス、頁岩、硬質頁岩、流紋岩の類は、「頁岩系」に一括した。

・蛋白石、玉髄、石英の類は、「石英」に一括した。ただし、チャートはこれに含まなかった。

・上記に含まれない石材は、宮崎県総合博物館の学芸員である松田清孝氏の指導に従った。

＊石鏃の分別について＊

完成品と未成品の区別は、以下の基準による。

1.形状が、左右対称から大きく逸脱しているもの。

2.断面形が、凸レンズ状でなく、急激な凹凸の認められるもの。

3.尖端部に対する調整の意図が希薄なもの。

4.再製作中途品は、完成品に含めた。

5.未成品及び、製作中放棄品は、見分けが困難であるため、総称して「未成品」とした。

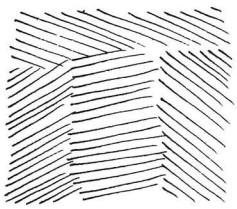
6.なお、未成品と尖頭状石器は、区別が付け難い場合もあるが、尖端部を作出する意図の有無より判断を行った。

＊欠損しているものが多いため、脚部欠損等、復元すれば記入可能なものは、復元した数値を記入した。また、復元が不可能なものは、－とした。

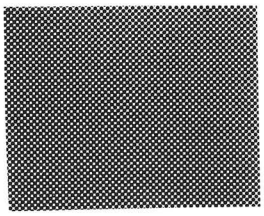
＊実測図面＊

・計測数値は、最も大きい数値になる部分を「長さ」とし、それに直交する部分の最大長を「幅」とした。

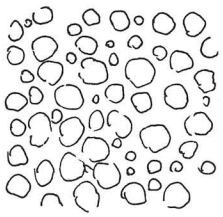
・研磨痕、敲打痕の表記は、以下のとおりである。



(研磨痕=擦痕)



(研磨痕=擦痕なし)



(敲打痕)

目　次

本文目次

第Ⅰ章　序説 …… 1
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
第Ⅱ章　調査の結果 …… 4
　第1節　調査の概要 …… 4
　第2節　層序 …… 4
　第3節　旧石器時代の遺物 …… 7
　第4節　縄文時代の遺構と遺物 …… 8
　　Ⅰ.検出遺構 …… 8
　　集石遺構 …… 8
　　土坑 …… 8
　　Ⅱ.出土遺物 …… 8
　　遺構内出土遺物 …… 8
　　土器 …… 8
　　石器 …… 31
第Ⅲ章　まとめ …… 59
付編　町内縄文遺跡出土の「鉄丸石」について …… 71

図版目次

第1図　町内遺跡分布図 …… 2
第2図　元野地区遺跡分布図 …… 2
第3図　調査区位置図 …… 2
第4図　土層柱状模式図 …… 5
第5図　旧石器時代遺物実測図 …… 7
第6図　a区遺構分布図 …… 9
第7図　b区遺構分布図 …… 9
第8図　c区遺構分布図 …… 10
第9図　b区出土遺物分布図 …… 10
第10図　c区出土遺物分布図 …… 10
第11図　集石遺構実測図 …… 11
第12図　集石遺構実測図 …… 12
第13図　集石遺構実測図 …… 13
第14図　集石遺構実測図 …… 14
第15図　集石遺構、土坑実測図 …… 15

第16図　遺構内出土遺物実測図 ……18
第17図　出土土器実測図(1) ……19
第18図　出土土器実測図(2) ……20
第19図　出土土器実測図(3) ……21
第20図　出土土器実測図(4) ……24
第21図　出土土器実測図(5) ……25
第22図　出土土器実測図(6) ……26
第23図　出土土器実測図(7) ……27
第24図　出土土器実測図(8) ……28
第25図　出土土器実測図(9) ……29
第26図　出土土器実測図(10) ……30
第27図　出土石器実測図(1) ……43
第28図　出土石器実測図(2) ……44
第29図　出土石器実測図(3) ……45
第30図　出土石器実測図(4) ……46
第31図　出土石器実測図(5) ……47
第32図　出土石器実測図(6) ……48
第33図　出土石器実測図(7) ……49
第34図　出土石器実測図(8) ……50
第35図　出土石器実測図(9) ……51
第36図　町内出土平栫式土器の縄文 ……60
第37図　町内のアカホヤ降灰前遺跡分布図 ……67
第38図　町内出土の鉄岩石(1) ……72
第39図　町内出土の鉄岩石(2) ……73

表目次

表1　集石遺構観察表 ……16
表2　土坑観察表 ……16
表3　土坑覆土注記 ……17
表4　出土土器観察表(1) ……32
表5　出土土器観察表(2) ……33
表6　出土土器観察表(3) ……34
表7　出土土器観察表(4) ……35
表8　出土土器観察表(5) ……36
表9　出土土器観察表(6) ……37
表10　出土土器観察表(7) ……38
表11　出土土器観察表(8) ……39

表12　出土土器観察表(9) ……40
表13　出土土器観察表(10) ……41
表14　出土土器観察表(11) ……42
表15　石鏃観察表(1) ……52
表16　石鏃観察表(2) ……53
表17　石鏃観察表(3) ……54
表18　石鏃観察表(4) ……55
表19　その他の剥片石器観察表(1) ……55
表20　その他の剥片石器観察表(2) ……56
表21　礫石器観察表 ……57
表22　黒草第2遺跡出土土器点数表 ……61
表23　出土石鏃分析グラフ ……62
表24　鹿村野地区遺跡出土石鏃分析グラフ ……63
表25　縄文早期遺跡の組成 ……65
表26　アカホヤ降灰以前の土器出土状況表 ……66

写真図版目次

図版１　検出遺構(SI-02~06) ……74
図版２　検出遺構(SI-05~09) ……75
図版３　検出遺構(SI-09~12) ……76
図版４　検出遺構(SI-12~15) ……77
図版５　検出遺構(SI-16~19) ……78
図版６　検出遺構(SI-19,21,22　SC-23,26) ……79
図版７　検出遺構(SC-24~27) ……80
図版８　検出遺構(SC-29,30) ……81
図版９　出土遺物(土器：遺構内　石器：旧石器時代) ……82
図版10　出土遺物(土器：Ⅰ~Ⅶ類) ……83
図版11　出土遺物(土器：Ⅸ,Ⅹ類) ……84
図版12　出土遺物(土器：ⅩⅠ類) ……85
図版13　出土遺物(土器：VA,ⅩⅡ類) ……86
図版14　出土遺物(土器：ⅩⅠ,ⅩⅡ類) ……87
図版15　出土遺物(土器：ⅩⅡ類) ……88
図版16　出土遺物(土器：ⅩⅡ~ⅩⅣ類) ……89
図版17　出土遺物(土器：ⅩⅣ,ⅩⅤ類) ……90
図版18　出土遺物(土器：ⅩⅥ類) ……91
図版19　出土遺物(土器：ⅩⅥ類) ……92
図版20　出土遺物(石器：石鏃) ……93

図版21　出土遺物(石器：石鏃) ……94
図版22　出土遺物(石器：石鏃,尖頭状石器,二次加工剥片,石錐) ……95
図版23　出土遺物(石器：剥片,石核,羊頭状石器,石匙,スクレイパー,石斧) ……96
図版24　出土遺物(石器：磨石,石皿,敲石) ……97
図版25　出土遺物(石器：ノジュール,石錘) ……98

第Ⅰ章　序説

第１節　調査に至る経緯

田野町は、宮崎市の西方約20kmの地点を中心とする田野盆地と、それを取り囲む鰐塚山を始めとする山々からなり、１市(宮崎市)と５町(清武町、高岡町、山之口町、三股町、北郷町)に接している。主な産業は、大根やタバコなどを主体とする農業であるが、近年は、高速道路や国県道の整備によって交通の要衝の地となり、その影響で工業団地の整備、企業や専門学校の誘致、宅地開発の振興が行われた結果、徐々にではあるが発展を見せている。その反面、農業基盤整備事業や各種開発事業に伴う埋蔵文化財の保存は大きな問題となっており、町教育委員会でも調整や調査体制の整備充実を図ってきた。しかし、遺跡の大半は記録保存の対象となり、消滅しているのが現状である。

平成12年度は、県営農地保全整備事業元野地区が実施されることとなり、事業地内に県文化課が分布を確認するため試掘調査を行ったところ、アカホヤ火山灰層下位において、縄文時代早期にあたる焼礫の分布が明らかとなった。この調査結果を踏まえ、平成12年6月28日には中部農林振興局、県文化課、町農業整備課、町教育委員会の四社で協議を行った。その結果、設計施工上やむを得ず消滅を免れない部分について発掘調査による記録保存を実施する事となり、平成12年8月28日付けで契約を締結、29日より現地の調査に着手した。

調査は、田野町内の皆様のご協力を得ながら翌年1月25日に終了した。同遺跡の調査面積は8,900㎡に及んだ。

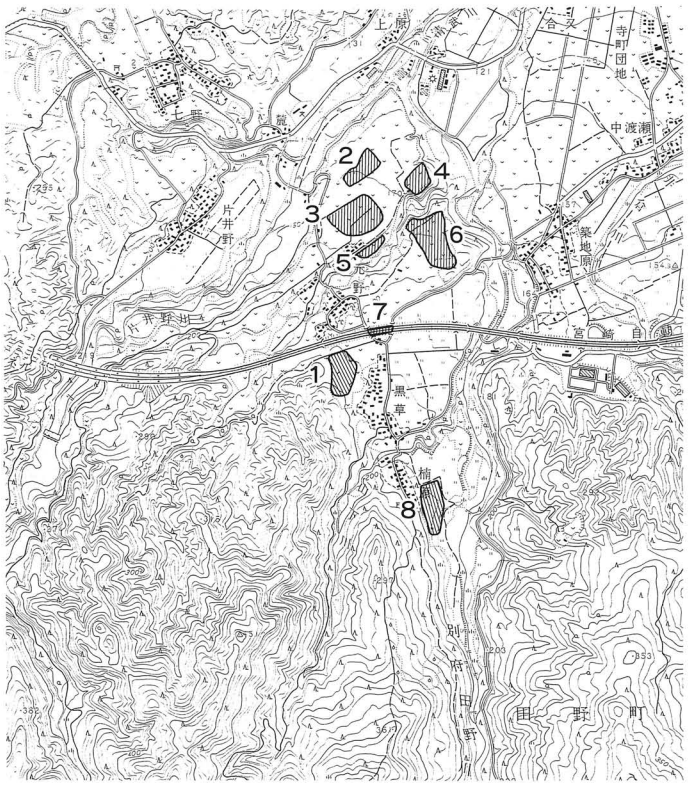
第２節　遺跡の位置と歴史的環境

黒草第2遺跡は、元野地区を東西に横切る、宮崎自動車道の南隣に位置する。この地点は、南に広がる鰐塚山系からのびた丘陵の尖端にあたり、遺跡全体が北側へ傾斜する。表土剥ぎを行った結果、開墾前は現地形よりも傾斜が激しかったことが明らかとなっている。調査区の西隣には、地元の人により「トエンタンの水」と呼ばれる湧水点がある。戦前は水量が豊富であったため、黒草地区に住む人々の生活用水を供給していたという。ただし、近年は水量が大幅に減っており、付近一帯も、河川の流路が変更した形跡が残されるなど、水流が不安定であったと考えられることから、先史時代に集落の水源を供給していたとは限らない。

黒草第2遺跡の周辺は、先史時代の遺跡が密集する地点として知られている。黒草第2遺跡の傾斜の先に立地する黒草遺跡は、高速道路が建設される際に発掘調査が行われ、後･晩期の遺物が多量に確認された。北東から東側に細長くのびる台地上には本野原遺跡（旧称黒草遺跡）があり、昭和46年に、宮崎大学の考古学研究班によってトレンチ調査が行われたほか、平成13年度行われた農業関連に伴う全面調査では、円形の土木工事を含む縄文時代後・晩期の大規模集落の存在が明らかとなり、学会のみならず世間一般に広く知られることとなった。この時の調査では、他にも旧石器時代、縄文時代早期・前期、古代、中世と、幅広い年代に渡る生活跡が確認されている。黒草第2遺跡の北西部には元野河内遺跡が立地しており、平成8年度に行われた調査によって、河川の合流点周辺に、縄文早期を通した集落の存在が明らかとなっている。元野河内遺跡の北東部に広がる台地上部には、平成5年～7年にかけて調査が行われた高野原遺跡が立地し、旧石器時代や縄文時代早期・前期の遺物が確認されたばかりでなく、縄文時代

第１図　町内遺跡分布図（S＝1/100,000）

1.黒草第２遺跡
2.高野原遺跡（A区）
3.高野原遺跡（B・C区）
4.高野原遺跡（E～G区）
5.本野遺跡
6.本野原遺跡
7.黒草第１遺跡
8.畑田遺跡



第２図　元野地区遺跡分布図（S＝1/40,000）

第３図　調査区位置図（S＝1/4,000）

後・晩期の環状を呈する掘立柱建物群、弥生時代の竪穴住居跡群、古墳時代の地下式横穴と、幅広い年代にわたる生活跡が確認された。この南側は、高野原遺跡の台地より一段低くなる台地が帯状に延びており、その台地上に縄文時代前・中期及び弥生時代の集落跡である本野遺跡が立地する。黒草地区の南方、楠原地区の河川合流点には畑田遺跡が立地し、アカホヤ前後の遺物が少量認められるほか、縄文時代晩期にあたる組織痕土器、中世の掘立柱建物群が検出された。

以上のように、黒草第2遺跡の立地する元野地区には、先史時代の遺跡が多数存在しており、旧石器時代から縄文時代を通して、殆ど途切れることなく遺物が確認されている。これは、河川の合流地点であり、良好な台地の林立する地形が、先史時代の生活環境としては理想的であったのだろう。

(参考文献)

宮崎大学考古学研究班　1971『黒草遺跡』

宮崎県教育委員会　1979「黒草遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』(3)

田野町教育委員会　1999「本野遺跡(縄文時代遺物編)」『田野町文化財調査報告書』第32集

田野町教育委員会　2000「本野遺跡(2)」『田野町文化財調査報告書』第33集

田野町教育委員会　2000「高野原遺跡(A区)」『田野町文化財調査報告書』第34集

田野町教育委員会　2000「高野原遺跡B・C区(1)」『田野町文化財調査報告書』第35集

田野町教育委員会　2000「高野原遺跡(E～G区)」『田野町文化財調査報告書』第36集

田野町教育委員会　2001「黒草第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第38集

田野町教育委員会　2001「元野河内遺跡」『田野町文化財調査報告書』第39集

田野町教育委員会　2001「畑田遺跡」『田野町文化財調査報告書』第40集

田野町教育委員会　2004「本野原遺跡一」『田野町文化財調査報告書』第48集

田野町教育委員会　2003「高野原遺跡B・C区(2)」『田野町文化財調査報告書』第45集

田野町教育委員会　2003「高野原遺跡B・C区(3)」『田野町文化財調査報告書』第46集

第II章　調査の結果

第１節　調査の概要

本遺跡の調査にあたっては、前段階で実施された試掘調査時に、縄文時代早期の遺物包含層が残存する部分に調査区を設定した。アカホヤ火山灰層である４層まで、機械による掘削を行った。この際、a区の傾斜下部においてアカホヤ火山灰層上層にあたる御池火山灰層(3層)や黒色土層(2層)の堆積が見られたが、遺物等は混入していなかったため、予定を変更することなく除去した。５層から6層にかけて手掘りによる調査を行ったが、集石遺構の検出面は５層上位であることが多く、多くの遺物のこの層より出土した。6層からの遺物の出土は疎らであった。遺物は縄文時代早期の全般にわたって出土したが、主体を占めるものは早期後葉～アカホヤ直下であった。なお、調査の過程で後期旧石器時代にあたる細石核も出土しているが、これと縄文時代早期の遺物の間に、出土層位の違いは認められなかった。

第２節　層序(第４図)

調査区内の基本層序は、１層から14層に分別できた。堆積状況は、調査区によって若干の違いが見られる。

１層：耕作土層(旧Ｉ層)

軟質であり、粘質は全くない。部分的に下位を削平したためか、層中には数mm程度のアカホヤ火山灰層のブロックが混入していた。堆積の厚さは、30cm前後であった。

２層：黒色土層

a区傾斜下位の、ごく一部で確認された、アカホヤ火山灰層上位に堆積する層。非常に軟質であり、粘性は全くない。

３層：御池火山灰層

２層と同じく、a区傾斜下位の、ごく一部で確認された。黒色の硬質な層の中に白色の軽石片が多く混入するが、密度は、本野原遺跡で確認された御池火山灰層よりも疎らである。確認された地点が傾斜の末端にあたるため、二次的な流れ込みによる堆積と考えられる。なお、遺物等は確認されなかった。

４層：アカホヤ火山灰層

鬼界カルデラ起源の火山灰である。本遺跡では、以下の特徴から2層に分層できた。

４a層：二次堆積層(旧II層)

黄橙色のテフラである。調査時は４ｂ層と大差ないが、時間の経過と共に軟質となり、１ヵ月もすると大鋸屑のようにボロボロと崩れる。水で濡らし、指で潰すと粘性がある。層中にはガラス質の粒子も多く含まれるが、他に黒色の粒子も混入していた。故に二次堆積層と考えられる。

４b層：アカホヤ火山灰層(旧III層)

黄橙色のテフラである。二次的な堆積はなく、プライマリーな状態であった。層は硬く締まっており、粘性は全くない。層中には火山ガラスが多く含まれていた。堆積の厚さは、15～30cmと、地点によりややばらつきが見られた。

5層：牛のスネローム層(旧IV層)

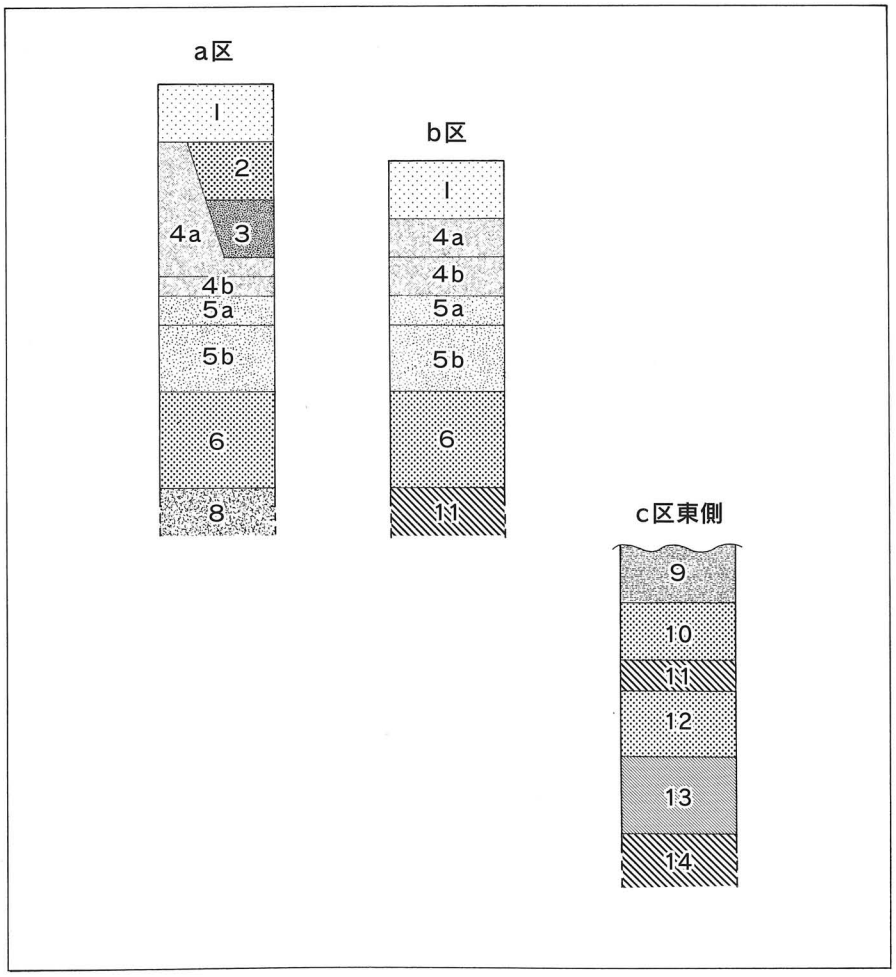
アカホヤ火山灰層下位の、非常に硬質な層である。この層は上位と下位で土質が異なる。

5a層：上位

4層と5層の漸移的な層である。層は大変硬質であり、粘性に富む。色調はやや緑がかっており、4層下位に見られるオレンジ色の粒子や、５ｂ層に多い白色のパミスが多く含まれる。なお、この層から遺物が認められる。堆積の厚さは約15cmであった。

5b層：下位

黒褐色の層である。非常に硬質であり、粘性に富む。層中には白色のパミスが高密度で混入していた。本遺跡において、最も遺物が確認された層である。堆積の厚さは約30cmもあったため、今回の調査では、上部と下部に分けて報告した。



第４図　土層柱状模式図

６層：縄文早期ローム層(旧Ⅴ層)

暗褐色の層である。層は５ｂ層に比べ軟質である。粘性に富み、土質は粘土のようである。堆積は、地点によりややばらつきがあるが30～50cmもあった。遺物の出土は層の上位～中位であり、下位からの出土は皆無であった。

７層：礫層(旧Ⅵ層)

茶褐色のローム層中に、指頭大の礫が多く混入する。礫の形態は円形と角礫の両方があり、石材も砂岩や粗悪なチャート等多岐にわたる。本遺跡の立地する傾斜面は、背後に山地を控えており、山地からの土砂崩れの際に流れ出たものと思われる。

８層：小林降下軽石層(旧Ⅶ層)

調査区を深掘した時に下層より認められた。層は硬く、粘性に富んでいる。層中には、白色や橙色の軟質粒子が中量、火山ガラスが少量含まれる。これらの混入物の密度は部分的に偏りがあり、密度の高い部分は、より硬く締まっている。堆積は約20cmであった。

９層：火山灰層(旧Ⅷ層)

これより下位は調査区内では認められず、ｃ区の東側断面でのみ確認された層である。

このテフラは、恐らく姶良丹沢火山灰であろうと思われるが、本野原遺跡では、姶良丹沢火山灰が斜面上では流出により殆ど残されず、調査区一帯に分厚く堆積していたテフラは、更に古い阿多火砕流であった。本遺跡は本野原遺跡に近い位置にあり、地形も北側への傾斜面上にあることから、この7層が阿多火砕流である可能性もある。ただし、本野原遺跡の阿多火砕流に混入していた焼礫の混入が見られなかったことから、この層は姶良丹沢火山灰と判断したい。

10層：礫層

7層に類似した層であるが、7層よりも大ぶりの礫が混入する。ただし、拳大を超えるものは含まれない。礫の密度も7層より高い。

11層：黒色土層

硬く締まっており、粘性に富む。上下を礫層に挟まれているが、層中に礫は含まれない。断面から遺物等は確認されなかった。

12層：礫層

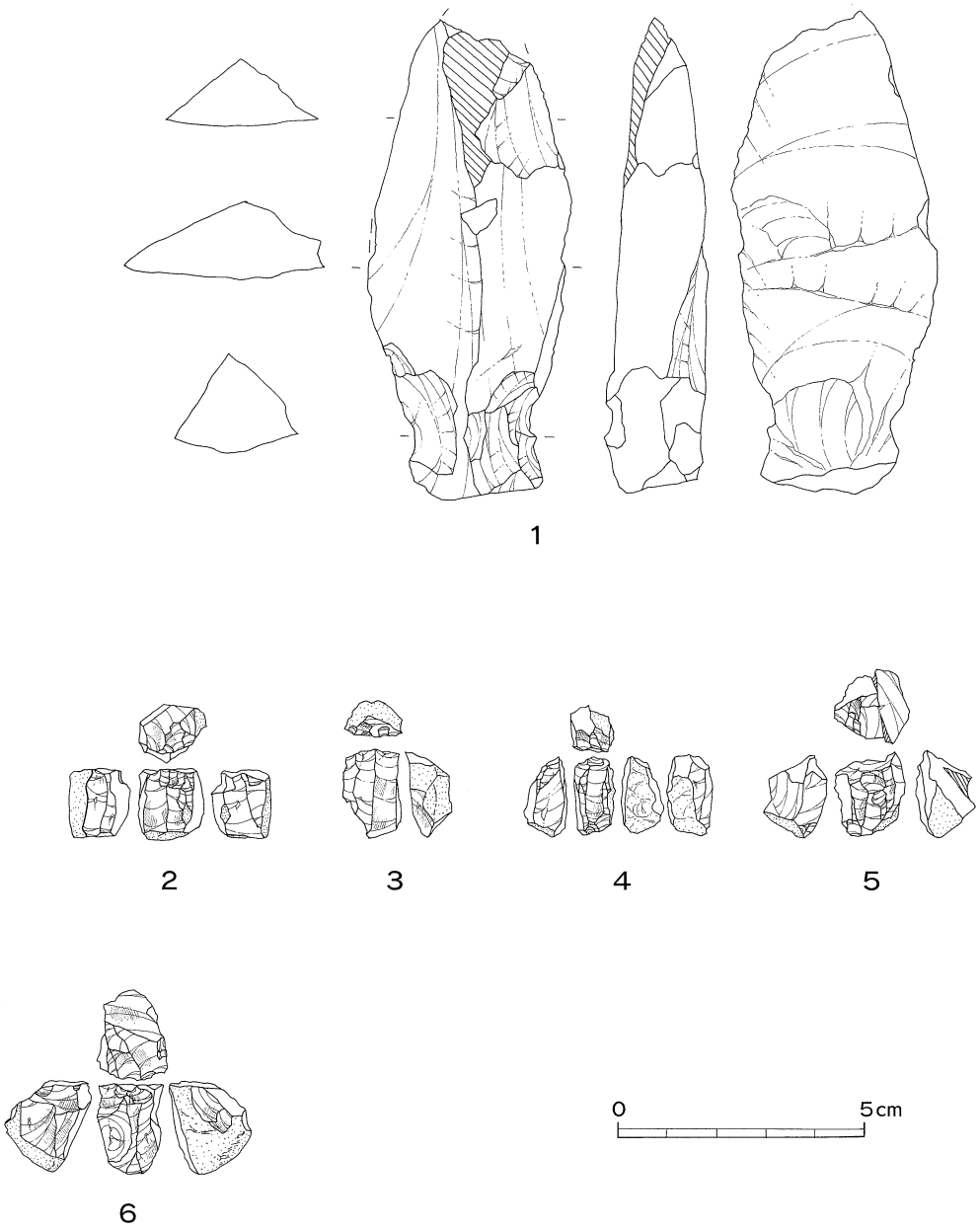
10層よりも礫の密度が高く、また礫の大きさも人頭大ほどである。

13層：黄褐色粘質土層

大変硬く締まっており、粘性に富む。層中には、指頭大の礫が中量混入する。

14層：黒色土層

土質は11層と殆ど同じである。調査区断面の最下部で部分的に確認された。



第５図　旧石器時代遺物実測図

第３節　旧石器時代の遺物

遺構は確認できず、遺物も明確なものは数点のみであった。以下、説明を加えたい。

剥片尖頭器（第5図１）

両縁からの大まかな剥離により生じた稜を利用して、平坦面から加撃を行い作出された縦長剥片のポジ面上部から剥離を行い、尖頭器の基部としたものである。ただし、この基部調整は大まかな剥離のままであることから、製作途中で放棄されたと考えられる。尖端部は、節理面より欠損したと思われる。砂岩製。

細石核(第5図2～6)

5点出土した。(2)は、指先大の小型の礫を用い、打面調整を行った後に細石刃を剥離したものである。礫面は背面に認められるだけでなく、作業面にも残されていることから、細石刃は数枚しか剥離していないと考えられる。石材は、上青木･桑ノ木津留地域の黒曜石に類似する。(3・4)も、背面に礫面を持ち、打面調整を行った痕跡が見られる。 石核は柱状を呈しており、 細石刃の剥離が極限まで行われたことを示している。石材は、上青木･桑ノ木津留地域の黒曜石に類似する。(5)は、上部を細石刃剥離作業中に失っているため、本来の作業面は更に長かったと考えられる。 剥離面は欠損部にも見られ、 欠損後も打面を転移し細石刃剥離作業を継続させようとした意図が窺える。市来地域の黒曜石に類似する。(6)は、打面･作業面の成形を終え、打面調整を行った段階で放棄されたブランクである。山野地域の黒曜石に類似する。

第４節　縄文時代の遺構と遺物

Ⅰ.検出遺構

集石遺構(第11～15図)

22基検出された。20基はｂ区、残る2基はｃ区で検出された。半数以上が掘り込みを持つが、いずれも深さ30cmを越えない浅いものであり、 大ぶりの礫による底石は、 2基しか認められない。 これら集石遺構の検出面はいずれも５ａ～５ｂ層であり、アカホヤ火山灰層直下であった。なお、遺構ごとの観察結果は表１のとおりである。

土坑(第15図)

8基検出された。5基がｂ区、残る3基はｃ区で検出された。ｂ区の遺構は楕円形を呈するものが多いが、覆土はSC-24がアカホヤ火山灰であるのに対し、他は御池火山灰であることから、時期差が考えられる。また、ｃ区より検出された3基は、覆土にアカホヤ火山灰層が含まれる。なお、遺構ごとの観察結果は表２のとおりである。

Ⅱ.出土遺物

遺構内出土遺物(第16図)

(7)の外面は、刷毛目状の工具による斜位の条痕が認められる。後述する土器の分類基準ではＸⅡC類に相当する。(8)の外面には横位の条痕が施される。小片であるため、分類は不可能である。

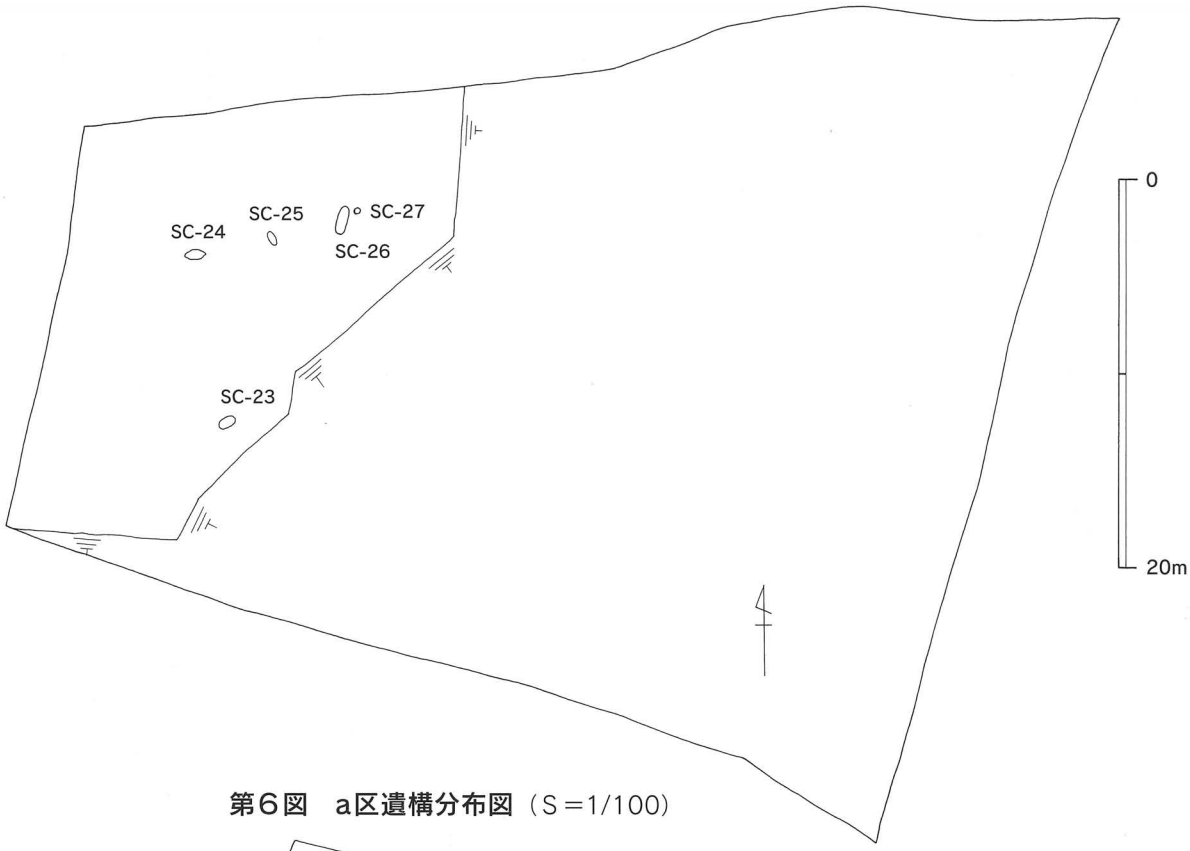
土器

Ⅰ類：隆帯爪形文土器(第17図9・10)

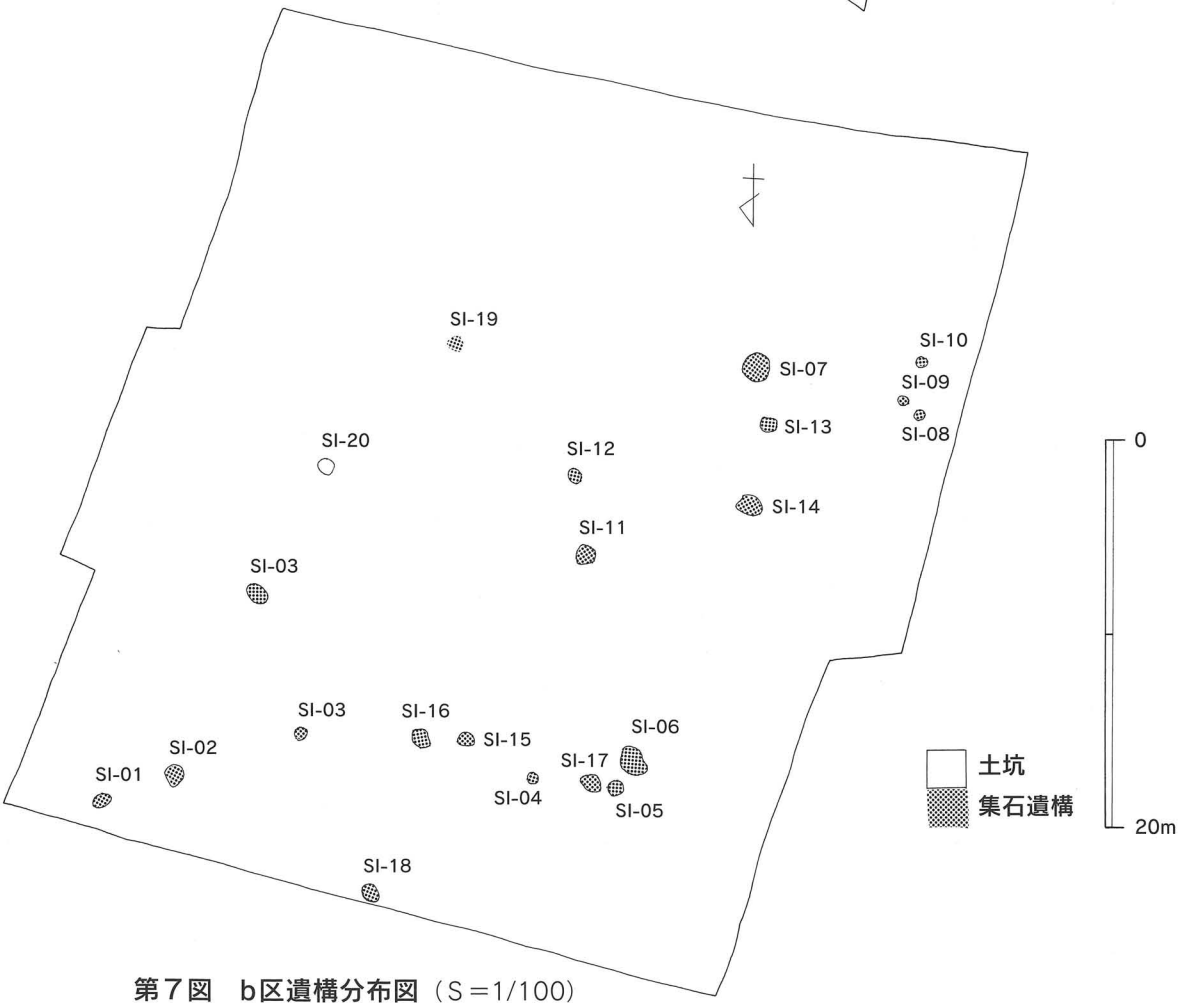
小片であるため、器形は不明であるが、これまでの事例から、口縁部付近と考えられる。粘土紐を貼り付け、羽状の刺突を密に行うことにより微隆起を作出する。

Ⅱ類：岩本式土器(第17図11)

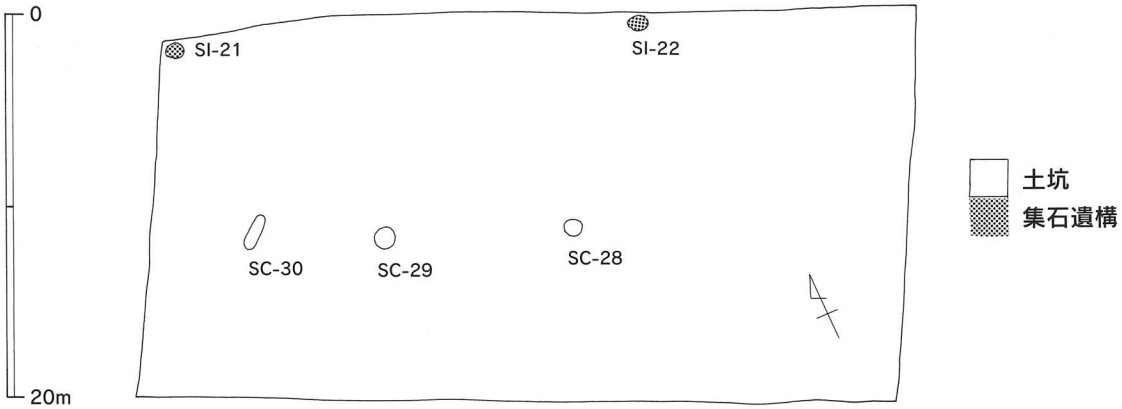
口唇部は内傾し、口縁直下に横位の貝殻腹縁刺突を施文する。口縁部と口唇部の境に、浅い刺突を一定間隔に行なう。



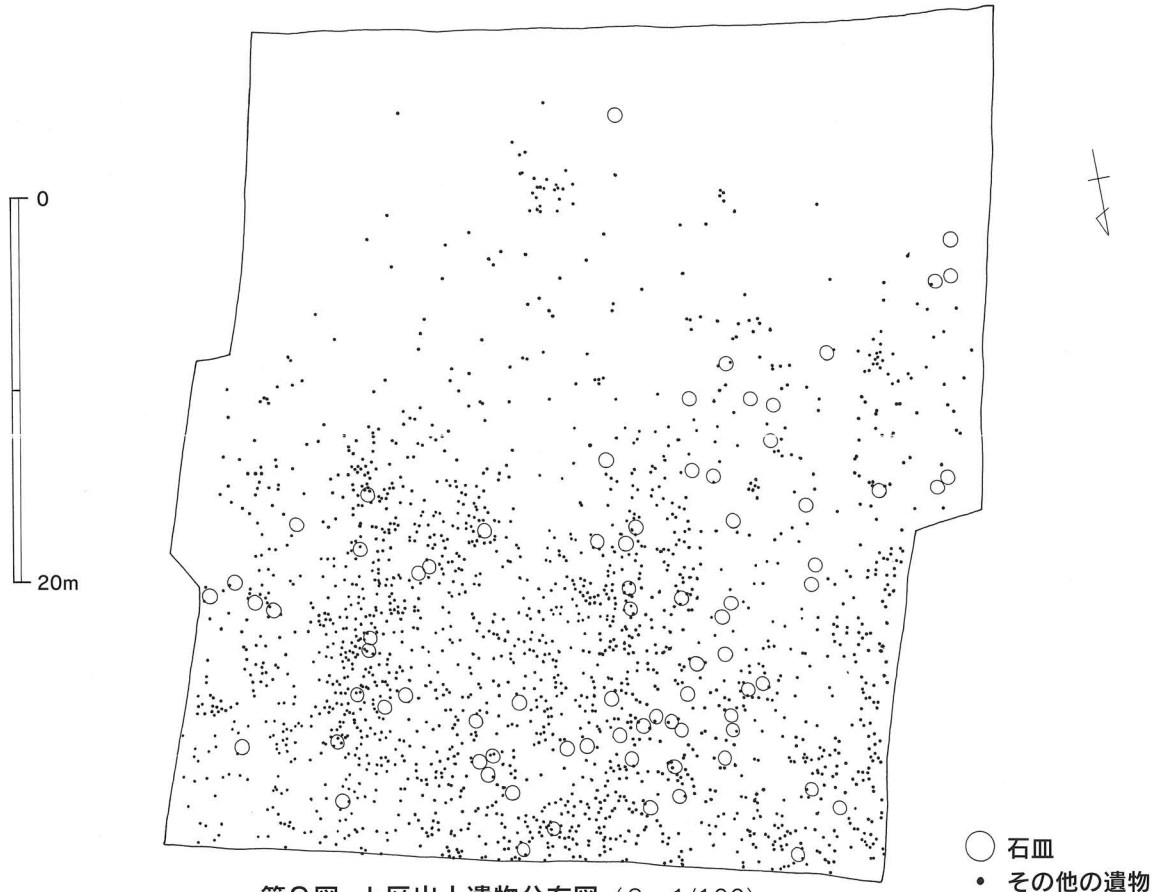
第6図　a区遺構分布図（S＝1/100）



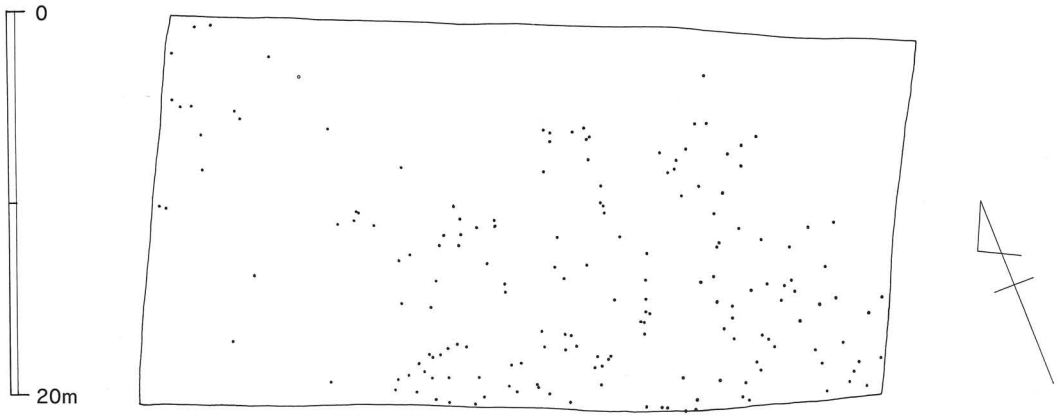
第7図　b区遺構分布図（S＝1/100）



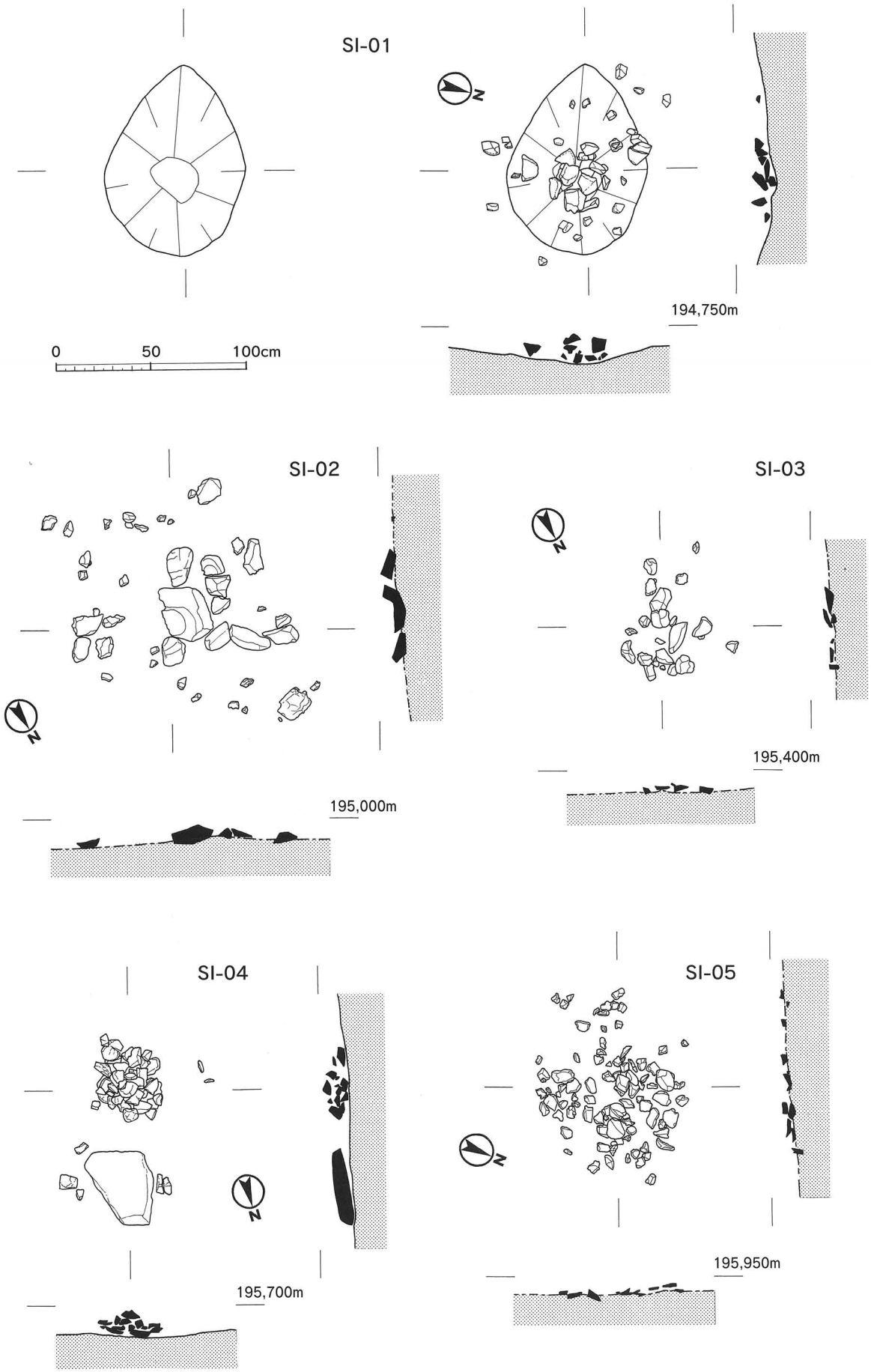
第８図　c区遺構分布図（S＝1/100）



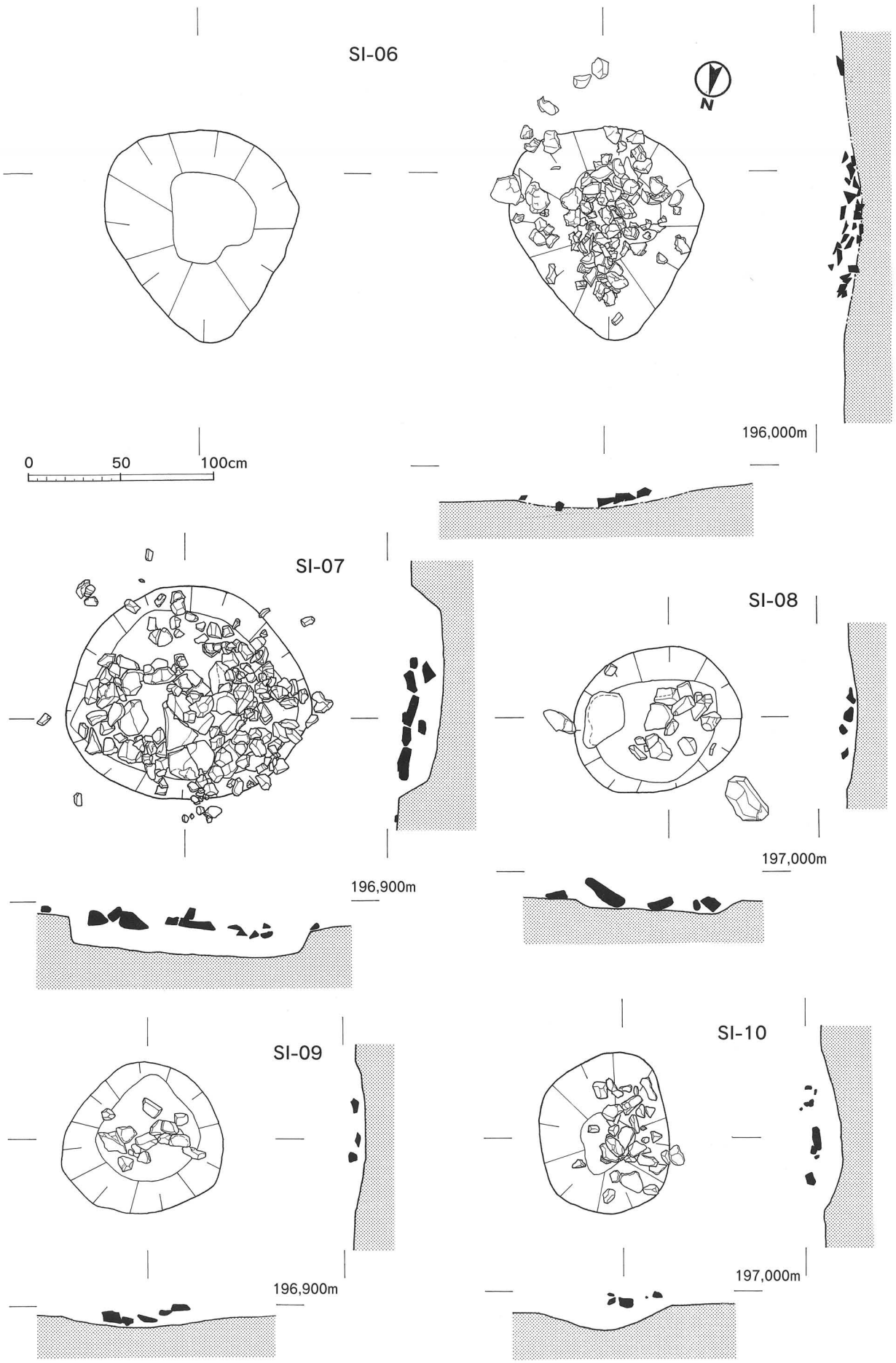
第９図　b区出土遺物分布図（S＝1/100）



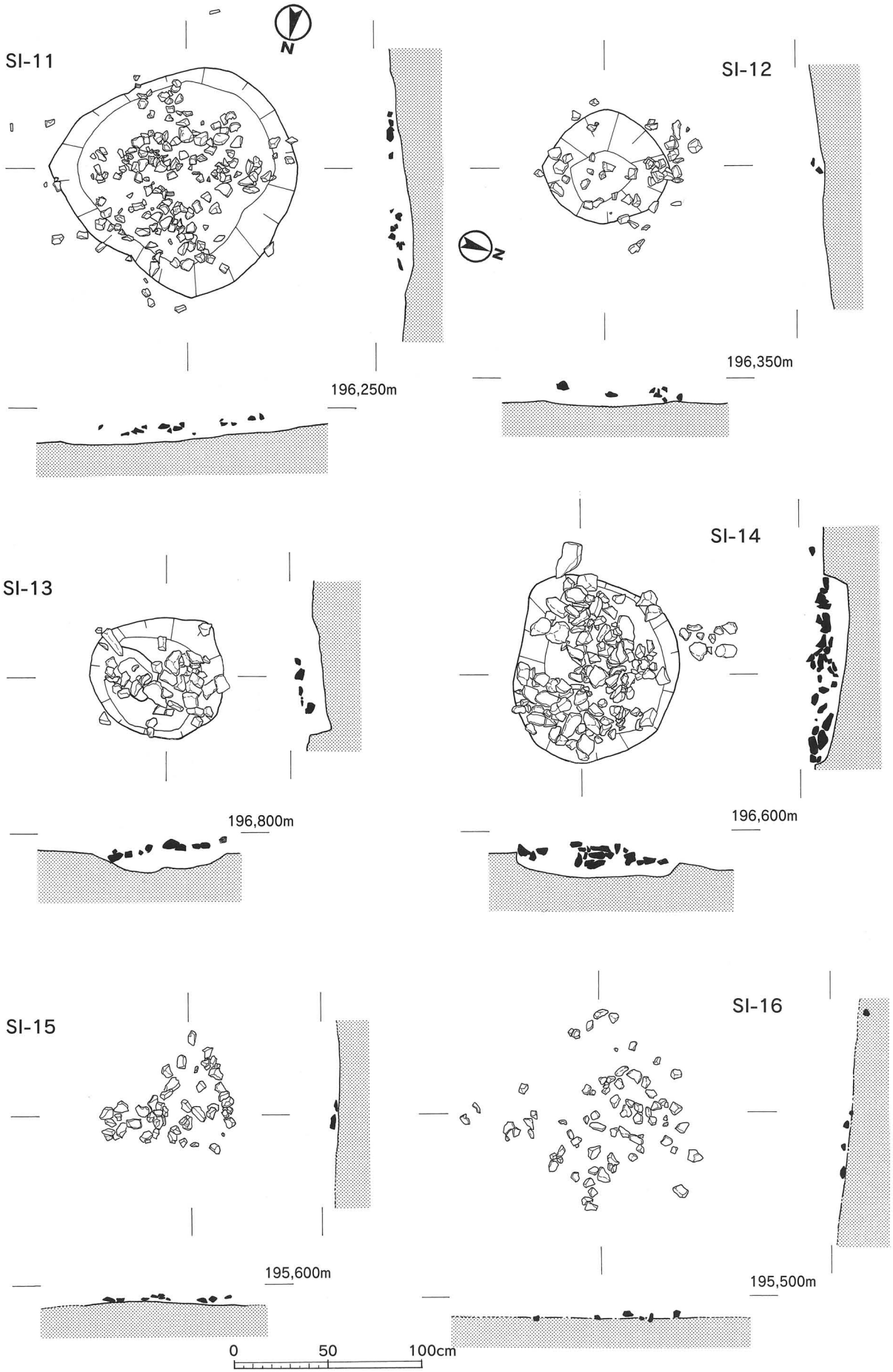
第10図　c区出土遺物分布図（S＝1/100）



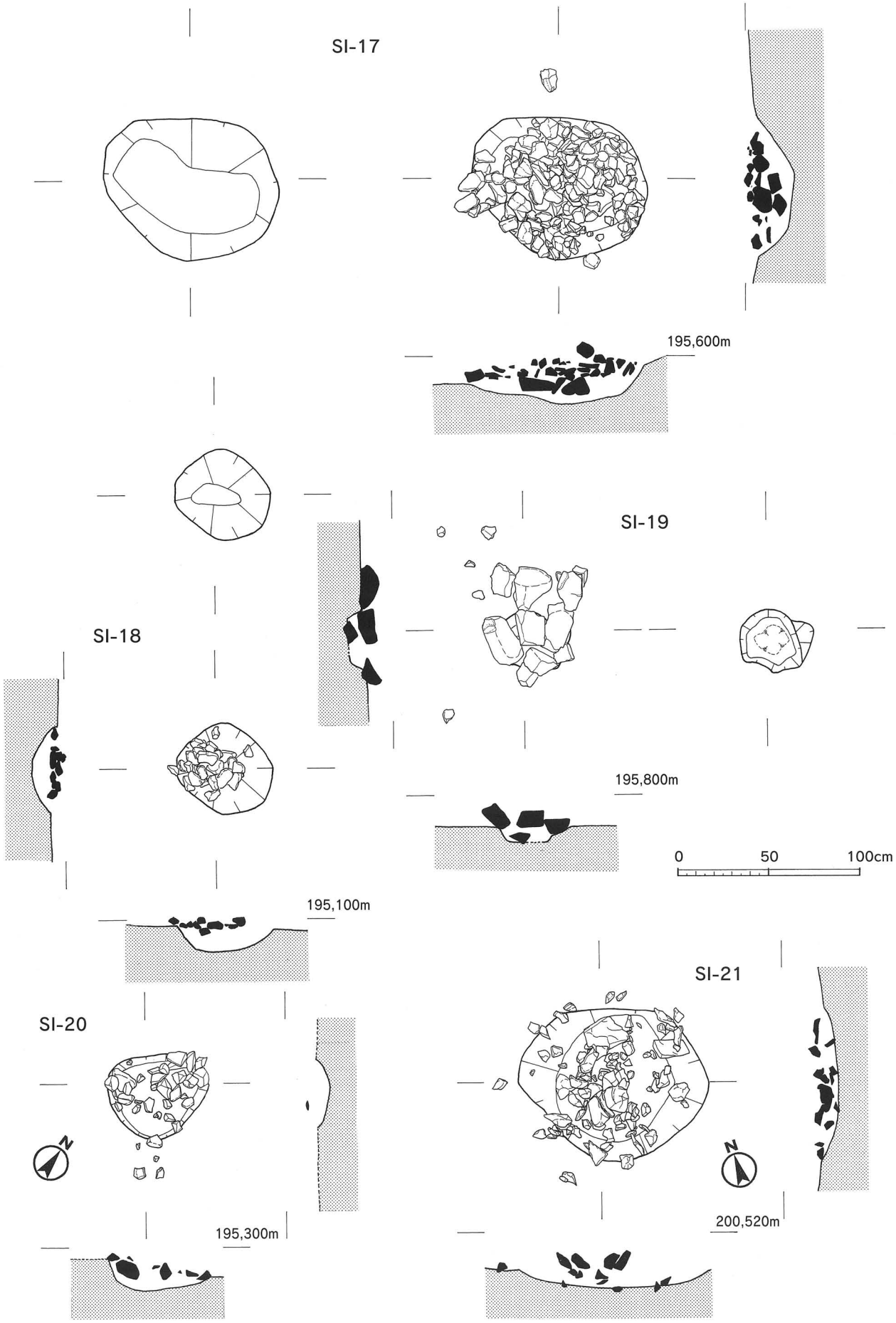
第11図　集石遺構実測図



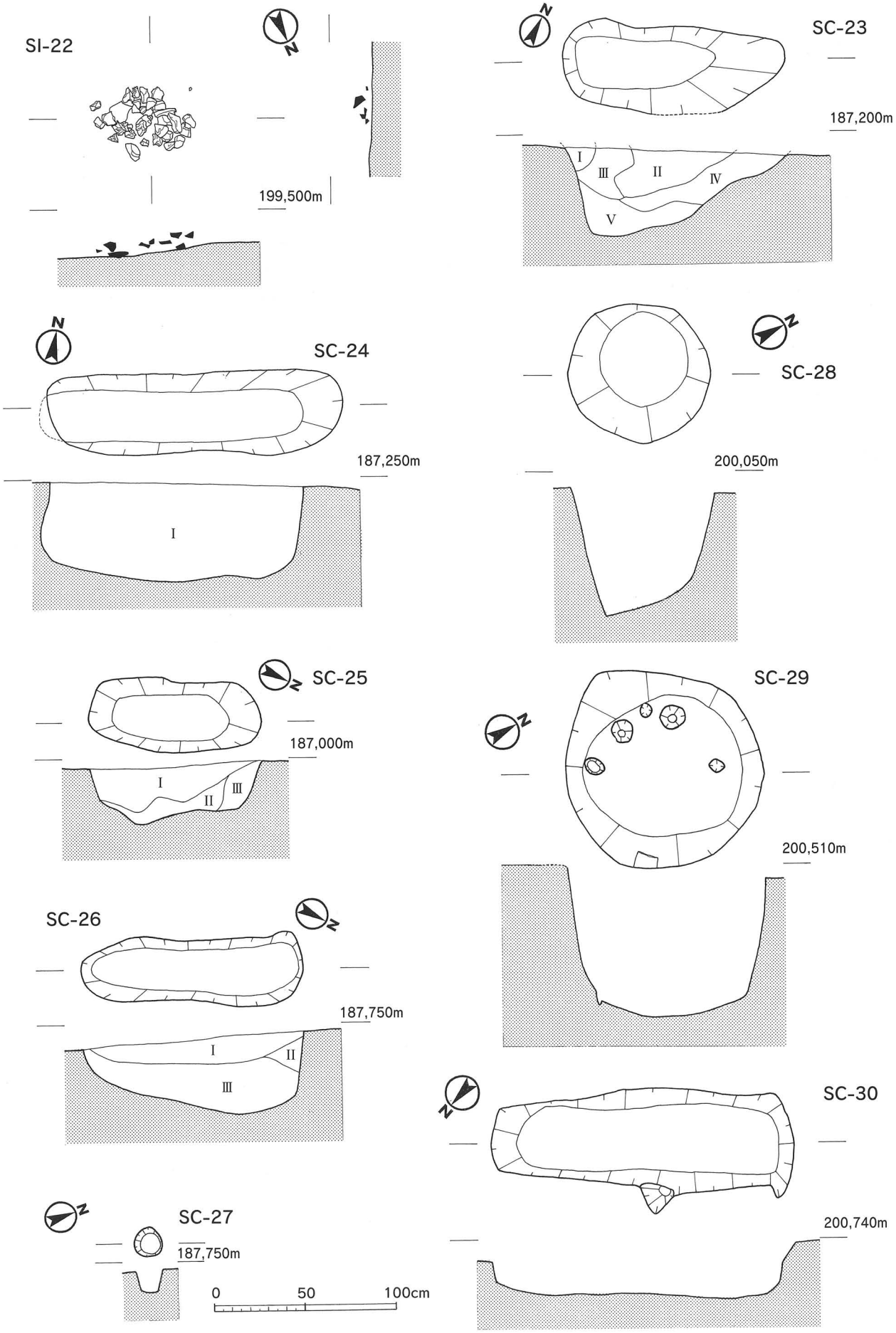
第12図　集石遺構実測図



第13図　集石遺構実測図



第14図　集石遺構実測図



第15図　集石遺構・土坑実測図

表１　集石遺構観察表

遺構No	区	出土遺物	礫		掘込		配石の有無	炭化物の有無	備　考
			礫の範囲(m)	礫密度	規模(m)	深さ(m)			
SI-01	b	—	1.05×0,99	粗	0.99×0.74	0.09	×	—	
SI-02	b	—	1.46×1.28	粗	—	—	×	—	
SI-03	b	—	0.77×0.72	粗	—	—	×	—	
SI-04	b	—	1.01×0.83	密	—	—	×	—	
SI-05	b	1点(XⅡC類)	1.04×0.81	密	—	—	×	—	
SI-06	b	1点(不明)	1.44×1.08	密	1.07×1.04	0.12	×	—	
SI-07	b	—	1.59×1.47	密	1.32×1.14	0.26	○	—	
SI-08	b	—	1.22×0.84	粗	0.90×0.77	0.09	×	—	
SI-09	b	—	0.58×0.39	粗	0.87×0.81	0.06	×	—	
SI-10	b	—	0.68×0.60	粗	0.87×0.71	0.14	×	—	
SI-11	b	—	1.61×1.53	粗	1.32×1.22	0.12	×	—	
SI-12	b	—	0.89×0.83	粗	0.68×0.60	0.12	×	—	
SI-13	b	—	0.72×0.62	粗	0.71×0.65	0.12	×	—	
SI-14	b	—	1.20×1.16	密	1.01×0.89	0.2	×	—	
SI-15	b	—	0.72×0.66	粗	—	—	×	—	
SI-16	b	—	1.29×1.07	粗	—	—	×	—	
SI-17	b	—	1.11×1.07	密	0.97×0.78	0.26	○	—	
SI-18	b	—	0.47×0.41	密	0.53×0.50	0.15	×	—	
SI-19	b	—	1.08×0.83	粗	0.41×0.35	0.12	×	—	大ぶりの礫のみで構成 掘込内に水穴あり
SI-20	b	—	0.71×0.57	粗	0.47×0.47	0.18	×	—	
SI-21	c	—	1.08×1.07	密	1.04×0.84	0.18	×	—	
SI-22	c	—	0.58×0.41	密	—	—	×	—	

表２　土坑観察表

遺構No	区	出土遺物	プラン	サイズ(m)	深さ(m)	備　考
SC-23	a	—	やや歪な楕円形	1.22×0.53	0.5	
SC-24	a	—	楕円形	1.67×0.47	0.56	
SC-25	a	—	やや歪な楕円形	0.95×0.41	0.3	
SC-26	a	—	やや歪な楕円形	1.22×0.41	0.46	
SC-27	a	—	円形	0.17×0.15	0.14	大きさはピットに近い
SC-28	c	—	円形	0.78×0.77	0.71	
SC-29	c	—	円形	1.08×1.08	0.84	底面に小ピットあり
SC-30	c	—	楕円形	1.65×0.69	0.32	壁際に小ピットあり

表３　土坑覆土注記

SC-23　Ⅰ層　10YR暗褐３/３

軟質である。表面はやや湿っており、粘性僅か。層中にはパミスが多く含まれる。植物の根が複雑に入り込む。層は斑紋がが強い。

Ⅱ層　10YR黄褐５/６

やや軟質である。表面は湿っており、粘性強い。層中にはパミスが密に含まれており、中でも１cmを超えるものが目立つ。他に火山ガラスが微量認められる。層は斑紋が強い。

Ⅲ層　10YR黄褐５/６

軟質である。粘性が強い。層中には、大小のパミスが多く含まれる。他に、炭化物片と火山ガラスを少量、砂粒を微量含む。層は、斑紋が強い。

Ⅴ層　10YR褐４/４

軟質である。湿っており、粘性に富む。層中には、パミスの混入は認められず、ガラス質粒子が少量、白色粒子が微量含まれる。

SC-24　Ⅰ層　10YR暗褐５/６

軟質である。渇いており、粘性は殆どない。層中には火山ガラスが多量に認められるほか、大小のパミス片も多く含まれる。周辺に堆積するアカホヤの１次堆積よりは色調が暗いため、２次堆積と思われるが、通常の２次堆積とは異なり、時間の経過と共にオガクズ状に崩れ落ちない。

SC-25　Ⅰ層　10YRにぶい黄褐５/４

やや軟質であり、湿り気は殆どないが、粘性は僅かにある。層中には、大小のパミスが少量、オレンジ色の軟質粒子が少量含まれる。他に、植物の根も複雑に入りこむ。

Ⅱ層　10YR褐４/４

やや軟質である。湿っており、粘性に富む。層中には、パミスが少量含まれるのみである。斑紋は弱く。色調の差が小さい。

SC-26　Ⅰ層　10YR暗褐３/３

軟質である、湿り気はないが、粘性はある。層中には、２cm大のパミスが密集しているほか、火山ガラスも多量含まれる。これら混入物の密度が高いため、層の色調は安定している。

Ⅱ層　10YR暗褐３/３

軟質である。湿り気はないが、粘性はある。層中にはパミスが多量混入するほか、火山ガラスも少量含まれる。パミスの密度によって、Ⅰ層との分層が可能である。

Ⅲ層　10YR黄褐５/６

軟質である。湿り気はないが、粘性に富む。層中には、パミス、火山ガラス、白色粒子、黒色粒子が多量含まれる。

Ⅲ類：前平式土器

２種に細分が可能である。

ⅢA類：貝殻腹縁による刺突を行う土器(第17図12)

胴部から口縁にかけて僅かに外反する器形を呈する。口唇部はやや丸みを帯び、口縁直下に貝殻腹縁刺突を１列施文する。外面の全面に横位～斜位の条痕が認められる。

ⅢB類：工具による刺突を行う土器(第17図13～18)

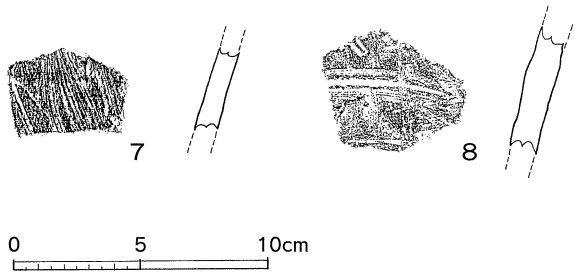
胴部から口縁にかけて、器形の変化は殆どない。口唇部は、(13)はほぼ水平であるが、(14)はやや外傾、(15)はやや内傾、(16)は著しく内傾する。口縁直下には工具による2列の刺突が行われるが、(13・15)の刺突は、縦位の短沈線状に施文される。また、(14)の下段に行われる刺突は、貝殻腹縁らしき施文具が使用される。外面の条痕は著しく深い。

Ⅳ類：別府原式土器(第17図19)

小片であるため、器形は不明である。斜位の浅い貝殻条痕が施される。

Ⅴ類：下剥峯・桑ノ丸式土器

3種に細分が可能である。



第16図　遺構内出土遺物実測図

VA類：下剥峯式土器(第17図20・21)

(20)は、胴部より大きく開きながら、口縁部で急激に内湾する器形を呈する。口唇部には平坦面が設けられる。(21)も口縁部で内湾する器形を呈し、口唇部が内湾する。どちらの外面にも、櫛状の工具による羽状の刺突が施文される。

VB類：桑ノ丸式土器(第17図22)

小片であるため、器形や施文の規則性は定かでない。数本単位突出部を持つ工具を押引(ロッキング)した施文が認められる。

VC類：辻タイプ(第17図23)

これも小片であるため、器形は定かでない。外面には、櫛状の工具による刺突と、羽状の短沈線が施文される。

Ⅵ類：押型文土器(第17図24～31)

(24)は、外面に斜位の楕円押型文が施文されるほか、内面の上部にも同じ原体と思われる施文が横位に施文される。これは、この土器が口縁部付近であるためと考えられる。(25)も同様に内外面共に同じ原体の施文が巡る。なお、この原体は、ズクノ山第2遺跡F地区でＶｃ類とした「その他の押型文」のうち、(169～171)と同類である。

Ⅶ類：縄文・撚糸文系土器(第18図32～34)

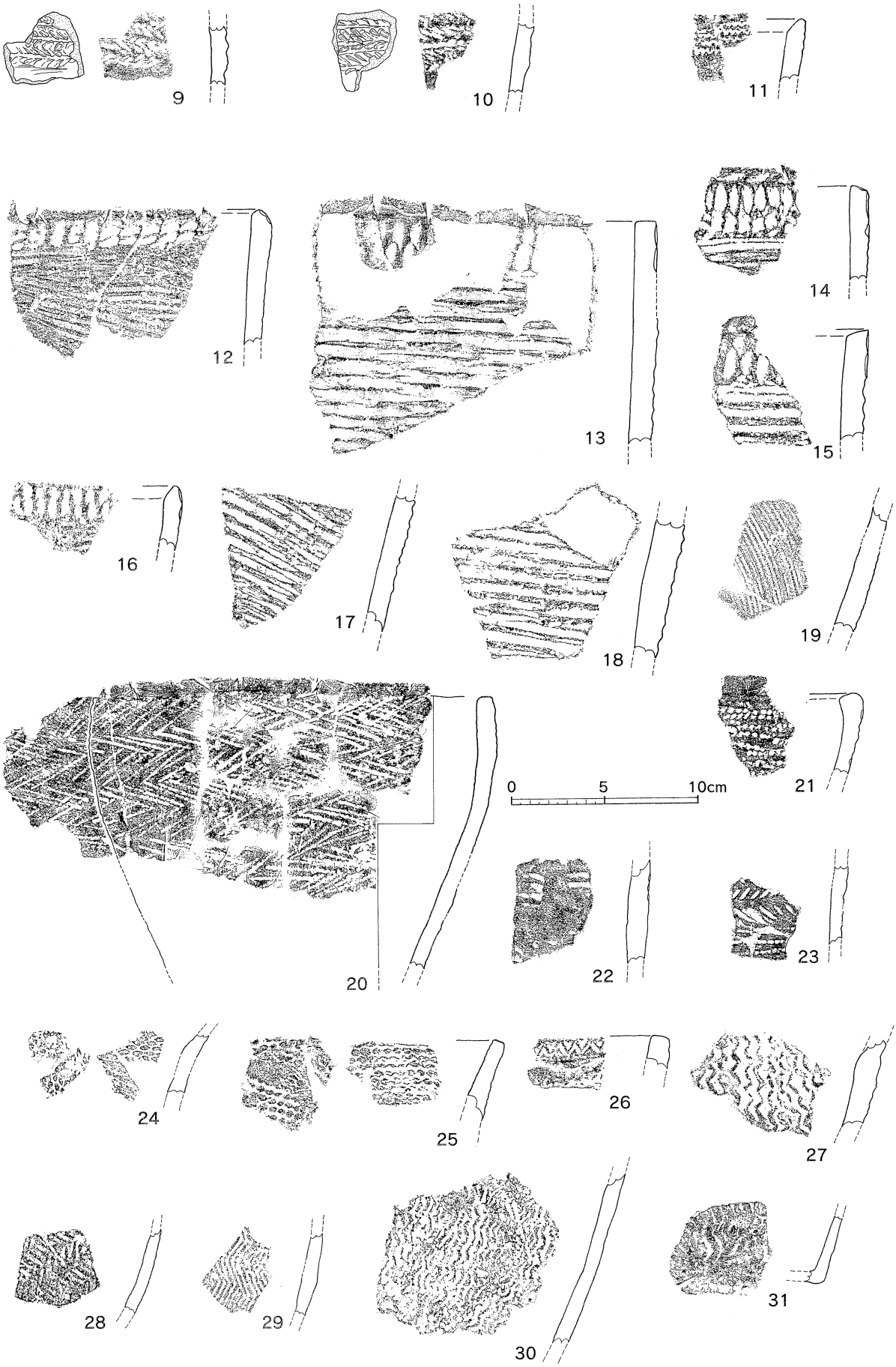
(32・34)は全面に施文される。(32)は縄文ののちに沈線が施文されており、通常の縄文系土器とは異なる。(33)は、撚糸文ののちにミガキが行われる。塞ノ神式の底部付近である可能性も考えられる。

Ⅷ類：手向山式土器(第18図35～39)

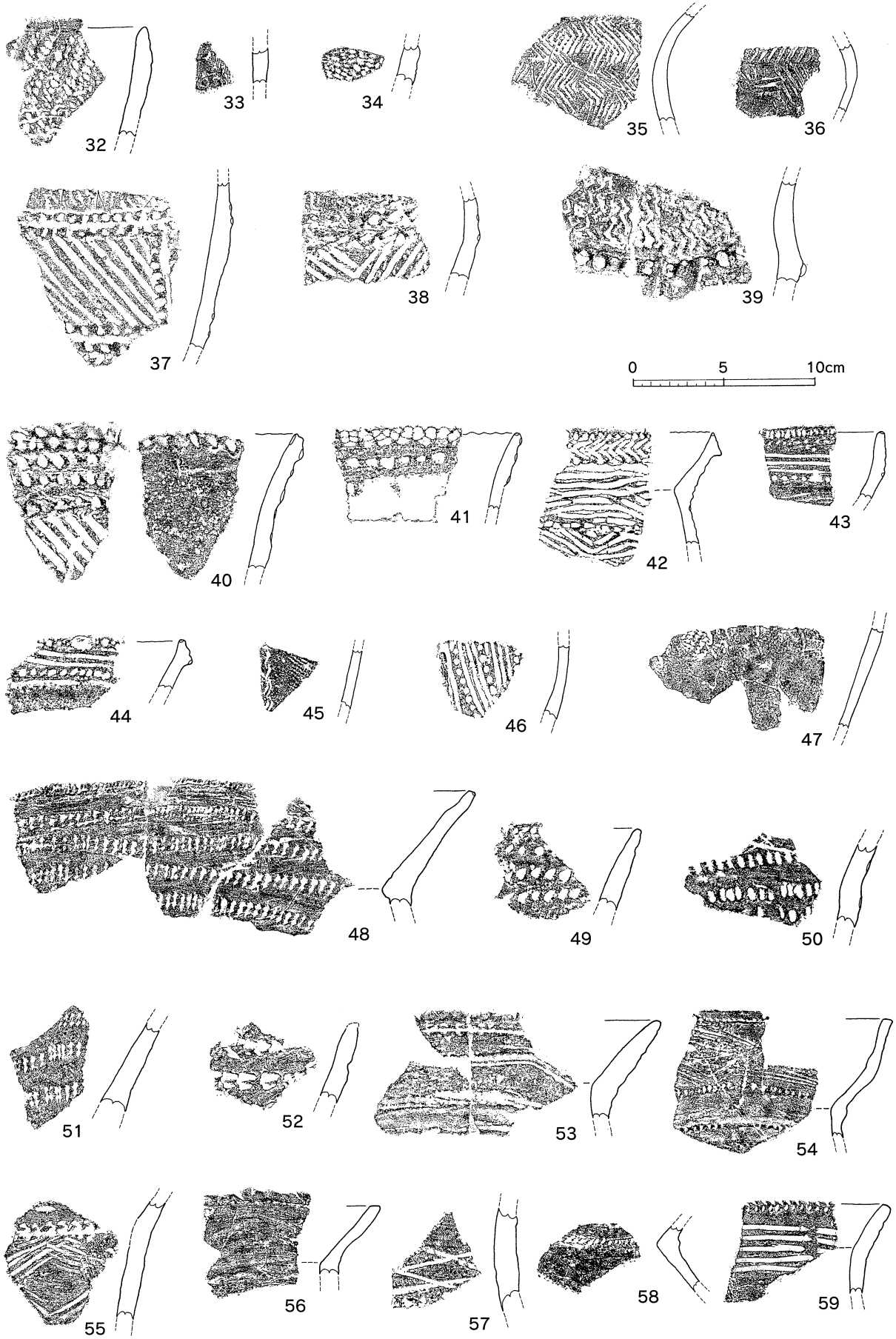
この類の土器は、胴部に稜、若しくは大きな膨らみが設けられ、口縁部が大きく外反する器形と、押型文の文様や隆帯の貼付けを基に判定を行った。(35)は山形文が縦位に施文された口縁部～胴部であり、(36)は多方向からの施文が数回行われた胴部である。(37)は山形文を施文したのち、刻目突帯や沈線が施文される。(39)は山形文を縦位に施文したのち、胴部の稜状に突帯を貼付け、貝殻腹縁状の刻目を行う。

Ⅸ類：平栫式土器

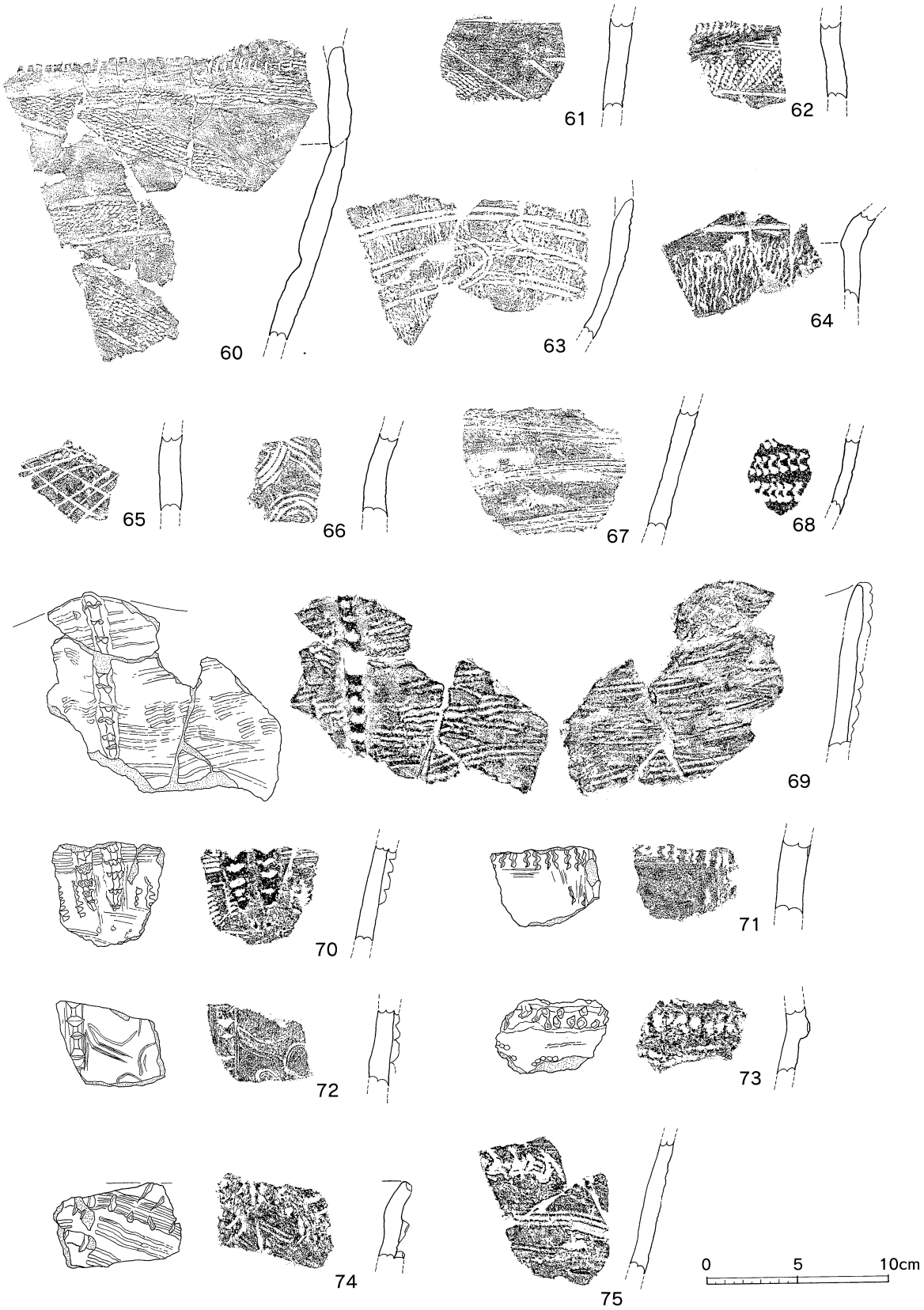
2種に細分が可能である。



第17図　出土土器実測図（1）



第18図　出土土器実測図（2）



第19図　出土土器実測図（3）

ⅨA類：天道ヶ尾式土器(第18図40)

全体的に外反するが、口縁部付近で更に外反が強くなる器形を呈する。明確に確認されたものは１点のみであった。口縁直下には内外面共に斜位の刻目が巡り、口縁部には刻目突帯を数条貼り付ける。更に下位には沈線を施文する。

ⅨB類：平栫式土器(第18図41～47)

口縁部が大きく外反し、頸部と胴部の境界に強い稜を設け、胴部が膨らむ器形を呈する。(41)は、外面の大部分が剥落しているが、この部分に隆帯が数条巡るようであれば、ⅨA類である。(42)は口縁部に断面三角形の肥厚帯が設けられ、羽状の短沈線及び刺突が施文される。頸部以下は沈線や押引が密に施文される。口縁部の文様帯は(43・44)にも認められるが、(43)は屈曲のみで肥厚しない。(45～47)は胴部である。(45)は縄文部と撚糸文部の間に空白が設けられる。(46)は沈線と刺突で構成される。(47)は文様が一部しか残っておらず、縄文と撚糸文の関係は不明瞭である。

Ｘ類：塞ノ神式土器(第18図48～第19図68)

(48～59)は口縁部である。(48～52)は、刺突により構成される。(48・51・52)は貝殻腹縁状の工具が使用されるが、(49・50)は棒状の工具が使用される。(53～55・57・59)は沈線により構成される。(53)は叉状の工具が使用されるが、(54)は細い鋭利な工具が使用されたものであり、刻目を有する微隆起文と組み合わせて施文する。(55)は貝殻腹縁状の工具による刺突と叉状の工具による沈線を使用する。(57)は施文後に丁寧なミガキを行っている。(59)は横位の短沈線を数列にわたって施文する。(56)は無文である。(58)は頸部と胴部の境界に刻目を有する微隆起が設けられる。

(60～68)は胴部である。(60)は胴部上半が膨らんでおり、沈線ののちに縄文が施文される。同様の文様は、(61・62)にも認められる。(63)は、網目状撚糸文を縦位に施文したのち、沈線を施す。(64)は施文が深く、まだ粘土が軟らかいうちに施文されたと考えられる。(65)は鋭利な工具による沈線が格子目状に施文される。(66)は頸部と胴部の境界付近であり、叉状の工具による沈線が施文される。(67)には横位の条痕が施文される。(68)は貝殻腹縁状の工具による刺突が数列施文される。

ＸＩ類：苦浜式土器

4種に細分が可能である。なお、これらは特徴が重複しているものや、同一個体でありながら細分が異なるものも認められた。

ＸＩA類：隆帯を貼付ける土器(第19図69～75)

(69)は僅かに外反しており、波状口縁を呈する。波頂部からは、突帯が口縁に対し垂直に貼り付けられる。突帯には、貝殻腹縁状の工具による刻目が行われる。また、突帯に先んじて貝殻状の条痕を波状に施文する。(70)の施文も基本的には同じであるが、突帯が2列になり、条痕の間に貝殻腹縁刺突が巡る。条痕は直線的である。(71)は器面が磨かれているが、これは底部付近であるためと考えられる。(72)の突帯上刻目は工具によるものであり、貝殻腹縁ではない。器面には、鋭利な工具による浅い沈線が不規則に施文される。(73)の突帯上刻目は、細い棒状の工具を使用したものである。下位には、貝殻腹縁に似た施文具による刺突が行われる。(74)は、粘土の小塊を丸めて貼り付けたものであり、その上に工具による刻目を施す。また、貝殻状の条痕が、強弱をつけて施文される。(75)には突帯は認められないが、(74)と同一個体であることから、この類に含めた。

ＸＩB類：波状の文様を行う土器(第20図76～79)

(76～78)は、いずれも口縁部が僅かに外反する器形を呈する。貝殻腹縁による条痕を施文する中で、同じ原体を用いた波状の条痕を取り混ぜる。(79)は、内面に設けられた稜から外反が強くなるが、施文のパターンは同じである。

ＸＩC類：鋭利な沈線を行う土器(第20図80～84)

いずれも小片であり、器形は定かでない。篦状の工具を用い、横位の波状若しくは直線状の文様を二本単位で描出する。調整は篦状の工具による横位のナデに統一される。

ＸＩD類：貝殻腹縁による刺突・押引を行う土器(第20図85～89)

いずれも小片であり、器形は定かでない。(85)は波状を呈す口縁部であり、貝殻腹縁刺突は、波頂部から垂直に一列、口縁に並行して一列施す。(86)は貝殻腹縁刺突と沈線を横位に施文する。貝殻腹縁刺突は部分的に鋸歯状を呈する。(87)は鋸歯状の貝殻腹縁刺押引を施す。(88)は貝殻腹縁による条痕と鋸歯状の押引を組み合わせる。(89)は貝殻腹縁による通常の押引と鋸歯状の押引を組み合わせる。

ＸⅡ類：条痕文1式

3種に細分が可能である。

ＸⅡA類：条痕を格子目状に行う土器(第20図90～第21図99)

頸部が僅かにくびれ、口縁部が僅かに外反気味となり、胴部が僅かに張る器形を呈する。縦位の条痕を全面に行った後、斜格子目の条痕を加える。口縁部と口唇部の角には浅い刻目が認められる。なお、(96～98)の施文は浅い。

ＸⅡB類：条痕を規則的に行う土器(第21図100～第22図127)

頸部から胴部にかけて変化が乏しい器形であるが、頸部から口縁にかけては外反気味になる点や、外面と口唇部の境界に刻目を行う点は共通した特徴といえる。ただ、外面の条痕にはバリエーションがある。ただし、多くは文様的な条痕の前に、縦位の条痕を行う点や、胴部下半より下位は縦位の条痕をそのまま残す点も共通点といえる。

ＸⅡC類：条痕を不規則に行う土器(第23図128～138)

小片が多く、器形は定かでないが、恐らくＸⅡ類の他の器形と大きな変化はないと思われる。外面の条痕は、相対的に規則性が薄い。

ＸⅢ類：条痕文2式(第23図139～第24図145)

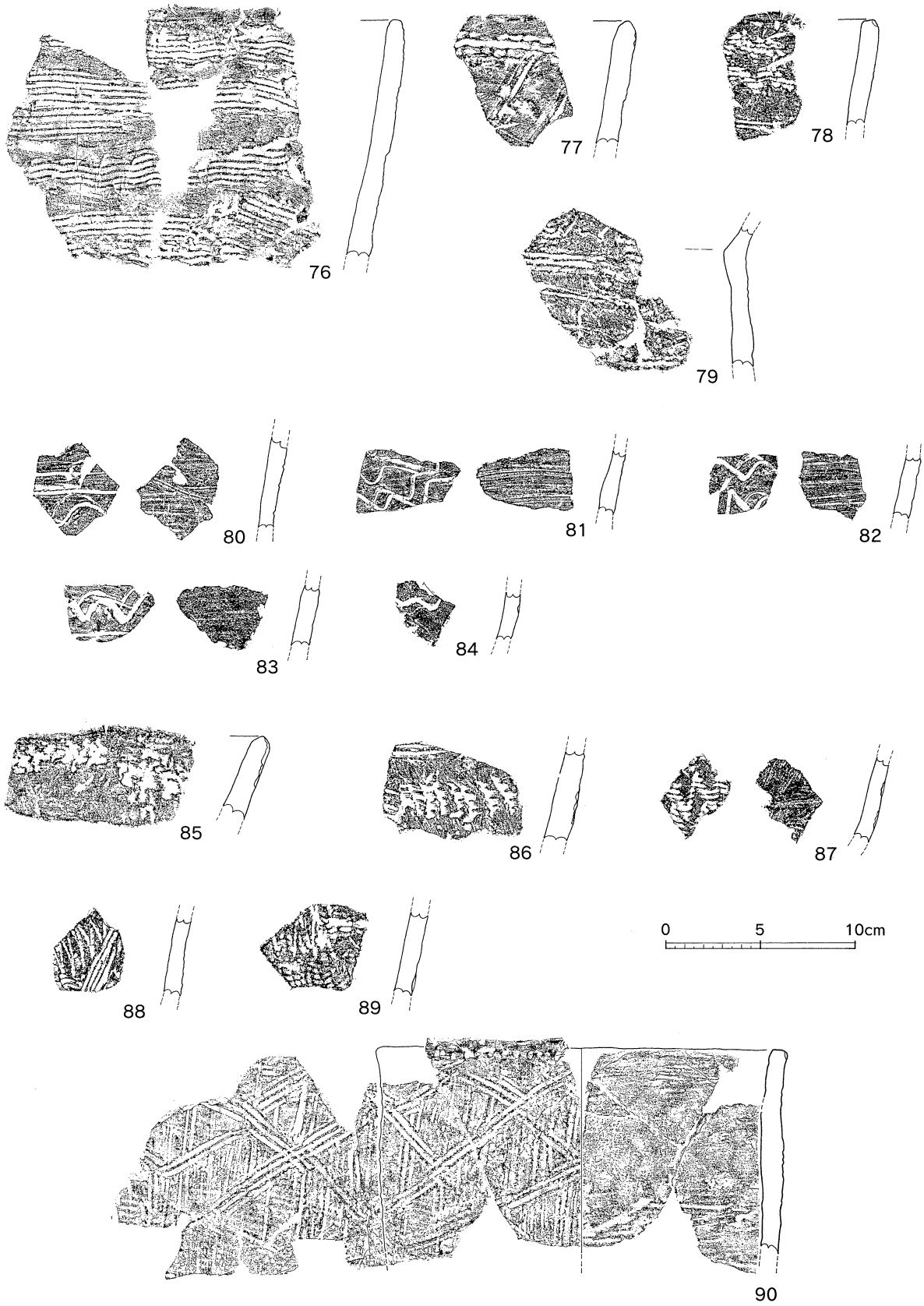
いずれも小片であるため、全体的な器形は定かではないが、口縁部の断面形から、恐らくＸⅡ類と大差ない器形であると考えられる。外面には、幅広の工具による条痕が行われるが、(142～145)は、条痕の断面形が丸いのに対し、その他の断面形は平たい。(139･145)は、この条痕が一定間隔で施されることにより、脇に生じた微隆起による文様が描出されている。

ＸⅣ類：無文土器

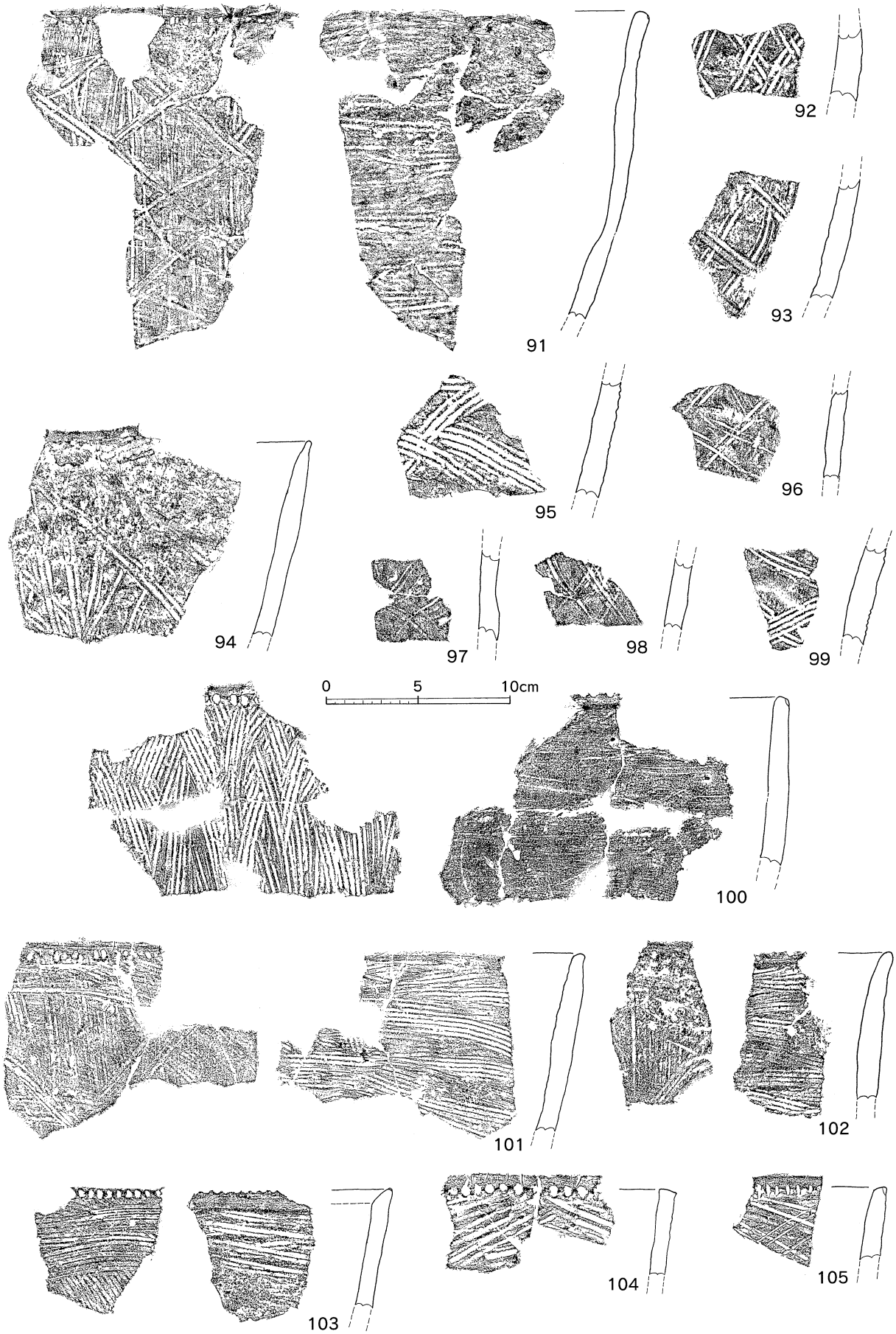
2種に細分が可能である。

ＸⅣA類：薄手の土器(第24図146～155)

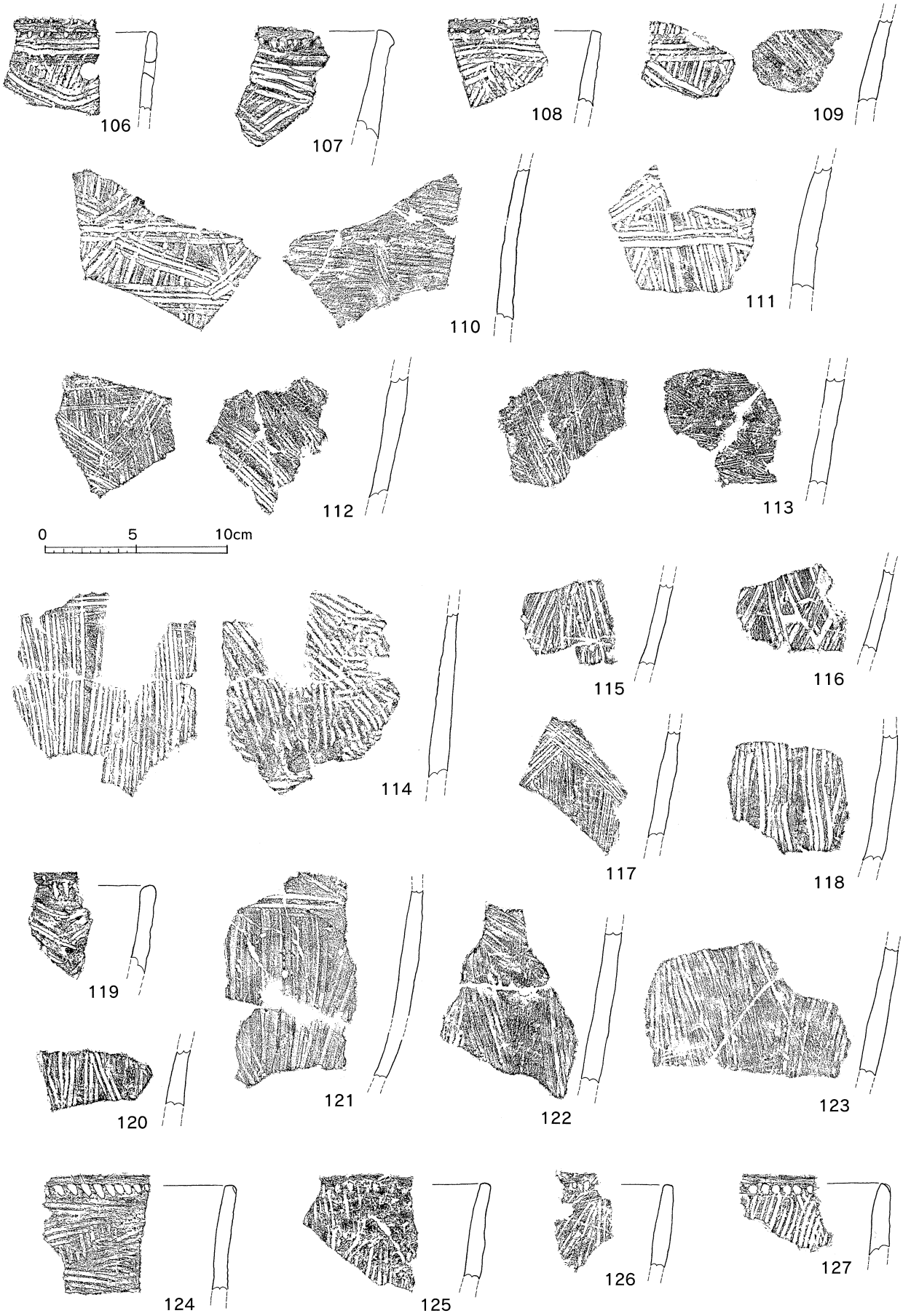
口縁部から胴部にかけて、変化することなく外反する器形を呈する。(147)の口唇部には斜位の刻目が行われるが、それ以外には文様は認められない。(148)の内面には篦による条痕が認められるほか、



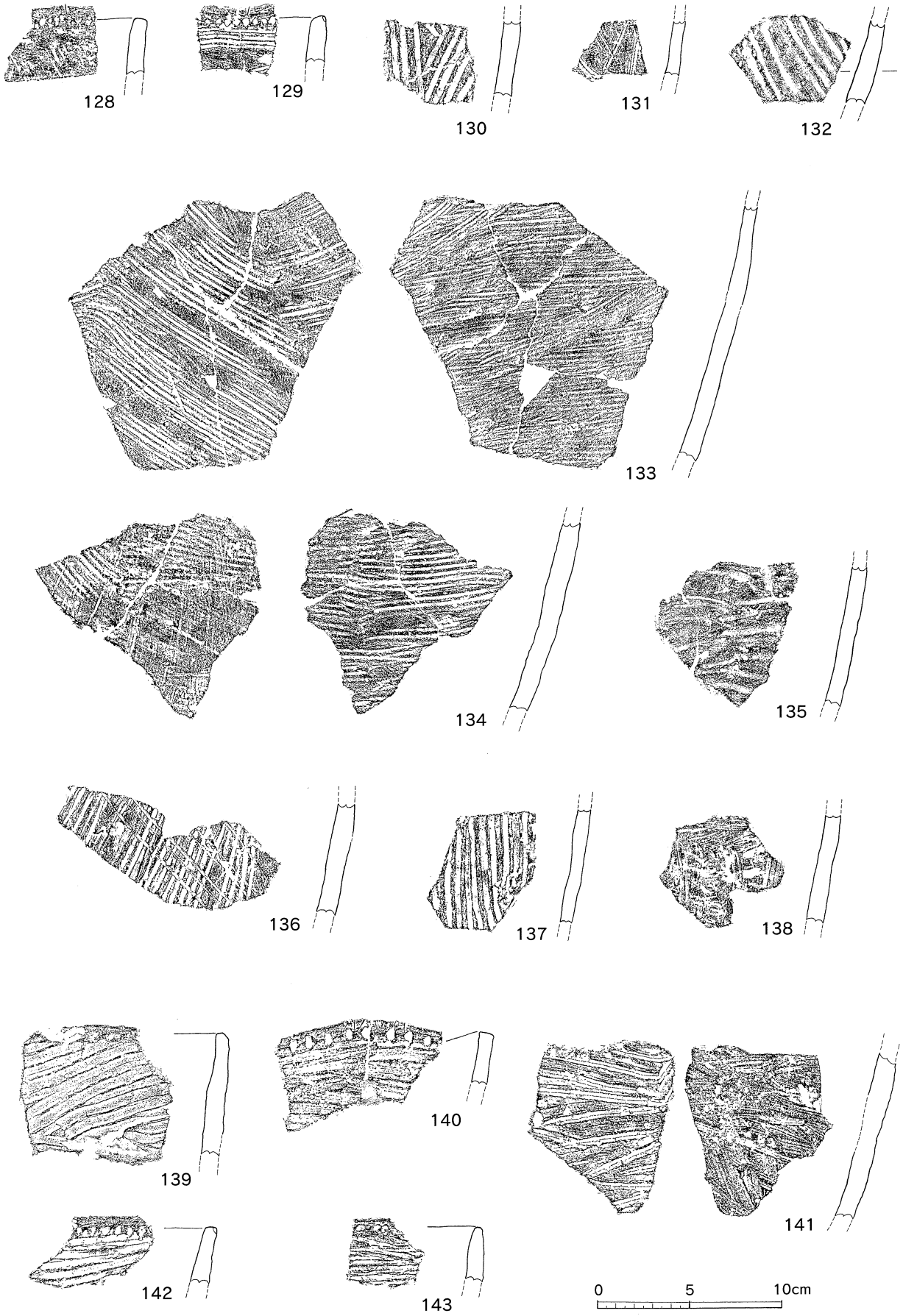
第20図　出土土器実測図（4）



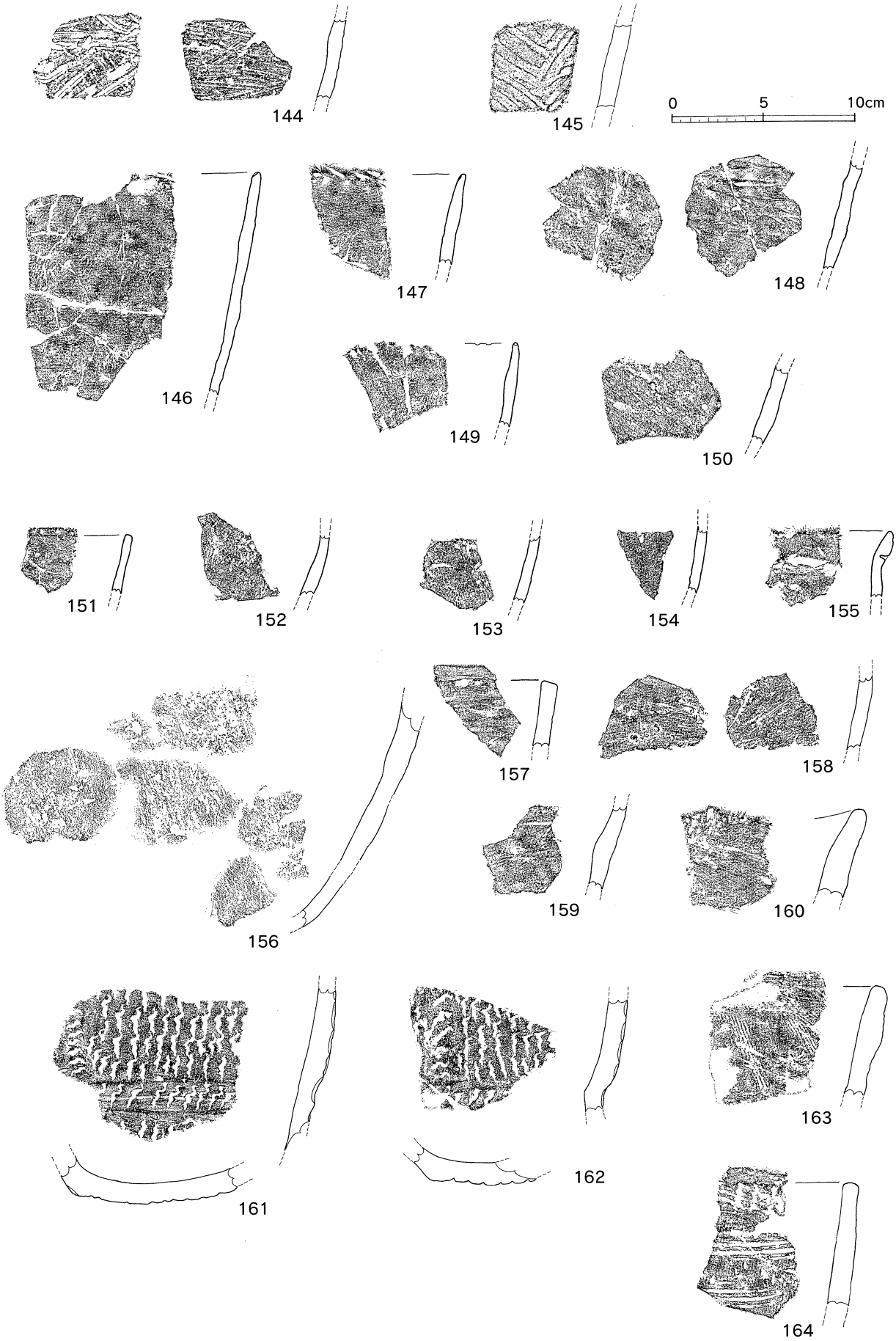
第21図　出土土器実測図（5）



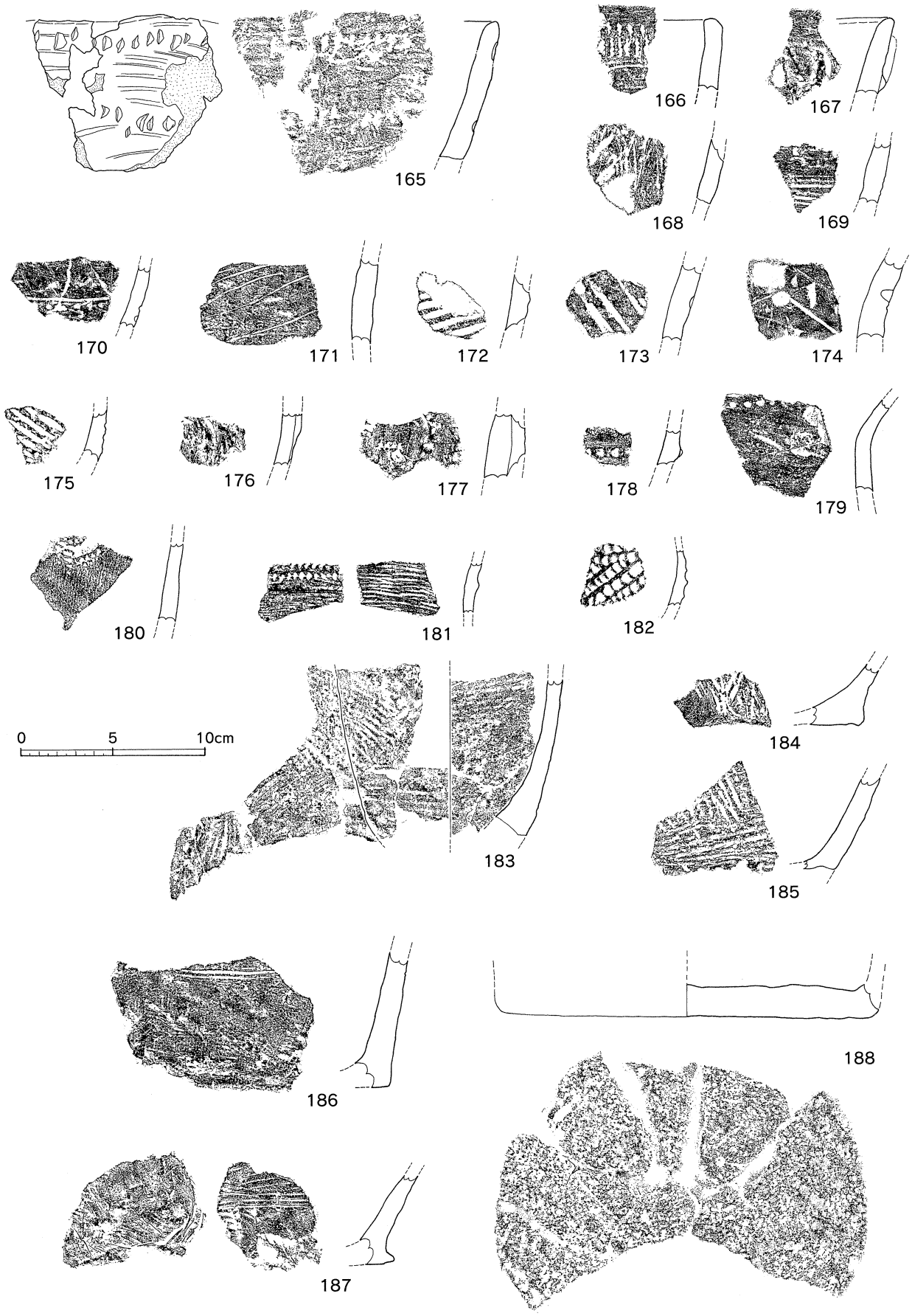
第22図　出土土器実測図（6）



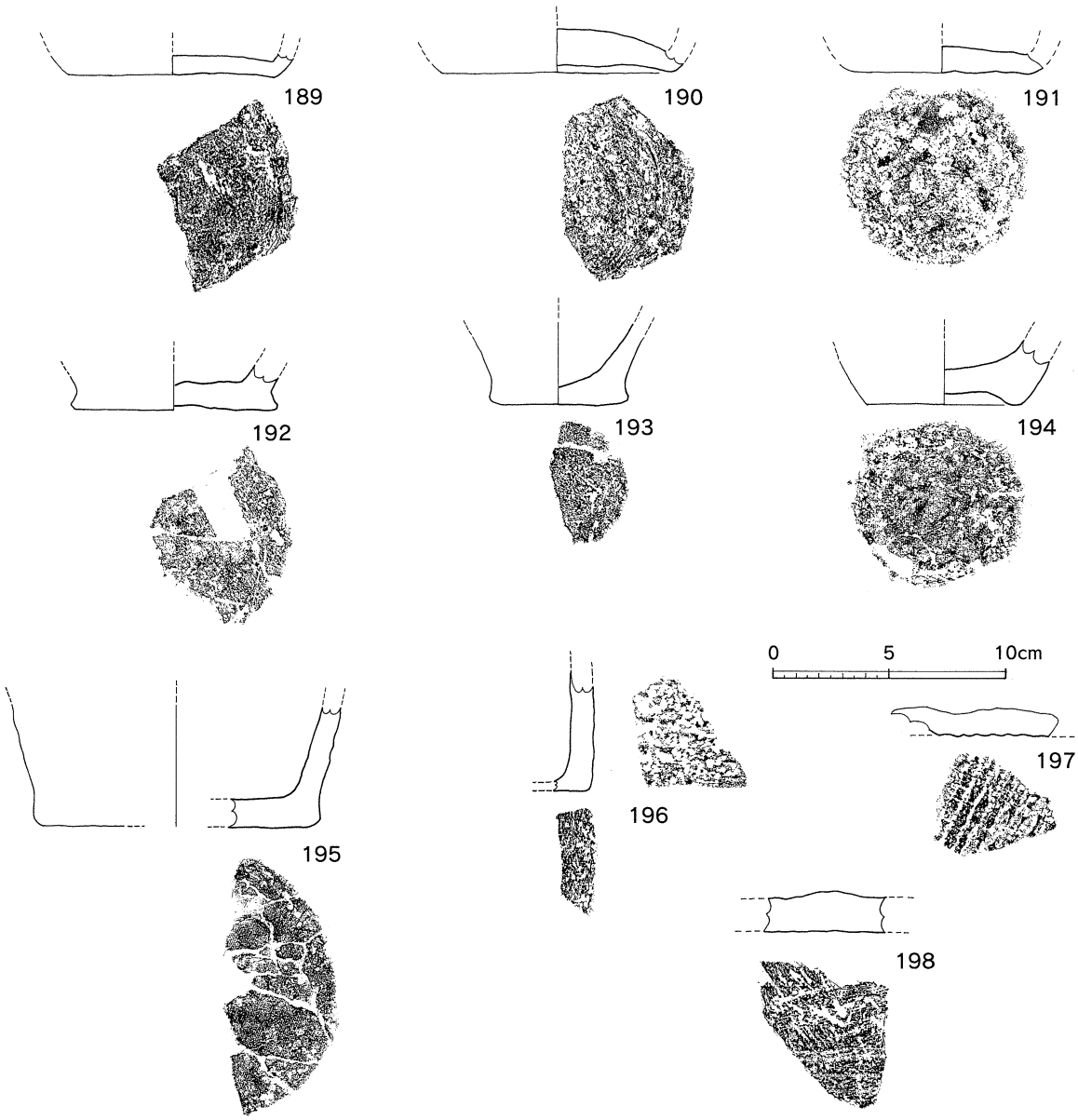
第23図　出土土器実測図（7）



第24図　出土土器実測図（8）



第25図　出土土器実測図（9）



第26図　出土土器実測図（10）

(154)の両面にはミガキが行われるが、それ以外はナデのみである。(155)は、口縁部に幅広の隆帯を貼付けたものであり、その断面形から壷形を呈する可能性が考えられる。

XⅣB類：厚手の土器(第24図156～160)

ナデ、若しくはケズリのみで作出した土器である。調整の順序や方向・器壁の厚さは様々であり、企画性に乏しい。

XⅤ類：その他の土器(第24図161～第25図182)

(161・162)は貝殻腹縁刺突を全面に施文する。横断面形から、角筒形を呈するように見えるが、断面を取る地点によって形状が大きく異なることから、器形は定かでない。(163)は細かい条痕文が斜位に施

文されたものである。(164)は、Ｘ類とＸＩ類の両方が考えられたため、この類に含めた。(165)は、口縁部と胴部に工具による押引きが行われる。(166)は、口縁部に条痕が認められないが、貝殻腹縁刺突からⅣ類に含まれる可能性が高い。(167)は、口縁部にＵ字状の突帯を貼付ける。ＸＩＡ類に含まれる可能性が高い。(170～174)は、外面に沈線が施文される。(175)は斜位の条痕が行われる。(176)は縦位の突帯が貼付けられる。(177)は縦位の突帯の上に貝殻腹縁刺突が行われる。(178)は横位の刻目突帯を貼付ける。しかし突帯の状態から、上記の型式のいずれにも当てはめることはできなかった。(180～182)は、アカホヤ火山灰層が消失している地点より出土したため、出土層位はアカホヤ火山灰層下位となっているが、器形や文様より、アカホヤ降灰以降と考えられる土器である。

ＸⅥ類：底部(第25図183～第26図198)

(183)は胴部から底部にかけての土器である。(184・185)には斜位の条痕が、(186)には横位の条痕が行われる。(188・196)の立ち上がりは、Ⅲ類Bと考えられる。(197)も、底面に残された圧痕文からⅢ類A・Bのどちらかに含まれると考えられる。また、(193)に見られる底部の極端な窄まり方や、(194)の上げ底から、ＸＩ～ＸⅢ類に含まれる。

石器

石鏃(第27図199～第30図330)

未成品も含めると、調査区全体で256点出土した。これら観察結果は、表に示したとおりである。出土層位より、ほぼ全てが縄文時代早期～アカホヤ直下に製作されたと考えられる。また、石材のうち、最も多くの割合を占めたのは黒曜石B類であり、全体の半数近くを占めた。次いでチャートとサヌカイトが15%近くに上る。また、石英が多数出土しており、全体の約10%を占める。

石鏃の形態は、サヌカイトや黒曜石Ｂは基部に肩を持つ、いわゆる五角形鏃が多い一方で、チャートは基部がＵ字状に抉れるものが多い。また、黒曜石Ａ,Ｃは幅が狭く、抉りがＶ字状になるものが多い。

尖頭状石器(第30図331～第31図346)

16点出土した。石鏃に比べ大まかな剥離により、鈍い尖端部を作出する。この多くは頁岩系の石材を使用したものであり、チャートや石英の石材が僅かに混じる。

石錐(第31図347)

1点出土した。断面は角錐状ではなく、凸レンズ状である。欠損した石鏃の脚部を転用したと考えられる。

石槍(第31図348)

石英を用い、両縁からの面的な剥離を連続的に行い、凸レンズ状の断面形を呈するよう仕上げる。下端部からの調整も認められるが、これは欠損後に再利用を意図した剥離と考えられる。形態や剥離の特徴から、縄文時代草創期に見られる槍先形尖頭器の可能性も考えられるが、形状が整えられていないことや、背面の礫面部の存在から、縄文時代の石槍という判断に至った。

石匙(第31図349,350)

2点出土した。いずれもサヌカイト製である。つまみ部は側面に設けられる。

スクレイパー(第31図351～第32図357)

(351)は、分割礫から連続的に剥離を行った横長剥片の下端部に、粗い刃部調整を行ったものである。(352)は、表面に面的な剥離を行った後、両面から小規模の剥離を連続的に行い刃部を作出したものである。

表4　出土土器観察表（1）

胎土（A:長石　B:角閃石　C:石英　D:白色粒　E:赤色粒　F:砂粒　G:雲母片　H:パミス　I:黒曜石片　J:小石　K:滑石）　割合（特多:特に多量　多:多量　中:中量　少:少量　微:微量）

遺物番号	出土地区	層位	分類	部位	調整・文様	色調	胎土	備考
7	b	SI-05	O	胴部	外:斜位沈線 内:斜位ケズリ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:にぶい褐7.5YR5/3	A:中　B:少　D:少　H:多	
8	b	SI-05	O	胴部	外:斜位沈線 内:縦位ミガキ	外:橙7.5YR6/6 内:灰黄褐10YR4/2	A:特多　B:多　D:少　F:少　H:微　I:微	D・F粗大有り
9	c	5a層	I	胴部	外:突帯貼付→爪形状の刺突 内:ナデ	外:浅黄2.5Y7/3 内:にぶい黄2.5Y6/3	A:多　B:微　D:中　H:微	外面に煮こぼれ痕付着
10	c	5a層	I	胴部	外:突帯貼付→爪形状の刺突 内:ナデ	外:淡黄2.5Y8/4 内:にぶい黄2.5Y6/3	A:中　B:少　D:中　H:少	
11	b	6層中	II	口縁部～胴部	外:ナデ→横位貝殻腹縁刺突 内:横位ナデ	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	A:少　B:少　D:中　E:少　F:中	口唇部貝殻腹縁刺突
12	*	5a層 5b層上	IIIA	口縁部～胴部	外:二枚貝条痕→貝殻腹縁押引 内:不定方向の粗いナデ	外:にぶい橙5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	A:中　B:少　C:微　D:中　F:少　H:微	
13	b	6層中	IIIB	口縁部～胴部	外:工具刺突→横位深い条痕 内:斜位粗いナデ	外:黒褐10YR3/2 内:橙7.5YR7/6	A:中　B:少　C:微　D:少　F:少　H:微	外面に煤付着
14	b	5b層下	IIIB	口縁部～胴部	外:工具刺突→貝殻腹縁刺突→横位条痕 内:横位ナデ	外:にぶい黄2.5Y6/3 内:橙5YR6/6	A:少　B:少　D:少　F:少	口唇部工具刺突
15	**	5b層上	IIIB	口縁部～胴部	外:工具刺突→横位深い条痕 内:粗いナデ	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰黄褐10YR5/2	A:少　B:微　D:少　F:少　H:微	
16	*	5a層	IIIB	口縁部～胴部	外:工具刺突 内:横位ナデ	外:にぶい黄2.5Y6/3 内:にぶい黄橙10YR7/4	A:中　B:少　D:少　F:少	
17	b	6層上	IIIC	胴部	外:斜位深い条痕 内:縦位粗いナデ	外:灰黄褐10YR4/2 内:にぶい赤褐5YR5/4	A:少　B:少　D:中　F:少　H:微	外面に煤付着
18	b	5a層	IIIC	胴部	外:斜位深い条痕 内:縦位粗いナデ→ミガキ	外:褐10YR4/4 内:にぶい赤褐5YR5/4	A:少　B:微　D:中　F:少　H:微	
19	**	5a層	IV	胴部	外:斜位二枚貝条痕 内:ナデ	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい黄橙10YR6/4	A:特多　B:少　D:中　E:微　F:少　H:中	外面に煤付着
20	*	5a層 5b層上	VA	口縁部～胴部	外:羽状の工具刺突→ナデ 内:(口唇部～内部)ミガキ	外:灰褐7.5YR4/2 内:灰褐7.5YR4/2	A:少　B:微　C:特多　E:微　F:中　G:微	外面に煮こぼれ痕付着 内面に炭化物付着
21	*	5a層	VA	口縁部	外:工具刺突 内:横位ミガキ	外:灰オリーブ5Y4/2 内:にぶい黄橙10YR6/4	A:多　B:少　D:中　F:少　H:微	F粗大有り
22	b	6層上	VB	胴部	外:横位ナデ 内:工具によるロッキング	外:にぶい黄褐10YR5/3～黒褐10YR2/2 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:多　B:少　C:微　D:少　H:少	
23	*	5a層	VC	胴部	外:工具による刺突→羽状の短沈線 内:ミガキ	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい褐7.5YR6/3	A:中　B:少　C:微　D:少　E:微　F:少	
24	b	5b層上	VI	胴部	外:縦位の楕円押型文 内:横位の楕円押型文	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい褐7.5YR5/3	A:中　C:多　D:中	

表5　出土土器観察表（2）

胎土（A:長石　B:角閃石　C:石英　D:白色粒　E:赤色粒　F:砂粒　G:雲母片　H:パミス　I:黒曜石片　J:小石　K:滑石）　割合（特多:特に多量　多:多量　中:中量　少:少量　微:微量）

遺物番号	出土地区	層位	分類	部位	調整・文様	色調	胎土	備考
25	b	5b層下	Ⅵ	口縁部	外:斜位山形押型文 内:横位山形押型文	外:明褐7.5YR5/6 内:にぶい褐7.5YR5/4	A:微　C:多　D:中　F:多　G:多　H:微	口唇部にも同原体を施文
26	c	5b層上	Ⅵ	口縁部	外:押型文 内:横位の山形押型文	外:にぶい黄橙10YR7/3～褐灰10YR4/1 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:多　D:多　G:多	口唇部にも山形押型文
27	＊＊	5b層上	Ⅵ	胴部	外:斜位山形押型文 内:横位ナデ	外:浅黄2.5Y7/4～暗灰黄2.5Y5/2 内:浅黄2.5Y7/3	A:中　B:中　C:微　D:中　E:少　H:中	外面に少量の煤付着
28	b	5b層上	Ⅵ	胴部	外:斜位山形押型文→軽いナデ 内:横位ナデ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:にぶい褐7.5YR5/3	A:中　C:少　D:多　F:少　G:多	C粗大有り
29	＊	5a層	Ⅵ	胴部	外:縦位の山形押型文 内:ナデ	外:浅黄2.5Y7/3 内:灰白.5Y8/2	A:中　B:多　C:微　D:少　F:多	
30	b	5a層	Ⅵ	胴部	外:斜方向の山形押型文 内:ナデ	外:浅黄2.5Y7/3 内:黄灰2.5Y4/1	A:多　B:微　D:多　F:少　H:少	内面に炭化物付着
31	＊＊	5a層	Ⅵ	底部	外:縦位山形押型文→ミガキ 内:横位ナデ	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰白2.5Y7/1	A:多　B:多　C:少　D:少　H:微	外面に煤付着,C粗大有り
32	＊	5a層	Ⅶ	口縁部	外:L→R方向の粗い縄文→沈線 内:横位→斜位のミガキ	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい黄褐10YR5/3	A:中　B:微　D:少　E:微　H:微	
33	c	5a層	Ⅶ	胴部	外:撚糸→ミガキ 内:縦位の粗いナデ→ミガキ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:にぶい褐7.5YR5/3	A:少　B:微　C:微　D:少　E:微　H:微	
34	＊＊	5b層上	Ⅶ	胴部	外:粗い縄文 内:不明	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:灰黄2.5Y6/2～黄灰2.5Y4/1	A:中　B:少　D:少　F:中	
35	b	5b層上	Ⅷ	頸部～胴部	外:縦位の山形押型文 内:丁寧なナデ	外:黄褐2.5Y5/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:中　B:少　D:中　F:少　G:少　H:中	
36	b	6層上	Ⅷ	頸部	外:不定方向の山形押型文→軽いナデ 内:ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:橙7.5YR6/6	A:多　C:微　D:中　H:中	
37	＊＊	5b層上	Ⅷ	胴部	外:山形押型文→刻目突帯→沈線→ナデ 内:ナデ	外:黄褐10YR5/6～灰黄褐10YR4/2 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:少　C:微　D:多　G:中　H:多	外面に煤付着
38	＊＊	5a層	Ⅷ	胴部	外:山形押型文→刻目突帯→沈線 内:横位ナデ	外:灰黄褐10YR5/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	A:中　B:少　D:中　G:微　H:中	外面に煮こぼれ痕付着
39	＊＊	5b層下 5b層上	Ⅷ	胴部	外:縦位の山形押型文→刻目突帯→ナデ 内:ナデ	外:浅黄橙10YR8/4 内:にぶい黄橙10YR7/3	A:中　B:中　C:少　E:少　F:中	突帯上の刻目は貝殻腹縁
40	＊＊	6b層上	ⅨA	口縁部～胴部	外:刻目突帯→沈線 内:ナデ	外:淡黄2.5Y8/4 内:淡黄2.5Y8/3	A:中　B:多　D:中　F:少　H:少	口唇部、内外両面から刻目
41	＊	5a層	ⅨB	胴部	外:横位ミガキ→縦位の縄文・撚糸→軽いナデ 内:横位ケズリ→横位粗いミガキ	外:褐7.5YR4/3 内:褐7.5YR4/4～黒褐10YR2/2	A:微　B:微　C:中　D:多　G:微	
42	＊	5a層	ⅨB	口縁部～胴部	外:沈線・押引→軽いナデ 内:横位ナデ	外:にぶい黄褐10YR5/4 内:明褐7.5YR5/6	A:中　B:微　D:中　E:中　F:少	外面に煮こぼれ痕付着

表6　出土土器観察表(3)

胎土(A:長石　B:角閃石　C:石英　D:白色粒　E:赤色粒　F:砂粒　G:雲母片　H:パミス　I:黒曜石片　J:小石　K:滑石)　割合(特多:特に多量　多:多量　中:中量　少:少量　微:微量)

遺物番号	出土地区	層位	分類	部位	調整・文様	色調	胎土	備考
43	b	5b層上	ⅨB	口縁部	外:横位条痕→ミガキ→沈線・刺突→軽いナデ 内:横位条痕→ミガキ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:にぶい橙7.5YR6/6	A:中 B:中 C:微 D:中 E:微 F:中 H:中	
44	b	5a層	ⅨB	口縁部	外:突帯→沈線・刺突→ナデ 内:横位丁寧なナデ	外:にぶい黄2.5Y6/3 内:黄褐2.5Y5/3	A:多 B:少 C:中 D:少 F:中 G:微	
45	c	5b層上	ⅨB	胴部	外:縦位の縄文・撚糸 内:ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい橙7.5YR6/4	A:中 B:微 C:少 F:中	
46	b	5b層上	ⅨB	胴部	外:沈線・刺突→軽いナデ 内:横位ケズリ	外:褐10YR4/4 内:明黄褐10YR6/6	A:中 B:少 C:中 D:少 F:中 G:少	
47	*	5a層	ⅨB	胴部	外:横位ミガキ→縦位の縄文・撚糸→軽いナデ 内:横位ケズリ→横位粗いミガキ	外:褐7.5YR4/3 内:褐7.5YR4/4～黒褐10YR2/2	A:微 B:微 C:中 D:多 G:微	
48	*	5a層	X	口縁部～頸部	外:横位貝殻腹縁刺突→ナデ 内:横位ケズリ→横位の軽いナデ	外:にぶい黄褐10YR5/4 内:黄褐10YR5/6	A:少 B:多 C:少 D:中 E:微 F:少 H:少	外面に煤付着 D粗大有り
49	*	5a層	X	口縁部	外:爪形状の刺突 内:横位ナデ	外:にぶい黄褐10YR5/4 内:灰黄褐10YR6/2	A:微 C:少 D:中 G:多	
50	b	5a層	X	胴部	外:横位の、先が櫛状の工具による刺突→ナデ 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:横位ケズリ→横位ナデ	A:中 B:多 D:中 F:少 H:微	
51	?	?	X	底部付近	外:貝殻腹縁刺突→軽いナデ 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:橙7.5YR6/6～褐10YR4/4 内:明褐7.5YR5/6	A:少 B:中 C:少 D:多 E:微 F:少 H:少	
52	b	5b層上	X	縁部付近	外:貝殻腹縁刺突 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:明黄褐10YR6/6	A:中 B:少 C:少 E:少 F:少 I:微	外面に煤付着 I粗大有り
53	**	5b層上	X	口縁部～頸部	外:貝殻腹縁押引 内:摩滅により不明	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:少 B:微 C:微 D:多 E:微 F:微 G:少 H:多	外面に煤付着
54	b	5a層	X	口縁部～頸部	外:刻目突帯→沈線・刺突→軽いナデ 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:にぶい黄橙10YR5/4 内:にぶい黄橙10YR6/4	A:少 B:中 C:微 E:微 H:少	外面に煮こぼれ痕付着
55	b	5a層	X	胴部	外:斜方向の山形押型文 内:ナデ	外:浅黄2.5Y7/3 内:黄灰2.5Y4/1	A:多 B:微 D:多 F:少 H:少	内面に炭化物付着
56	b	5b層上	X	口縁部	外:横位ナデ 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:にぶい橙7.5YR6/4～灰褐7.5YR4/3 内:にぶい黄褐10YR5/3	A:多 C:微 E:微 F:微 H:微	
57	?	?	X	胴部	外:沈線→ミガキ 内:横位条痕→横位ナデ	外:灰黄褐10YR4/2 内:明褐7.5YR5/6	A:少 B:少 C:少 D:少 F:微	
58	b	5b層上	X	頸部	外:横位ナデ→刺突 内:横位ケズリ→横位ミガキ	外:明褐7.5YR5/6 内:にぶい黄橙10YR6/4	A:中 B:少 C:微 D:少 F:少 H:少	
59	c	5a層	X	口縁部～胴部	外:沈線→軽いナデ 内:丁寧なナデ	外:にぶい黄橙10YR 7/3 内:浅黄2.5Y7/3～暗灰黄2.5Y5/2	A:中 B:少 F:少 H:少 I:微	
60	** ** *	5a層 5a層上 5a層	X	胴部	外:沈線→縄文→軽いナデ→刺突 内:横位ナデ	外:にぶ黄橙10YR5/4～にぶ褐7.5YR5/4 内:黄褐10YR5/8	B:少 C:特多 D:多 E:微 F:微 G:中 H:少	外面に煤付着

表7　出土土器観察表(4)

胎土(A:長石　B:角閃石　C:石英　D:白色粒　E:赤色粒　F:砂粒　G:雲母片　H:パミス　I:黒曜石片　J:小石　K:滑石)　割合(特多:特に多量　多:多量　中:中量　少:少量　微:微量)

遺物番号	出土地区	層位	分類	部位	調整・文様	色調	胎土	備考
61	*	5a層	X	胴部	外:沈線→縄文→軽いナデ 内:斜位ケズリ→ナデ	外:橙7.5YR6/6 内:にぶい橙7.5YR6/4	A:中　B:中　D:中　F:少　H:少	
62	*	5a層	X	胴部	外:貝殻腹縁刺突・沈線→縄文→軽いナデ 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:橙7.5YR6/6～灰褐7.5YR5/2 内:橙5YR6/6	A:中　B:少　C:微　D:少　E:微　F:少　H:少	外面に煤付着
63	**	5b層下 5b層上	X	胴部	外:網目状撚糸→沈線 内:丁寧な横位ナデ→沈線→ナデ・ミガキ	外:にぶい黄褐10YR4/3 内:にぶい黄褐10YR4/3	A:微　B:少　C:多　G:特多　H:少　I:微	C粗大有り
64	b	5b層上 5a層	X	胴部(頸部なし)	外:沈線・撚糸→ナデ 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:橙7.5YR6/6 内:黄褐10YR5/6	A:多　B:多　D:少　F:微　H:少	
65	b	5b層上	X	胴部	外:鋭利な工具による沈線→軽いナデ 内:条痕→ナデ	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:少　C:微　D:微　F:微　H:微	
66	b	5b層下	X	胴部	外:貝殻による条痕→ナデ 内:横位ナデ→ミガキ	外:明褐7.5YR5/6 内:にぶい黄褐10YR5/4	B:微　C:多　D:多　F:少　G:特多　H:少	C塊多数有り
67	b	6層上	X	胴部	外:工具による横位条痕 内:不定方向条痕	外:にぶい黄橙10YR7/3～橙7.5YR7/6 内:にぶい黄褐10YR4/3	A:多　B:少　C:少　D:微　F:微　I:微	内面に炭化物付着
68	b	6層中	X	胴部	外:貝殻腹縁刺突→ナデ 内:横位ナデ	外:褐7.5YR4/6 内:暗褐7.5YR3/3	B:微 C:特多 D:中 E:微 F:微 G:多 H:少	
69	b	6層上	XIA	口縁部～胴部	外:貝殻による波状条痕→刻目突帯→軽いナデ 内:横位条痕→ナデ	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:灰黄褐10YR4/1～にぶい黄橙10YR6/4	A:中　B:多　D:中　F:少　H:少	全面ローリングが激しい
70	b	6層上	XIA	胴部	外:横位条痕→貝殻腹縁刺突→刻目突帯 内:横位工具ナデ	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:褐灰10YR4/1	A:少　B:少　C:微　D:少　F:微	外面に煤付着
71	b	5b層下	XIA	胴部	外:刻目突帯・貝殻腹縁刺突→ミガキ 内:横位ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:暗灰黄2.5Y5/2黄灰2.5Y4/1	A:中　B:微　C:微　D:少　H:少	
72	b	5b層下	XIA	胴部	外:刻目突帯→沈線 内:横位ケズリ→横位工具ナデ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:にぶい黄2.5Y6/3	A:微　B:微　C:少　D:中　E:微　F:少　G:少	内面に炭化物付着
73	*	5a層	XIA	胴部	外:刺突→刻目突帯→ナデ 内:ミガキ	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:灰黄褐10YR5/2	A:少　B:少　D:少　E:少　F:微　H:少	外面に煤付着
74	b	5b層上	XIA	口縁部～胴部	外:貝殻による波状条痕→貝殻による押引→刻目 内:横位粗いケズリ→粗い横位ナデ	外:褐灰10YR4/1 内:暗灰黄2.5Y5/2	A:少　B:微　C:微　D:中　E:微　F:微	75と同一個体
75	b	5b層上	XIA	胴部	外:横位貝殻条痕→軽いナデ→貝殻V字押引 内:横位ケズリ→横位の粗い工具ナデ	外:灰黄褐10YR4/2 内:暗灰黄2.5YR5/2	A:中　B:微　C:少　D:少　E:微　F:少　J:微	74と同一個体
76	b	5b層上 6層上 5a層	XIB	口縁部～胴部	外:貝殻による波状条痕→軽いナデ 内:横位ケズリ→ナデ→一部工具ナデ	外:にぶい橙7.5YR6/4～灰褐7.5YR4/2 内:褐7.5YR4/3	A:多　B:少　D:多　E:少　J:微	外面に煮こぼれ痕付着 D粒子粗大有り
77	b	5b層下	XID	口縁部～胴部	外:貝殻による波状条痕→条痕沈線→軽いナデ 内:ナデ→工具ナデ	外:にぶい褐7.5YR5/3 内:灰黄褐10YR4/2	A:中　C:微　D:少　E:微　F:微　H:微	外面に煮こぼれ痕付着 D粗大有り
78	b	5a層上	XIB	口縁部	外:貝殻腹縁刺突・貝殻波状条痕→軽いナデ 内:横位条痕→ナデ	外:にぶい黄橙10YR7/3～灰黄褐10YR6/2 内:灰黄褐10YR6/2	A:中　B:少　C:微　D:少　E:微　F:少　H:微	

表8　出土土器観察表(5)

胎土(A:長石　B:角閃石　C:石英　D:白色粒　E:赤色粒　F:砂粒　G:雲母片　H:パミス　I:黒曜石片　J:小石　K:滑石)　割合(特多:特に多量　多:多量　中:中量　少:少量　微:微量)

遺物番号	出土地区	層位	分類	部位	調整・文様	色調	胎土	備考
79	b	6層上	XIB	頸部～胴部	外:貝殻による波状条痕 内:横位ケズリ→ナデ	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:灰褐7.5YR4/2	A:中　B:微　D:中　E:微　F:少　J:微	外面に煮こぼれ痕付着 D粒子粗大有り
80	b	6層上	XIC	胴部	外:沈線 内:横位工具ナデ	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい黄橙10YR7/4～褐灰10YR5/1	A:微　B:微　D:少　F:中	
81	b	5b層上	XIC	胴部	外:沈線 内:横位工具ナデ	外:褐灰10YR4/1 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:少　B:微　D:少　E:微　I:微	外面に煤付着 82・83・84と同一個体
82	b	6層上	XIC	胴部	外:沈線 内:横位工具ナデ→ナデ	外:にぶい黄2.5Y6/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:微　B:微　D:中　E:微　F:少　H:微	外面に煤付着 81・82・84と同一個体
83	b	5a層	XIC	胴部	外:沈線 内:横位工具ナデ→ナデ	外:にぶい黄2.5Y6/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:微　B:微　D:中　E:微　F:少　H:微	外面に煤付着 81・82・84と同一個体
84	b	5a層	XIC	胴部	外:沈線→軽いナデ 内:横位工具ナデ	外:にぶい黄2.5Y6/3 内:にぶい黄2.5Y6/3	A:少　B:少　D:少　F:中	81・82・83と同一個体
85	b	5b層下	XID	口縁部～胴部	外:貝殻腹縁刺突 内:横位ケズリ→ナデ	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰黄褐10YR4/2～にぶい黄橙10YR7/3	A:多　B:少　C:少　D:少　E:微　F:少	外面に煮こぼれ痕付着
86	b	5b層上	XID	胴部	外:条痕・貝殻腹縁刺突→軽いナデ 内:ナデ	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい黄橙10YR6/3	A多　B:少　C:少　D:少　F:少　H:微	D粗大有り
87	b	5b層下	XID	胴部	外:貝殻V字押引→軽いナデ 内:不定方向ナデ	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい黄2.5Y6/3	A:少　B:少　C:微　D:少　E:微　F:少　H:微	
88	b	5a層	XID	胴部	外:貝殻条痕→軽いナデ→貝殻V字押引 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:にぶい黄褐	A:多　B:微　D:少　E:微　F:少　H:微	D・E粗大有り
89	b	6層上	XID	胴部	外:貝殻V字押引→軽いナデ 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:にぶい赤褐5YR5/4 内:にぶい黄橙	A:多　B:少　D:中　E:微　F:少	D粗大有り
90	b	5a層 5b層上 ?	XIIA	口縁部～胴部	外:横位条痕→縦位条痕→格子目状沈線 内:横位条痕→口縁部付近横位ナデ	外:黒褐10YR3/1 内:にぶい褐7.5YR5/4	A:中　B:少　D:多　E:微　H:微	内面に炭化物付着
91	b	5a層	XIIA	口縁部～胴部	外:横位条痕→縦位条痕→格子目状条痕 内:横位条痕→ナデ	外:黒褐10YR3/1 内:灰褐7.5YR4/2	A:中　B:微　D:少　E:微　F:微　H:中	外面に煮こぼれ痕付着
92	b	5a層	XIIA	胴部	外:貝殻による波状条痕→貝殻による押引→刻目 内:横位粗いケズリ→粗い横位ナデ	外:褐灰10YR4/1 内:暗灰黄2.5Y5/2	A:少　B:微　C:微　D:中　E:微　F:微	外面に煤付着 D粗大有り
93	b	6層上	XIIA	胴部	外:格子目状の条痕→条痕軽いナデ 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:灰黄褐10YR4/2	A:特多　B:少　C:少　D:中　F:微　H:微	外面に煤付着 94と同一個体
94	b	5b層上	XIIA	口縁部～胴部	外:格子状の条痕→条痕上を軽いナデ 内:横位ケズリ→横位粗い工具ナデ	外:暗褐10YR3/3 内:黒褐10YR2/3	A:中　B:中　C:多　D:少　E:微　F:多　I:微	外面に煮こぼれ痕付着 内面に炭化物付着、93と同一個体
95	b	6層上	XIIA	胴部	外:工具による格子目状の条痕→軽いナデ 内:横位ミガキ	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:灰黄橙10YR6/2	A:中　B:少　C:微　D:中　E:微　F:少	外面に煤付着 C・D粗大有り
96	b	5b層上	XIIA	胴部	外:格子目状の条痕→軽いナデ 内:斜位粗いナデ	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/3	A:多　B:少　D:少　E:少　H:微	

表9　出土土器観察表(6)

胎土(A:長石　B:角閃石　C:石英　D:白色粒　E:赤色粒　F:砂粒　G:雲母片　H:パミス　I:黒曜石片　J:小石　K:滑石)　割合(特多:特に多量　多:多量　中:中量　少:少量　微:微量)

遺物番号	出土地区	層位	分類	部位	調整・文様	色調	胎土	備考
97	b	5a層	XIIA	胴部	外:格子目状の条痕→軽いナデ 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:にぶい黄橙10YR7/4灰黄褐10YR6/2 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:少　B:微　C:微　D:中　F:微　H:少	外面に煤付着
98	b	5a層	XIIA	胴部	外:格子目状の条痕→軽いナデ 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:中　B:微　D:中　F:中　H:微	
99	b	5a層	XIIA	胴部	外:格子目状の条痕→軽いナデ 内:横位ナデ→一部横位工具ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:灰黄褐10YR5/2	A:微　C:特多　G:多	
100	b	5a層	XIIB	口縁部～胴部	外:斜位条痕→軽いナデ 内:横位工具ナデ→ナデ	外:暗褐10YR3/4 内:黒褐10YR2/2	A:中　B:微　H:多　I:微	外面に煮こぼれ痕付着 内面に炭化物付着　補修孔あり 120・127と同一個体
101	b	5b層上	XIIB	口縁部～胴部	外:横位条痕→縦位条痕→横位・斜位条痕 内:横位条痕	外:にぶい黄橙10YR5/4～黒褐10YR3/1 内:黄褐2.5Y5/3	A:少　B:微　D:中　H:中	外面に煮こぼれ痕付着 102と同一個体
102	b	5b層上	XIIB	口縁部～胴部	外:縦位条痕→横位・斜位条痕 内:横位条痕→軽いナデ	外:褐7.5YR4/4 内:黒褐10YR2/2	A:中　B:微　D:少　H:少	外面に煮こぼれ痕付着 内面に炭化物付着,101と同一個体
103	b	5b層下	XIIB	口縁部～胴部	外:斜位条痕→横位条痕→軽いナデ 内:横位条痕→軽いナデ	外:褐10YR4/4 内:灰黄褐10YR4/2	A:少　B:微　C:微　D:少　H:多	内面に炭化物付着
104	b	5a層	XIIB	口縁部～胴部	外:不定方向条痕 内:横位ナデ	外:橙7.5YR6/6 内:にぶい黄橙10YR6/4	A:中　B:少　D:少　E:微　H:中	外面に煮こぼれ痕付着
105	b	6層中	XIIB	口縁部～胴部	外:斜位条痕 内:不定方向工具ナデ	外:黒褐5YR2/1 内:にぶい褐7.5YR5/4	A:少　B:少　C:微　D:少　E:微　F:少　H:微	
106	b	5a層	XIIB	口縁部	外:縦位条痕→横位不定方向条痕 内:横位工具ナデ→ナデ	外:浅黄2.5Y7/3～灰5Y4/1 内:オリーブ黒5Y3/1	A:多　B:微　D:少　H:微	外面に煮こぼれ痕付着 内面に炭化物付着　補修孔あり
107	c	?	XIIB	口縁部～胴部	外:不定方向条痕 内:不定方向ナデ	外:黄褐2.5YR5/3～黒褐2.5Y3/1 内:黒褐2.5Y3/2	A:中　B:微　D:微　F:少　H:微　J:少	外面に煮こぼれ痕付着 J粗大有り
108	b	5a層	XIIB	口縁部	外:斜位条痕→横位・不定方向条痕 内:横位工具ナデ→軽いナデ	外:黄灰2.5Y4/1 内:オリーブ黒5Y3/1	A:中　D:中　H:少　I:微	外面に煮こぼれ痕付着 内面に炭化物付着
109	b	5a層	XIIB	胴部	外:斜位条痕→横位・斜位条痕 内:横位工具ナデ	外:黒褐2.5Y3/1 内:オリーブ黒5Y2/2	A:中　B:少　D:微　G:微　H:少　I:微	110と同一個体 内面に炭化物付着
110	b	撹乱部一括 5b層上	XIIB	胴部	外:縦位条痕→横位・斜位条痕 内:横位条痕→ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:黒褐10YR3/2	A:中　B:少　D:少　E:少　H:微　I:微	外面に煤付着 内面に炭化物付着 109と同一個体
111	b	5b層上 撹乱部一括	XIIB	胴部	外:縦位条痕→横位・不定方向条痕 内:横位条痕→横位工具ナデ	外:暗赤褐5YR3/2 内:オリーブ黒5Y3/1	A:中　B:微　D:少　H:少　I:微	外面に煤付着 内面に炭化物付着
112	b	5a層	XIIB	胴部	外:縦位条痕→ナデ→横位・斜位条痕 内:斜位条痕→ナデ	外:にぶい赤褐5YR4/4 内:黒褐2.5Y3/2	A:中　B:少　D:微　H:少	外面に煤付着
113	b	5a層	XIIB	胴部	外:斜位条痕 内:横位・斜位条痕→一部ナデ	外:褐7.5YR4/6 内:黒褐10YR2/2	A:多　B中　D:少　H:中	

表10　出土土器観察表（7）

胎土（A:長石　B:角閃石　C:石英　D:白色粒　E:赤色粒　F:砂粒　G:雲母片　H:パミス　I:黒曜石片　J:小石　K:滑石）　割合（特多:特に多量　多:多量　中:中量　少:少量　微:微量）

遺物番号	出土地区	層位	分類	部位	調整・文様	色調	胎土	備考
114	b b ＊＊	5b層上 5a層上 5a層上	XIIB	胴部	外:横位条痕→縦位条痕 内:不定方向条痕	外:褐7.5YR4/4 内:灰黄褐10YR4/2	A:中　B:少　C:微　D:少　E:微　F:微　H:微	
115	b	5b層上	XIIB	胴部	外:斜位条痕→軽いナデ 内:横位条痕→丁寧なナデ	外:にぶい黄橙10YR7/3～にぶい橙7.5YR7/4 内:黒褐7.5YR3/1	A:少　B:少　D:少　E:少　H:少	外面に煤付着
116	b	5b層下	XIIB	胴部	外:斜位条痕 内:縦位ケズリ→縦位ミガキ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:橙7.5YR6/6	A:多　B:少　D:中　E:微　H:少	
117	b	5a層下	XIIB	胴部	外:縦位条痕→軽いナデ→斜位条痕 内:横位ケズリ→ナデ	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:橙7.5YR6/4	A:少 B:微 C:少 D:少 E:微 F:少 G:多 H:少	
118	b ? b	5b層上 5a層 6層中	XIIB	胴部	外:縦位条痕→一部軽いナデ 内:不定方向粗いケズリ	外:橙7YR6/6 内:にぶい黄橙10YR6/4～灰黄褐10YR4/2	A:中　B:微　D:少　F:少　H:多　I:微	内面に炭化物付着 122・123と同一個体
119	b	5a層	XIIB	口縁部～胴部	外:条痕→軽いナデ 内:横位工具ナデ	外:黒褐10YR2/3 内:暗褐10YR3/4	A:中　B:微　D:少　E:微　H:微　I:微　J:微	外面に煮こぼれ痕付着 J粗大有り
120	b	?	XIIB	胴部	外:縦位条痕→斜位条痕 内:横位粗いナデ→斜位粗いナデ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:にぶい橙7.5YR6/4	A:中　B:微　D:少　F:微	外面に煤付着 100・124と同一個体
121	b	5a層	XIIB	胴部	外:縦位条痕→軽いナデ→横位条痕 内:横位工具ナデ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:灰黄褐10YR6/2～灰黄褐10YR4/2	A:中　B:少　D:微　E:微　H:多	外面に煤付着
122	b	5b層上	XIIB	胴部	外:斜位条痕→軽いナデ 内:縦位粗いケズリ	外:橙7.5YR6/6 内:にぶい黄橙10YR5/4	A:多　D:中　F:中　H:少　I微	118・123と同一個体
123	b	5a層	XIIB	胴部	外:斜位条痕→軽いナデ 内:不定方向粗いケズリ	外:橙5YR6/6 内:にぶい黄褐10YR5/3	A:中　B:中　C:微　D:中　F:微　H:少　I:微	118・122と同一個体
124	b	5a層	XIIC	口縁部～胴部	外:縦位条痕→横位条痕→ナデ 内:横位工具ナデ→ナデ	外:黒褐10YR3/2 内:にぶい褐7.5YR5/4	A:微　B:微　D:微　H:多	外面に煮こぼれ痕付着 H粗大有り
125	b	5a層	XIIC	口縁部～胴部	外:縦位条痕 内:横位工具ナデ→斜位工具ナデ	外:褐10YR4/4 内:明褐7.5YR5/6	A:少　B:中　H:多	外面に煮こぼれ痕付着
126	b	5b層上	XIIC	口縁部～胴部	外:横位条痕→縦位・斜位条痕 内:摩滅により不明	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄褐10YR5/3	A:中　B:微　D:微　H:多　I:微	
127	b	5a層	XIIC	口縁部	外:縦位条痕→軽いナデ 内:横位工具ナデ→ナデ	外:暗褐10YR3/3 内:暗灰黄2.5Y4/2	A:微　C:微　D:少　H:多	H粗大有り
128	b	6層中	XIIC	口縁部	外:縦位条痕 内:横位工具ナデ	外:にぶい黄褐10YR5/3 内:黄褐10YR5/6	A:少　B:少　C:微　D:少　F:中　H:中	外面に煮こぼれ痕付着
129	b	5a層	XIIC	口縁部	外:横位・斜位条痕 内:横位ナデ	外:にぶい黄褐10YR5/3 内:黒褐10YR3/1	A中　B:微　C微　D:少　H:多	外面に煮こぼれ痕付着
130	b	5a層	XIIC	胴部	外:斜位条痕→縦位条痕 内:斜位ケズリ→ナデ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:褐7.5YR4/3	A:中　B:中　C:少　D:微　E:少　F:少　H:多	137と同一個体

表11　出土土器観察表(8)

胎土(A:長石　B:角閃石　C:石英　D:白色粒　E:赤色粒　F:砂粒　G:雲母片　H:パミス　I:黒曜石片　J:小石　K:滑石)　割合(特多:特に多量　多:多量　中:中量　少:少量　微:微量)

遺物番号	出土地区	層位	分類	部位	調整・文様	色調	胎土	備考
131	b	5b層上	XIIC	胴部	外:斜位条痕 内:斜位ケズリ→縦位ケズリ→粗いミガキ	外:にぶい赤褐5YR5/4 内:にぶい黄褐10YR5/4	A:中　B:中　C:中　D:微　E:微　F:少　H:多	
132	b	5a層	XIIC	胴部	外:条痕→ナデ 内:縦位のケズリ→ナデ	外:橙7YR6/6 内:にぶい黄褐10YR5/6	A:少　B:少　D:微　H:多	B塊有り
133	b	5a層	XIIC	胴部	外:横位・斜位条痕 内:横位・斜位条痕→ナデ	外:にぶい褐7.5YR6/4～暗褐7.5YR3/4 内:褐7.5YR4/6～にぶい黄褐10YR5/3	C:中　D:中　E:少　G:中　H:少	外面に煤付着
134	b	5a層	XIIC	胴部	外:斜位条痕→縦位条痕→ナデ 内:横位条痕→ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:黒褐2.5Y3/2～オリーブ褐2.5Y4/3	A:少　B:少　D:中　F:少　H:少　I:微	内面に炭化物付着
135	b	5b層下	XIIC	胴部	外:横位条痕→ナデ 内:横位工具ナデ→ナデ	外:橙7.5YR6/6 内:褐7.5YR4/3	A:多　B:少　C:少　D:中　F:中　H:少	外面に煤付着
136	b	5b層下 5a層	XIIC	胴部	外:縦位条痕→軽いナデ→斜位条痕 内:縦位ケズリ	外:褐7.5YR4/3 内:褐7.5YR4/4	A:中　B:微　C:微　D:中　F:少　H:多	
137	b	5a層	XIIC	胴部	外:斜位条痕 内:横位ケズリ→ナデ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:褐7.5YR4/4～灰褐7.5YR4/2	A:多　B:少　C:微　H:多	H粗大有り 130と同一個体
138	b	5a層	XIIC	胴部	外:斜位条痕→ナデ→斜位条痕 内:ナデ→斜位粗いナデ	外:橙5YR6/6 内:黒褐5YR3/1	A:微　B:中　D:少　H:中	
139	b	5b層上	XIII	口縁部	外:篦状工具による斜位沈線→横位沈線 内:摩滅により不明	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:にぶい黄橙10YR6/3	A:中　B:中　D:少　F:中　H:多	外面に煮こぼれ痕付着
140	b	5a層	XIII	口縁部	外:篦状工具による横位沈線 内:ヨコナデ	外:オリーブ褐2.5YR4/4 内:にぶい褐7.5YR5/4	A:多　B:少　C:微　D:少　E少	
141	b	5a層	XIII	胴部	外:不定方向沈線 内:横位・斜位条痕→ナデ	外:褐7.5YR4/3 内:横位・斜位条痕→ナデ	A:多　B:少　D:中　F:中　I:微	外面に煤付着
142	b	5b層上	XIVA	胴部 (口縁部付近)	外:斜位ナデ 内:横位ナデ	外:橙5YR6/6 内:にぶい褐7.5YR5/4	A:微　B:中　C:微　E:微　F:少　H:少　I:微	外面に煤付着
143	b	5b層上	XIII	口縁部	外:篦状工具による横位沈線 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:にぶい黄褐10YR5/3 内:灰黄褐10YR4/2	A:少　B:少　D:少　H:中　I:微	
144	b	5b層下	XIII	胴部	外:篦状工具による沈線 内:横位工具ナデ→ナデ	外:褐7.5YR4/4 内:黒褐7.5YR3/2	A:多　B:微　C:微　D:中　F:少　I:微	
145	b	5a層	XIII	胴部	外:篦状工具による綾杉状の沈線 内:横位工具ナデ→ナデ	外:淡黄2.5Y8/3～黄灰2.5Y4/1 内:黒褐2.5Y3/1	A:多　B:少　C:微　D:微　H:少　F:少	外面に煤付着
146	c	5a層上	XIVA	口縁部～胴部	外:ナデ 内:横位工具ナデ→ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:浅黄2.5Y7/4	A:中　B:少　C:微　D:中	外面に煮こぼれ痕・煤付着 147と同一個体
147	c	5a層上	XIVA	口縁部～胴部	外:ナデ 内:ナデ→口縁部付近刻目	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	A:多　B:微　D:中	146と同一個体
148	b	5b層上	XIVA	胴部	外:斜位ナデ 内:横位・斜位条痕	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:褐灰10YR4/1	B:微　C:少　K:特多	K微細

表12　出土土器観察表(9)

胎土(A:長石　B:角閃石　C:石英　D:白色粒　E:赤色粒　F:砂粒　G:雲母片　H:パミス　I:黒曜石片　J:小石　K:滑石)　割合(特多:特に多量　多:多量　中:中量　少:少量　微:微量)

遺物番号	出土地区	層位	分類	部位	調整・文様	色調	胎土	備考
149	c	5b層上	XIVA	口縁部～胴部	外:ナデ 内:ナデ	外:褐7.5YR4/3 内:灰黄褐10YR4/2	A:特多　B:微　D:少　E:少　H:微	
150	b	5a層	XIVA	胴部	外:斜位ナデ 内:横位ナデ	外:暗灰黄2.5Y5/2 内:灰黄褐10YR5/2	A:中　B:微　C:少　D:少	
151	b	5b層下	XIVA	口縁部	外:横位ナデ 内:横位ナデ	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	A:少　B:微　D:少　F:少	
152	b	5b層上	XIVA	胴部 (口縁部付近)	外:斜位ナデ 内:横位ナデ	外:橙5YR6/6 内:にぶい褐7.5YR5/4	A:微　B:中　C:微　E:微　F:少　H:少　I:微	
153	＊＊	?	XIVA	胴部	外:不定方向ナデ 内:摩滅により不明	外:橙5YR6/6 内:にぶい黄橙10YR6/4	A:少　B:微　D:少　F:少	
154	c	5b層	XIVA	胴部	外:ミガキ 内:ミガキ	外:黄灰2.5Yr5/1 内:にぶい黄橙10YR7/3	A:微　B:微　D:中　F:中	
155	＊	5a層	XIVA	胴部	外:斜位条痕 内:横位ケズリ→ナデ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:褐7.5YR4/4～灰褐7.5YR4/2	A:多　B:少　C:微　H:多	H粗大有り 130と同一個体
156	＊＊	5a層 5b層上	XIVB	胴部	外:斜位粗いナデ→ナデ 内:縦位粗いケズリ→ナデ	外:にぶい黄褐10YR5/4 内:にぶい黄褐10YR5/3	A:微　B:中　D:少　H:中	
157	＊	5a層	XIVB	口縁部	外:横位ナデ 内:横位ナデ	外:暗灰黄2.5Y5/2 内:暗灰黄2.5Y5/2	A:少　B:微　C:微　D:少　E:少　F:少	
158	b	5b層上	XIVB	胴部	外:横位ナデ 内:横位ケズリ→ナデ	外:灰黄褐10YR5/2 内:灰黄褐10YR5/2	A:多　B:少　C:微　D:中　E:微　F:少　H:微	
159	b	5a層	XIVB	胴部	外:横位条痕→ナデ 内:ナデ	外:灰黄褐10YR6/2 内:灰黄褐10YR4/2	A:中　B:少　D:中　F:少　I:微	外面に煤付着 D粗大有り
160	b	5b層下	XIVB	口縁部	外:横位粗いナデ→ナデ 内:横位条痕→ナデ	外:暗灰黄2.5Y5/2 内:にぶい黄2.5Y6/3～黄灰2.5Y4/1	A:多　B:少　C:少　D:少　F:少　H:微	D粗大有り 外面に煤付着
161	c	5a層	XV	胴部	外:刺突→ナデ 内:横位粗いナデ→横位ミガキ	外:浅黄2.5Y7/3 内:暗灰黄2.5Y5/2	A:多　B:中　D:中　E:微　F:中	
162	c	5a層	XV	胴部	外:刺突→ナデ 内:粗いナデ	外:浅黄2.5Y7/3 内:暗灰黄2.5Y5/2	A:多　B:中　D:中　E:微　F:中	外面に煤少量付着 161と同一個体
163	b	5a層	XV	口縁部	外:斜位条痕 内:横位ケズリ	外:浅黄2.5Y7/3 内:黒褐2.5Y3/1	A:少　C:中　D:特多　E:微　F:少　G:少	外面に煤少量付着
164	c	5b層上	XIC	口縁部～胴部	外:貝殻腹縁刺突→貝殻条痕 内:横位ナデ→一部工具ナデ	外:灰褐7.5YR4/2 内:灰黄褐10YR4/2	A:多　B:少　D:少　F:中　H:多	
165	b	5b層上	XV	口縁部～胴部	外:押引→軽いナデ 内:横位ナデ	外:にぶい褐7.5YR5/3 内:にぶい褐7.5YR5/3～褐灰7.5YR4/1	A:少　B:微　C:多　D:少　F:微　G:多	
166	b	5a層	XV	口縁部	外:横位条痕→刺突→ナデ 内:横位ナデ	外:灰黄褐10YR4/2 内:にぶい黄褐10YR5/4	A:少　B:微　C:微　D:中　F:中　H:中　I:微	外面に煮こぼれ痕付着 D粗大有り

表13　出土土器観察表(10)

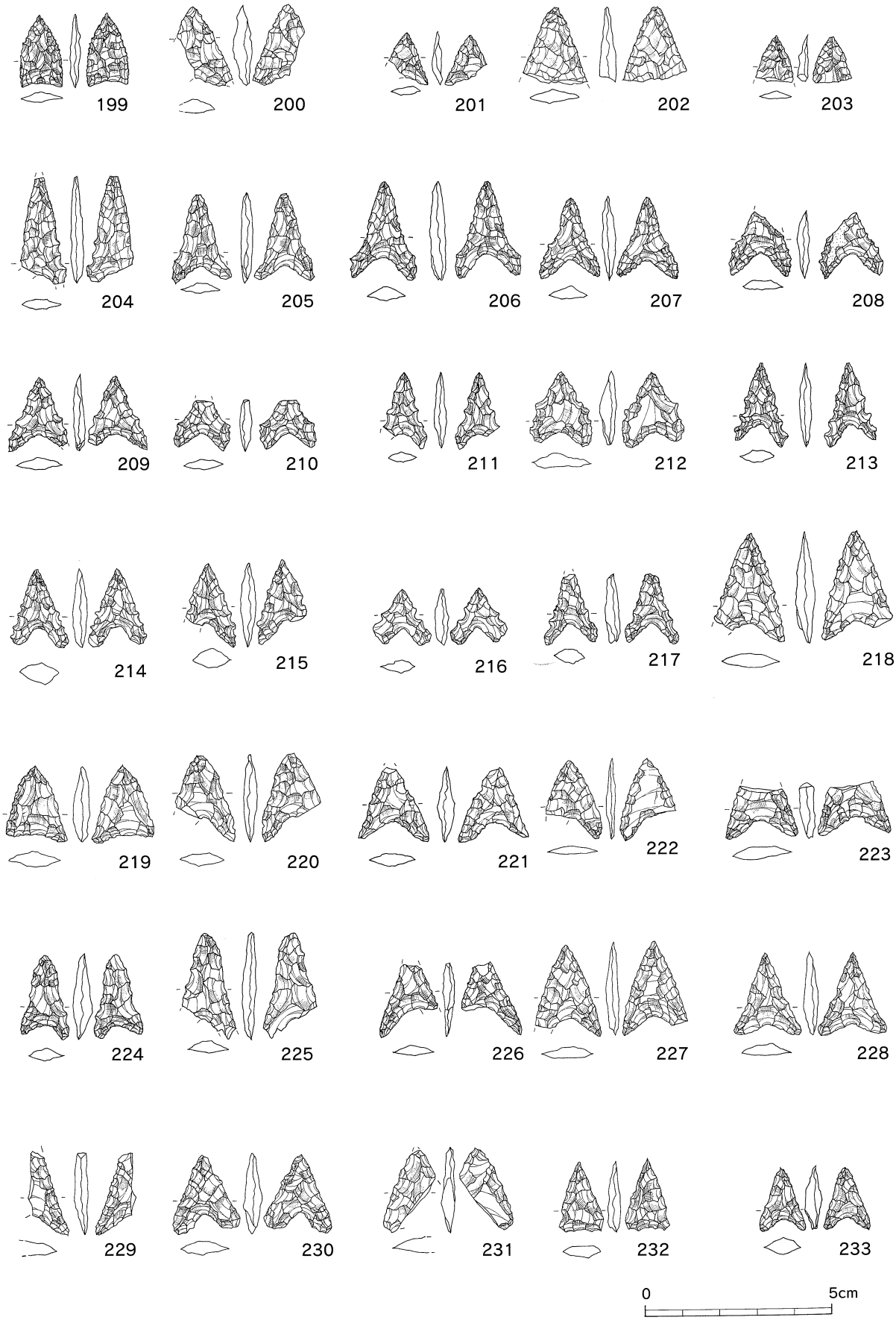
胎土(A:長石　B:角閃石　C:石英　D:白色粒　E:赤色粒　F:砂粒　G:雲母片　H:パミス　I:黒曜石片　J:小石　K:滑石)　割合(特多:特に多量　多:多量　中:中量　少:少量　微:微量)

遺物番号	出土地区	層位	分類	部位	調整・文様	色調	胎土	備考
167	b	6層中	XV	口縁部	外:突帯 内:横位工具ナデ→ナデ	外:にぶい黄褐10YR5/4 内:横位工具ナデ→ナデ	A:中　B:中　C:少　D:少　E:微　H:微　I:微	
168	b	5b層上	XV	胴部	外:綾杉上の沈線 内:横位ナデ	外:灰黄2.5YR7/2 内:灰黄褐10YR4/2	A:中　B:少　D:中　F:少　H:中	
169	b	5b層上	XV	胴部	外:横位条痕→横位ナデ 内:横位ケズリ	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい黄橙10YR7/3～褐灰10YR4/1	A:中　B:少　C:少　D:少　E:微　F:少　H:微	内面に朱らしき赤みがかかる
170	*	5a層	XV	胴部	外:沈線・刺突→軽いナデ 内:横位ケズリ→横位ナデ	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:にぶい橙7.5YR6/4	A:中　B:少　C:微　D:中　E:少　F:少	
171	b	5a層	XV	胴部	外:斜位沈線 内:斜位粗いナデ→横位ナデ→ナデ	外:灰黄褐10YR6/2 内:にぶい黄橙10YR7/4～灰黄褐10YR6/2	A:中　B:少　D:多　E:微　F:微　H:微	
172	**	5b層	XV	胴部	外:斜位沈線 内:横位工具ナデ→軽いナデ	外:にぶい黄褐10YR5/4 内:にぶい黄橙10YR6/4～黒褐10YR3/1	A:少　C:多　D:微　E:微　F:微　G:少　H:少	
173	?	?	XV	胴部	外:沈線→ナデ 内:横位条痕→ナデ	外:黒褐10YR3/1 内:褐灰10YR4/1	A:多　B:少　C:微　D:少　E:微　H:少　J:微	外面に煤付着
174	b	5b層上	XV	胴部	外:沈線 内:横位ケズリ	外:灰黄2.5YR6/2 内:黄灰2.5Y4/1	A:中　B:少　D:中　F:少	外面に煤付着 補修孔有り
175	**	5a層	XV	胴部	外:沈線 内:摩滅により不明	外:黄灰2.5Y4/1 内:浅黄2.5Y7/3	A:中　B:少　D:少　F:少　H:中	外面に煤付着 内面に炭化物付着
176	b	5a層	XV	胴部	外:突帯 内:ミガキ	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい黄橙10YR5/3	A:中　B:中　C:中　D:少　F:少　H:少	
177	b	5a層	XV	胴部	外:突帯→刺突 内:不定方向ケズリ→ナデ	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい黄橙10YR6/4	A:多 B:中 C:少 D:中 E:微 F:少 H:中 I:微	
178	b	6層中	XV	胴部	外:刻目突帯 内:縦位ミガキ	外:にぶい黄褐10YR5/4 内:黒褐10YR3/2	A:中　B:微　D:中　F:微　H:微	D粗大有り
179	*	5a層	XV	頸部	外:刺突→横位ナデ 内:ナデ	外:橙7.5YR6/6 内:橙7.5YR7/6	A:少 B:少 C:少 D:少 E:少 F:中 H:中 J:少	
180	b	5a層	XV	胴部	外:押引 内:不定方向工具ナデ	外:灰褐5YR4/2 内:灰黄褐10YR4/2	C:特多　D:微　E:微　F:少　G:中	補修孔有り
181	b	5b層上	XV	胴部	外:突帯→刺突 内:横位条痕→横位ナデ	外:黒褐10YR3/2 内:にぶい黄橙10YR7/4	A:中　C:微　D:微　F:少　H:中	外面に煮こぼれ痕付着
182	*	5b層上	XV	胴部	外:不定方向押引 内:横位条痕→ナデ	外:にぶい黄褐10YR5/4 内:黄褐10YR5/6	C:多　D:少　E:微　F:中　G:中　H:中	縄文早期以降146と同一個体
183	b	5a層	XVI	胴部～ 底部付近	外:斜位条痕→ナデ 内:横位条痕→ナデ	外:褐10YR4/4 内:淡黄2.5YR8/3～黒褐10YR3/2	A:中　B:少　C:微　D:微　E:微　H:中	内面に炭化物付着
184	b	5a層	XVI	胴部～底部	外:斜位条痕→ナデ 内:ナデ	外:明褐7.5YR5/6 内:明褐7.5YR5/6	A:多　B:少　C:少　D:微　E:微　F:微	

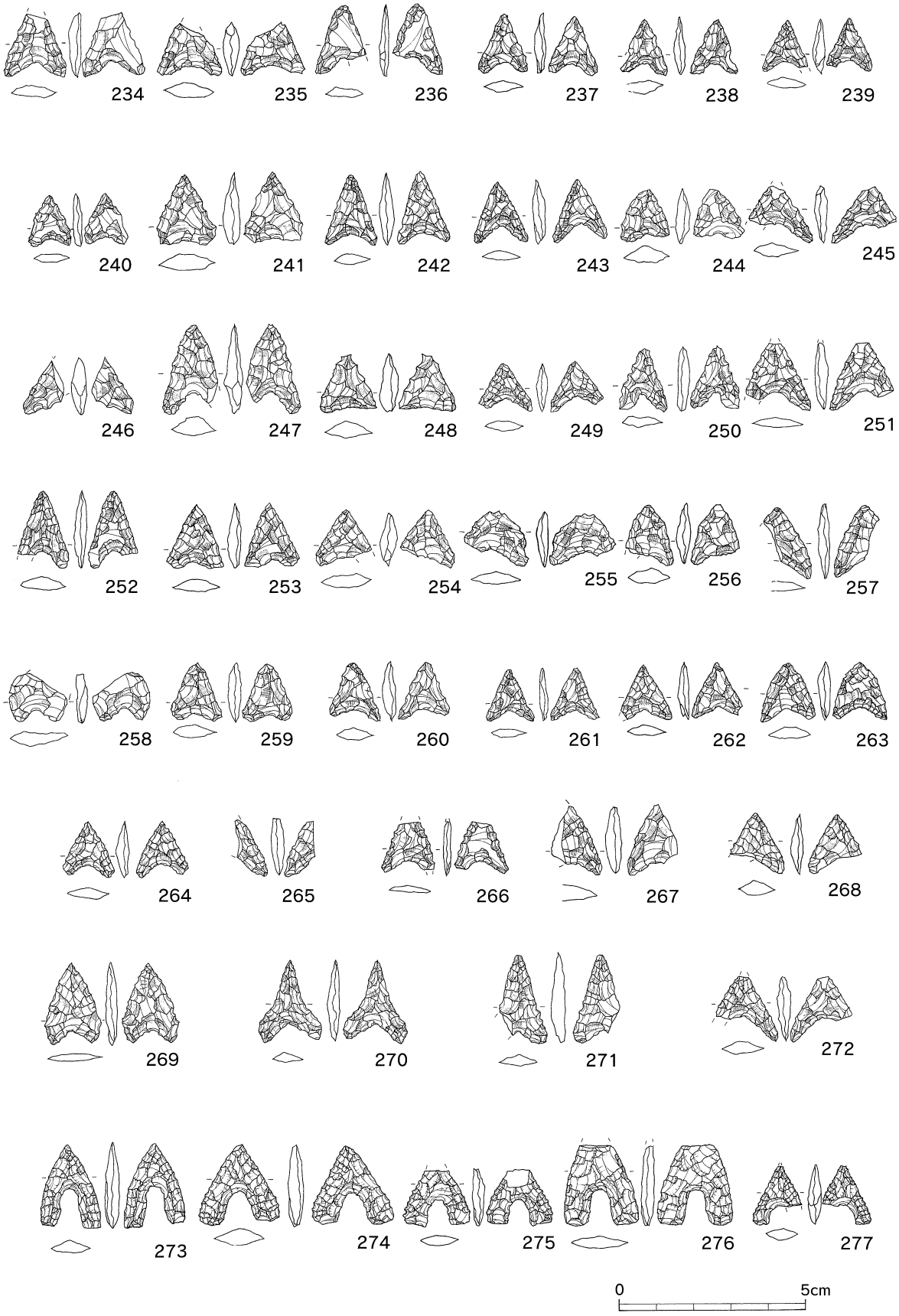
表14　出土土器観察表(11)

胎土(A:長石　B:角閃石　C:石英　D:白色粒　E:赤色粒　F:砂粒　G:雲母片　H:パミス　I:黒曜石片　J:小石　K:滑石)　割合(特多:特に多量　多:多量　中:中量　少:少量　微:微量)

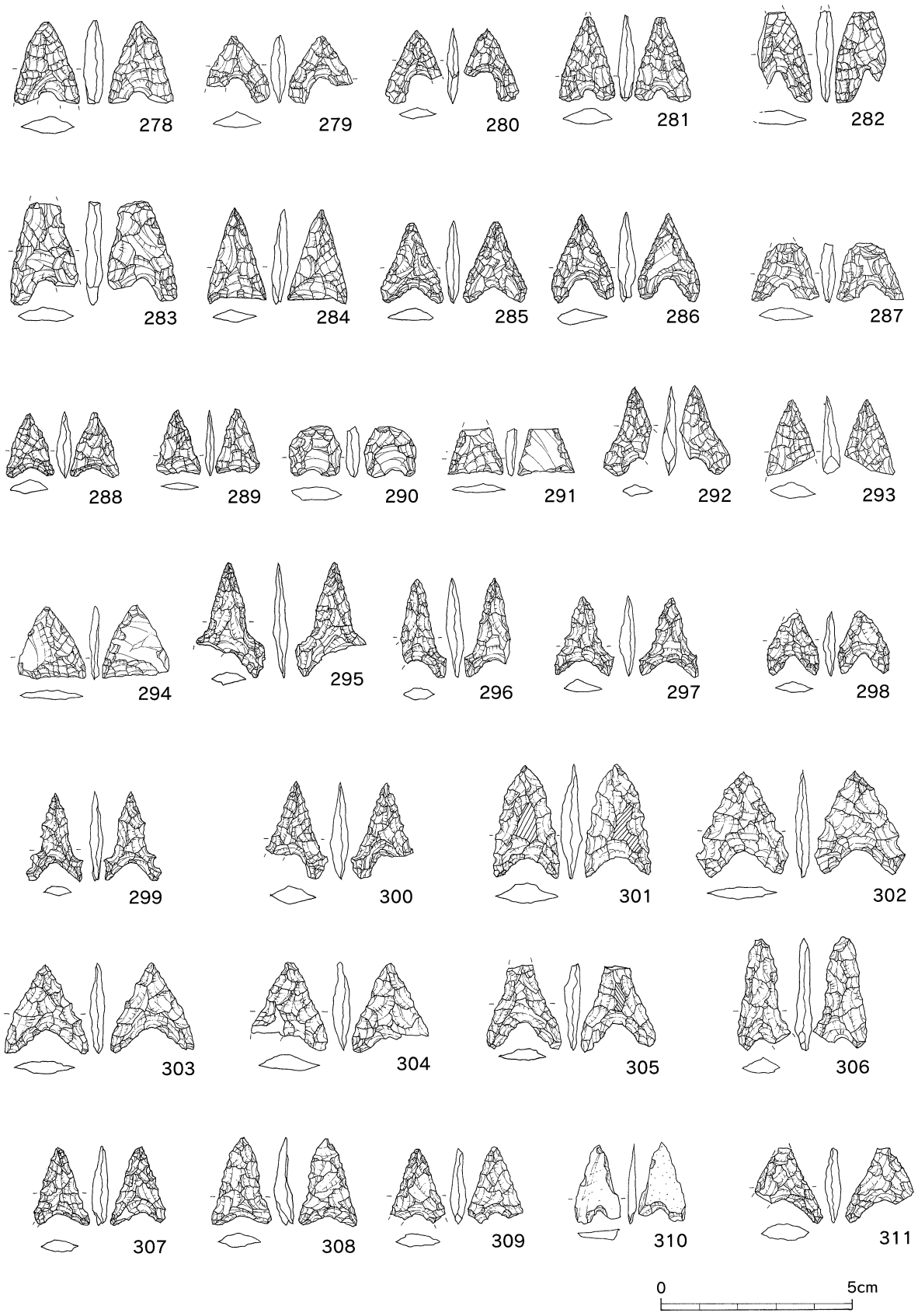
遺物番号	出土地区	層位	分類	部位	調整・文様	色調	胎土	備考
185	c	5b層上	XVI	胴部～底部付近	外:斜位条痕→横位条痕 内:斜位ケズリ	外:明褐7.5YR5/6 内:にぶい黄橙10YR6/4	A:少　B:少　C:少　D:微　E:微　H:微	
186	b	5b層上	XVI	胴部～底部付近	外:横位条痕 内:横位工具ナデ	外:明褐7.5YR5/6 内:にぶい褐7.5YR5/4～灰黄褐10YR4/2	A:多　B:少　C:微　D:少　E:微	E粗大有り 内面に炭化物付着
187	b	5b層下	XVI	胴部～底部付近	外:文様ナシ 内:ナデ→不定方向条痕→ナデ	外:橙7.5YR6/6 内:にぶい黄橙10YR6/4	A:少 B:少 C:微 D:少 E:微 F:少 G:微 H:少	外面に煤付着 内面に炭化物付着
188	* ** **	5b層上 6層上 5a層	XVI	底部	外:圧着痕 内:粗いナデ	外:橙7.5YR7/6 内:明黄褐10YR7/6	A:中　B:少　D:中　E:少　F:中　H:中　I:微	
189	*	5a層	XVI	底部	外:ミガキ 内:ナデ	外:にぶい黄褐10YR5/3 内:明褐7.5YR5/6	A:中　B:少　C:微　D:少　E:少　F:少　J:微	
190	*	5a層	XVI	底部	外:条痕→ナデ 内:ナデ	外:にぶい黄褐10YR5/4 内:褐7.5YR4/4	A中　B:少　D:少　E:微　F:微　H:微	
191	*	5a層	XVI	底部	外:圧着痕 内:ナデ→ミガキ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:にぶい褐7.5YR5/4	A:多　D:少　E:微　F:少　G:中　H:中	
192	b	5a層	XVI	胴部～底部	外:ケズリ 内:粗いナデ	外:にぶい赤褐5YR4/4 内:褐7.5YR4/6	A:中　B:少　C:微　D:微　E:微　G:微	外面に煤付着 内面に炭化物付着
193	b	5b層上	XVI	胴部～底部	外:木葉の圧痕 内:条痕→ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい黄橙10YR5/4	A:中　B:中　D:微　E:微　F:少　H:多	H粗大有り。底面に木葉の圧痕,白色の付着物有り
194	c	5a層	XVI	胴部～底部	外:不定方向ケズリ→ナデ 内:不定方向ミガキ	外:にぶい黄褐10YR5/4 内:黒褐10YR3/1	A:少　B:微　C:中　D:多　F:中　G:中　H:少	底面に白色の付着物有り
195	*	5a層	XVI	胴部～底部	外:ケズリ 内:ナデ	外:明褐7.5YR5/6 内:にぶい黄橙10YR6/4～黒褐10YR3/1	A:少　B:少　C:少　D:中　E:少　F:少　H:中	内面に炭化物付着
196	b	6層中	XVI	胴部～底部	外:摩滅により不明 内:縦位ケズリ	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:明褐7.5YR5/6	A:少　B:少　C:少　D:微　F:少　H:少	
197	b	6層上	XVI	底部	外:刺突→圧着 内:剥落により不明	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:不明	A:多　B:少　D:少　E:微　I:微　J:微	
198	b	6層上	XVI	底部	外:ケズリ 内:調整ナシ	外:黒褐2.5Y3/1 内:オリーブ黒5Y3/1	A:多　B:少　C:微　D:少　F:少	



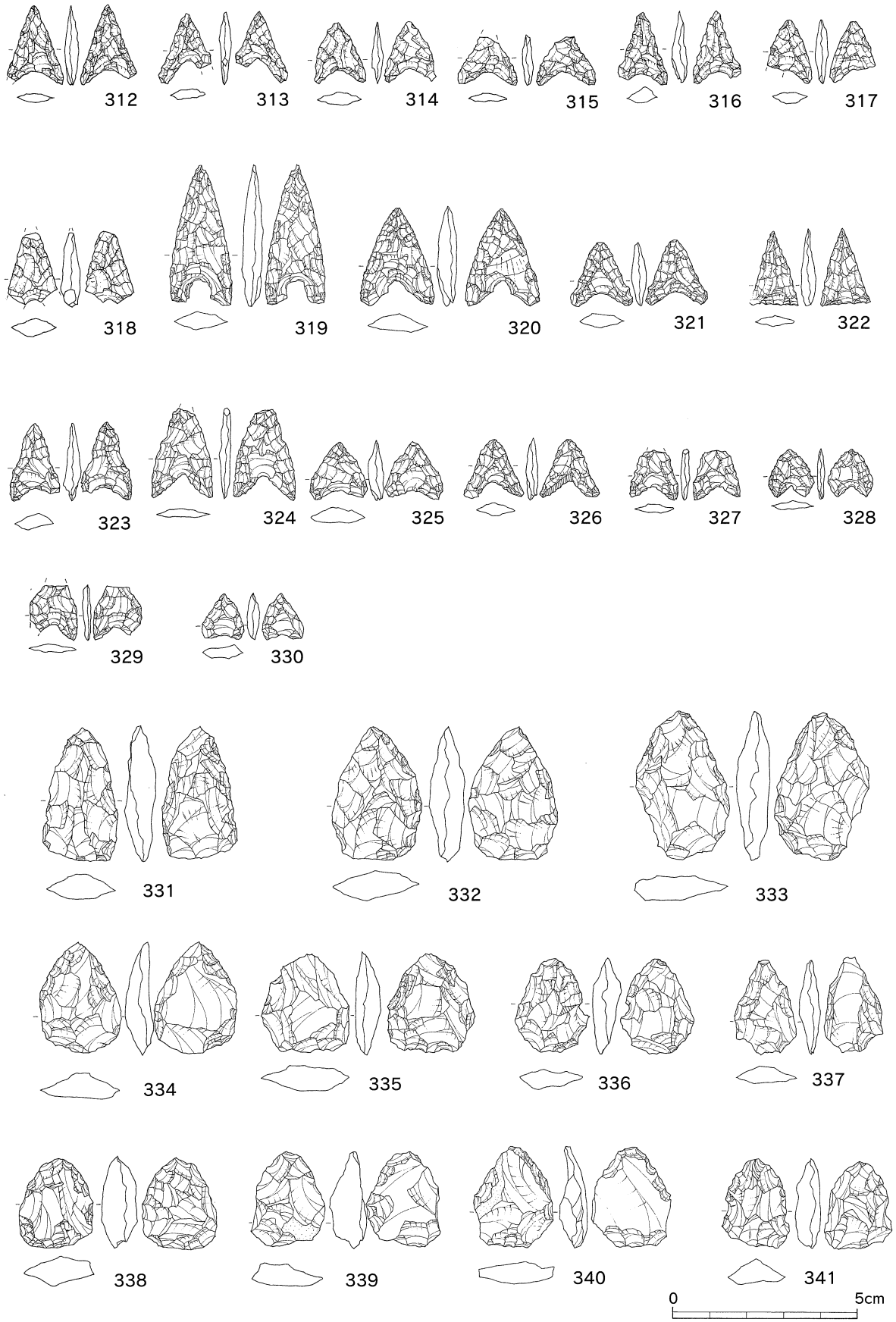
第27図　出土石器実測図（1）



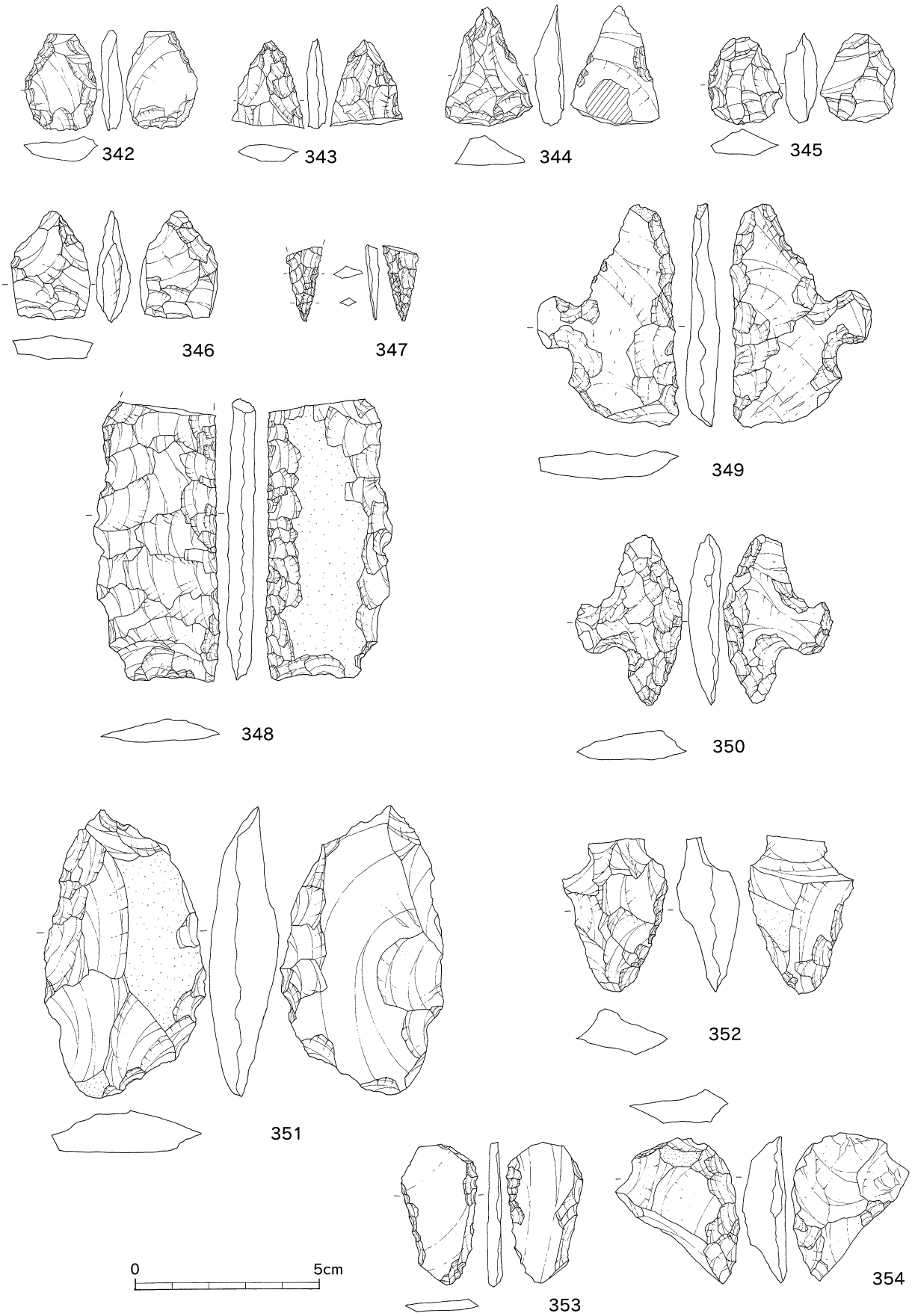
第28図　出土石器実測図（2）



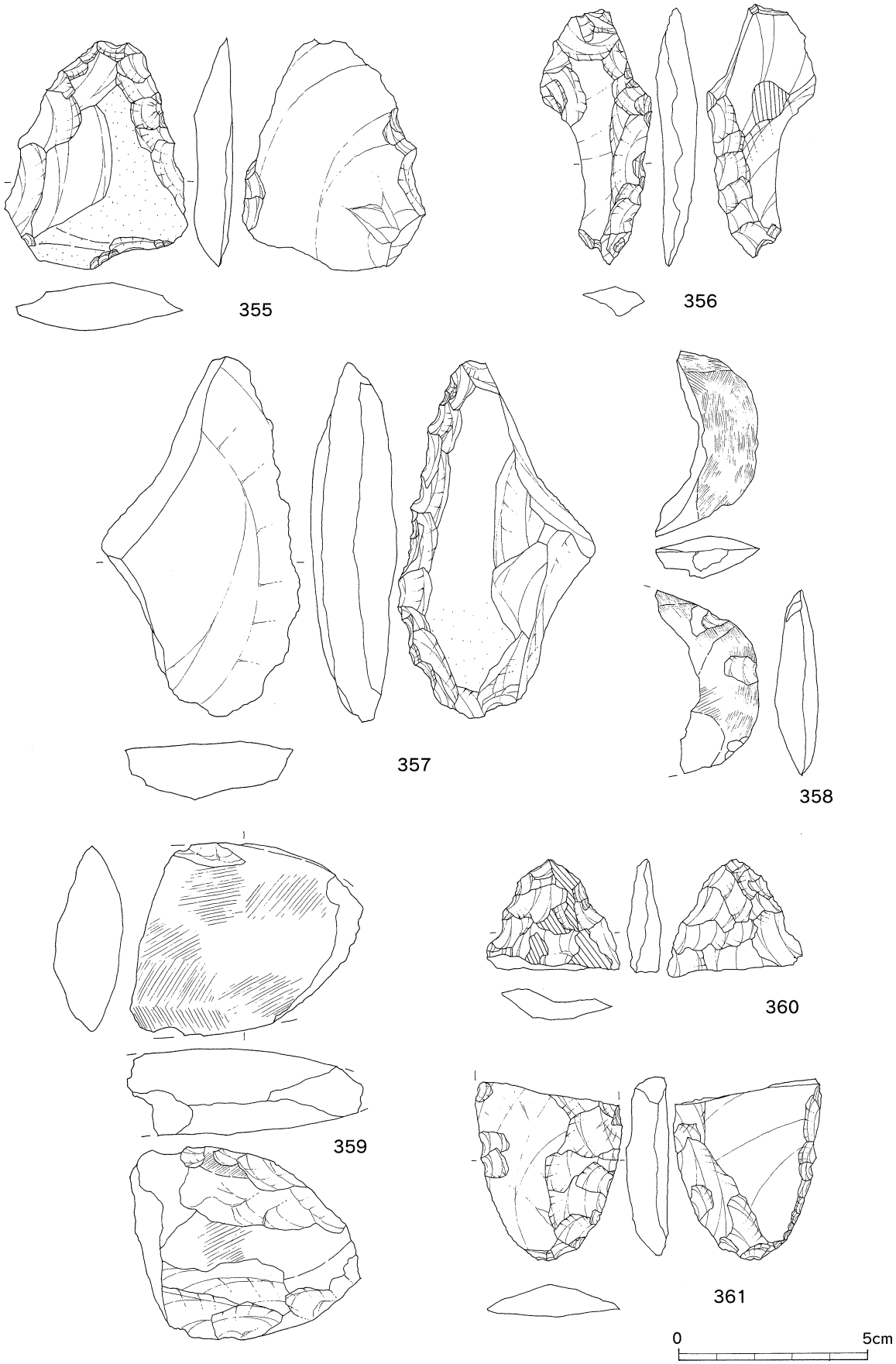
第29図　出土石器実測図（3）



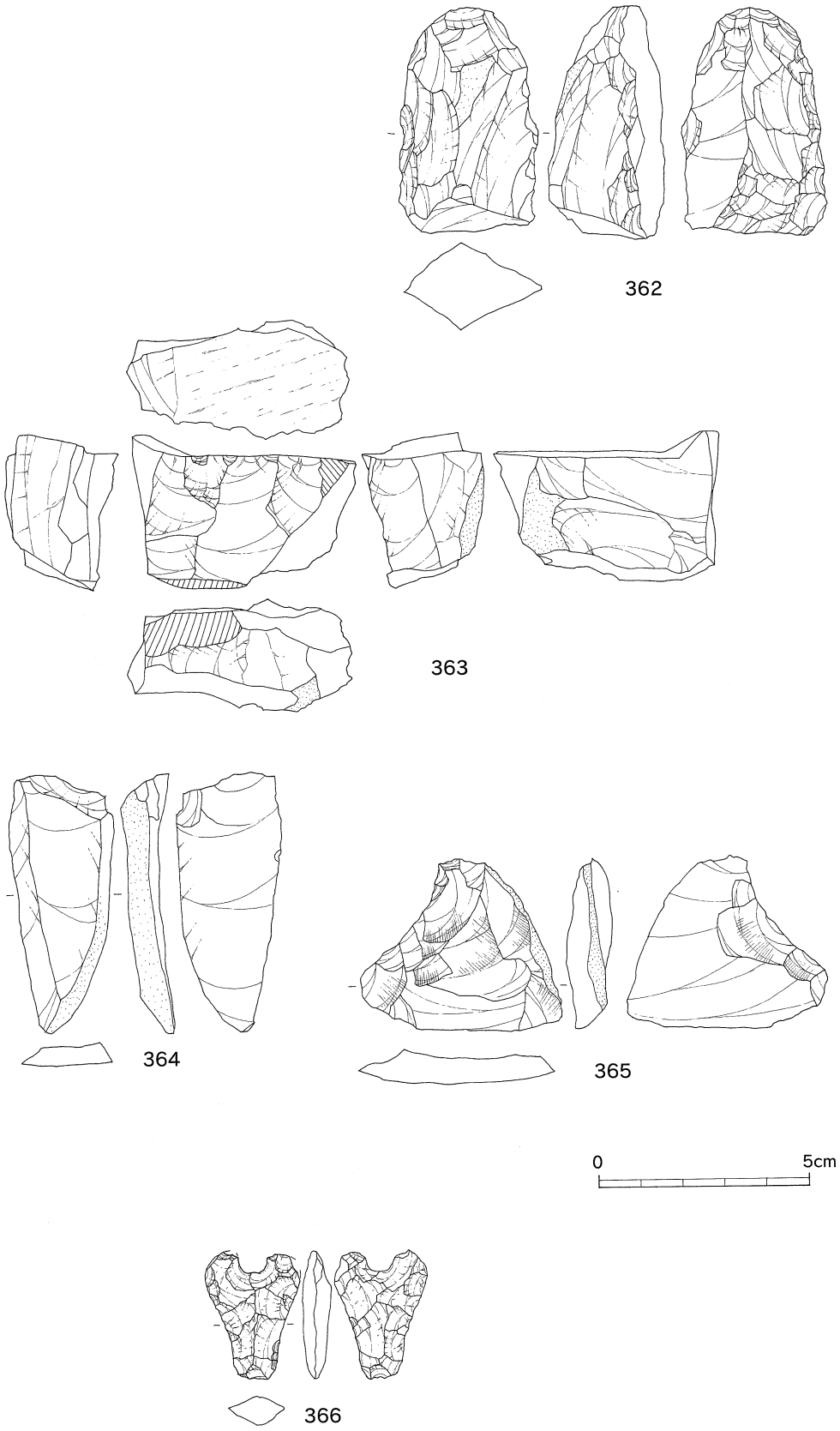
第30図　出土石器実測図（4）



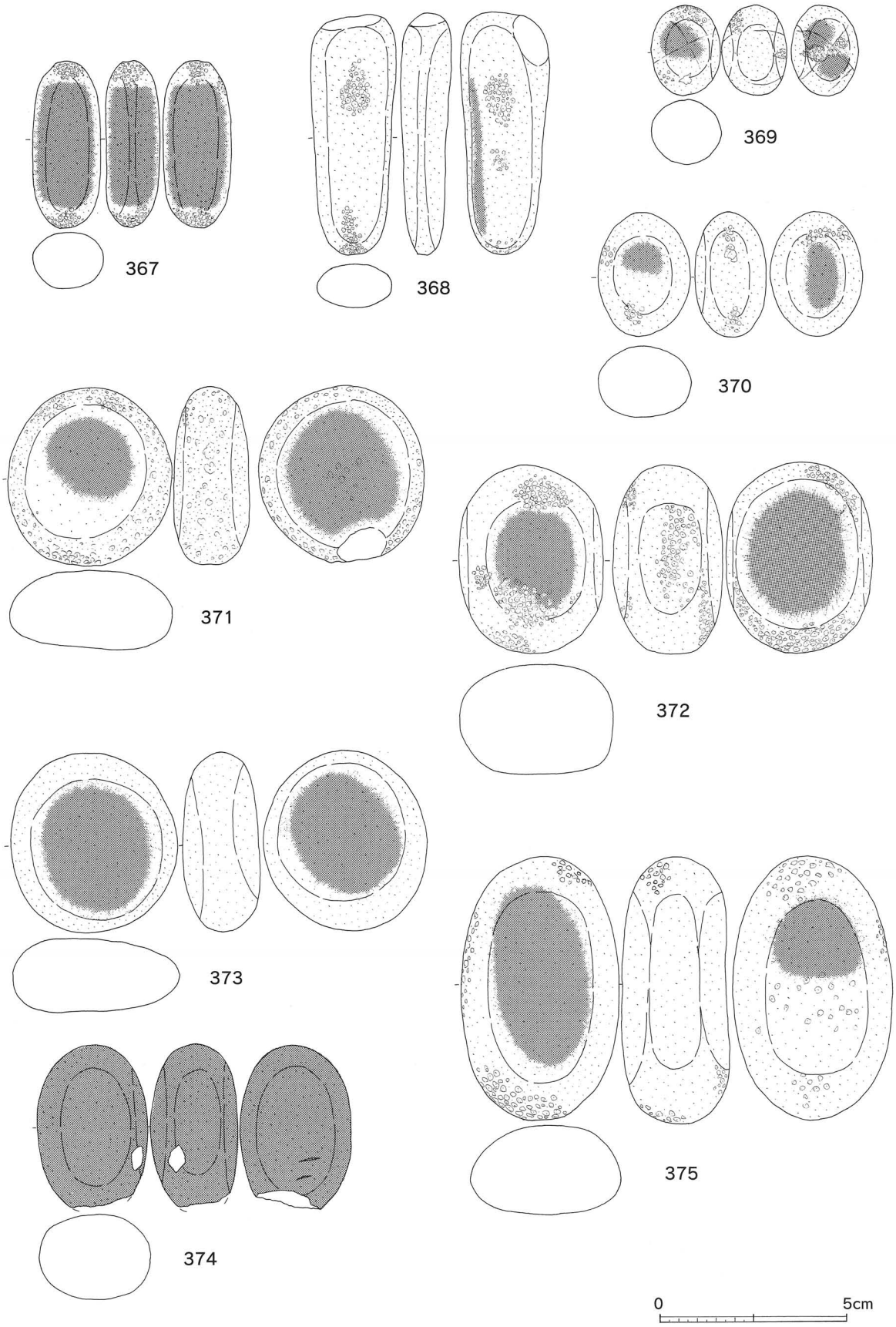
第31図　出土石器実測図（5）



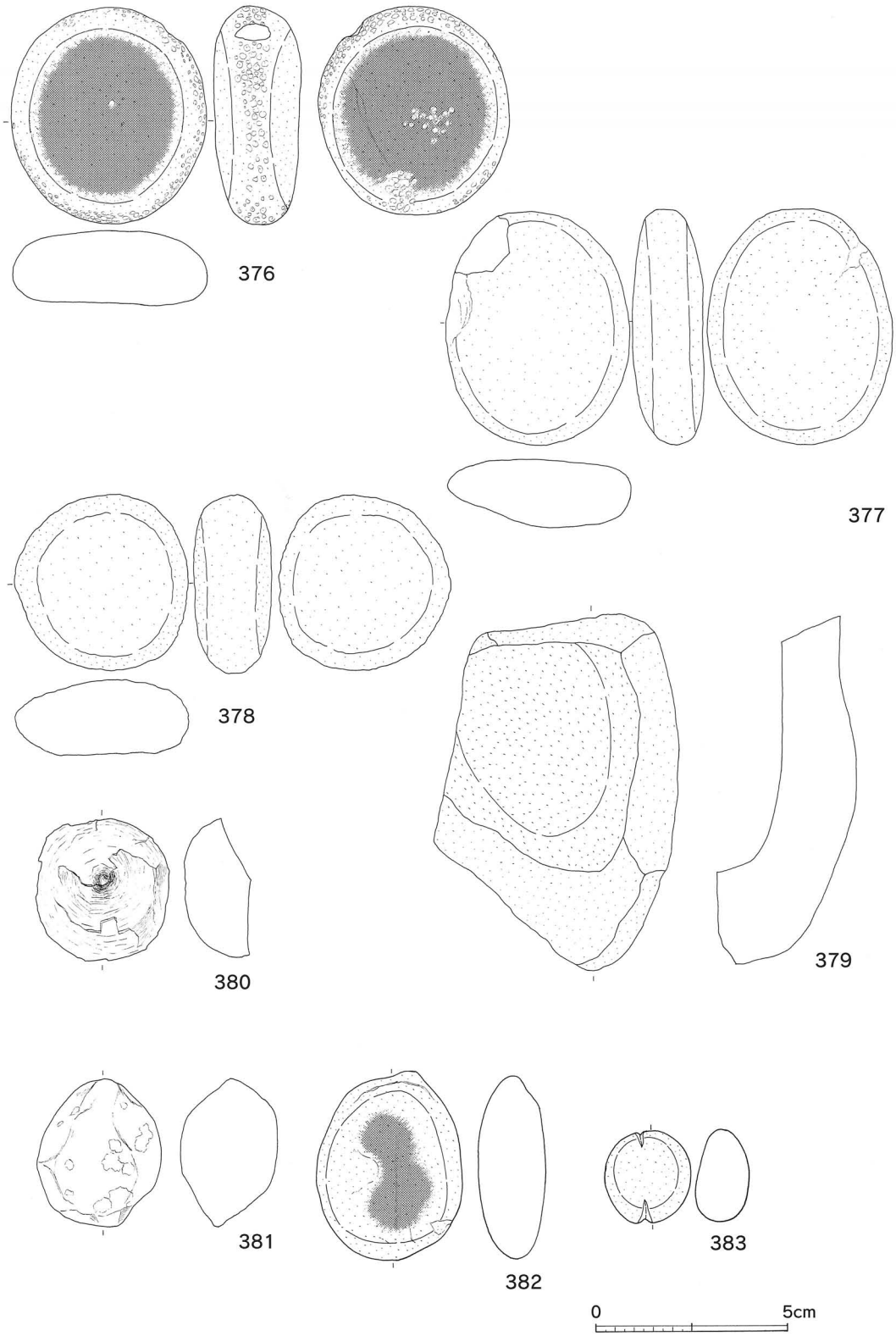
第32図　出土石器実測図（6）



第33図　出土石器実測図（7）



第34図　出土石器実測図（8）



第35図　出土石器実測図（9）

表15　石鏃観察表（1）

No.	製作工程	区	石材	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	挟り(cm)	欠陥部位	備考
199	完成品	c	黒曜石A	6中	1.95	1.2	0.3	0.15		
200	完成品	c	黒曜石A	5b上	3.45	1.95	0.6	0.3	片脚部	
201	完成品	—	黒曜石A	—	1.45	1.65	0.3	—	片脚部	
202	完成品	—	黒曜石A	—	—	1.5	0.45	—	下半部	
203	完成品	—	黒曜石A	—	1.3	—	—	—	下半部	
	完成品	b	黒曜石A	5a	1.7	2	0.4	0.2		
	完成品	b	黒曜石A	5b上	1.3	1.2	0.2	0		
	完成品	*	黒曜石A	5a	1.5	1.3	0.4	11		
	完成品	*	黒曜石A	5a	1.8	1.6	0.5	0.2		
	完成品	c	黒曜石A	5b上	1.9	1.9	0.4	0.2		
204	完成品	b	黒曜石B	5b上	3	1.5	0.4	0.2	両脚部	
205	完成品	—	黒曜石B	—	2.6	1.65	0.3	0.5		
206	完成品	—	黒曜石B	—	2.7	1.65	0.45	0.6		
207	完成品	—	黒曜石B	—	2.25	1.8	0.45	0.5		
208	完成品	—	黒曜石B	—	1.95	1.65	0.3	0.75	尖端部	
209	完成品	—	黒曜石B	—	2	1.65	0.3	0.45		
210	完成品	—	黒曜石B	—	—	1.5	0.3	0.6	尖端部	
211	完成品	—	黒曜石B	—	2.1	1.2	0.4	0.3	片脚部	
212	完成品	—	黒曜石B	—	2	1.8	0.5	0.4		
213	完成品	—	黒曜石B	—	2.1	1.65	0.4	0.6		
214	完成品	—	黒曜石B	—	2.1	1.65	0.45	0.45		
215	完成品	b	黒曜石B	5a	2.25	1.6	0.45	0.8	片脚部	
216	完成品	—	黒曜石B	—	1.2	1.5	0.45	0.5		
217	完成品	—	黒曜石B	—	2.25	1.65	0.4	0.75		
218	完成品	b	黒曜石B	6中	1.95	1.8	0.6	0.5	片脚部	
219	完成品	—	黒曜石B	—	1.95	1.65	0.5	0.3		
220	完成品	b	黒曜石B	5b上	2.4	1.5	0.45	0.4	片脚部	
221	完成品	—	黒曜石B	—	1.95	2	0.45	0.45	尖端部	
222	完成品	—	黒曜石B	—	2.1	1.5	0.3	0.6	片脚部	
223	完成品	—	黒曜石B	—	—	1.95	0.45	0.6	尖端部	
224	完成品	—	黒曜石B	—	2.1	1.8	0.5	0.4		
225	完成品	b	黒曜石B	5b上	2.7	1.35	0.3	0.5	両脚部	
226	完成品	—	黒曜石B	—	—	1.5	0.45	0.6	尖端、片脚部	
227	完成品	—	黒曜石B	—	2.55	1.8	0.4	0.45	片脚部	
228	完成品	—	黒曜石B	—	2.25	1.8	0.45	0.4		
229	完成品	—	黒曜石B	—	—	—	0.45	0.45	片脚部以外	
230	完成品	b	黒曜石B	5b上	2	1.8	0.5	0.6		
231	完成品	—	黒曜石B	—	—	—	0.4	—	片脚部	
232	完成品	—	黒曜石B	—	1.95	1.4	0.45	0.15		
233	完成品	—	黒曜石B	—	1.8	1.2	0.5	0.4		
234	完成品	b	黒曜石B	5b上	—	1.8	0.3	0.4	尖端部	
235	完成品	—	黒曜石B	—	—	1.8	0.45	0.3	尖端部	
236	完成品	—	黒曜石B	—	1.95	1.65	0.2	0.45	片脚部	
237	完成品	—	黒曜石B	—	1.5	1.35	0.3	0.45		
238	完成品	—	黒曜石B	—	1.5	1.35	0.4	0.3	片脚部	
239	完成品	—	黒曜石B	—	1.5	1.35	0.3	0.3		
240	完成品	—	黒曜石B	—	1.35	1.2	0.3	0.15		
241	完成品	—	黒曜石B	—	1.95	1.8	0.45	0.15		
242	完成品	—	黒曜石B	—	1.8	1.2	0.3	0.45		
243	完成品	—	黒曜石B	—	1.65	1.05	0.3	0.7		
244	完成品	—	黒曜石B	—	1.4	1.35	0.45	0.4		
245	完成品	—	黒曜石B	—	1.7	1.95	0.3	0.45	尖端、片脚部	
246	完成品	—	黒曜石B	—	—	—	0.4	—	片脚部以外	
247	完成品	—	黒曜石B	—	2.4	1.5	0.45	0.9	片脚部	
248	完成品	—	黒曜石B	—	1.35	1.5	0.45	0.2		
249	完成品	—	黒曜石B	—	1.35	1.05	0.3	0.5		
250	完成品	—	黒曜石B	—	1.65	1.2	0.3	0.6		
251	完成品	—	黒曜石B	—	2.25	1.95	0.4	0.75	片脚部	
252	完成品	b	黒曜石B	5b上	1.65	1.35	0.4	0.15	片脚部	
253	完成品	—	黒曜石B	—	1.65	1.65	0.4	0.15		
254	完成品	—	黒曜石B	—	1.7	1.65	0.45	0.2	片脚部	
255	完成品	b	黒曜石B	5b上	1.65	1.7	0.4	0.5	片脚部	
256	完成品	b	黒曜石B	5a 5b	1.8	1.5	0.4	0.5	片脚部	
257	完成品	—	黒曜石B	—	2.7	—	0.3	0.75	片脚部	
258	完成品	b	黒曜石B	5a	1.2	1.5	0.3	0.5	尖端部	
259	完成品	b	黒曜石B	5a	1.35	1.5	0.3	0.3		
260	完成品	—	黒曜石B	—	1.5	1.5	0.4	0.45		
261	完成品	—	黒曜石B	—	1.35	1.35	0.3	0.45		
262	完成品	—	黒曜石B	—	1.65	1.5	0.3	0.2	片脚部	
263	完成品	—	黒曜石B	—	1.5	1.5	0.3	0.45		

表16　石鏃観察表(2)

No.	製作工程	区	石材	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	挟り(cm)	欠陥部位	備考
264	完成品	b	黒曜石B	6中	1.65	1.5	0.4	0.45		
265	完成品	—	黒曜石B	—	—	—	0.3	0.75	片脚部以外	
266	完成品	b	黒曜石B	5b上	—	1.35	0.15	0.5	尖端、片脚部	
267	完成品	b	黒曜石B	5a	1.95	—	0.45	0.45	片脚部以外	
268	完成品	—	黒曜石B	—	1.65	1.5	0.4	0.75	片脚部	
	完成品	b	黒曜石B	5b上	1.2	1.1	0.3	0.3		
	完成品	b	黒曜石B	5b上	1.3	1.2	0.2	0.3		
	完成品	b	黒曜石B	5b上	1.3	1.3	0.3	0.4		
	完成品	b	黒曜石B	6中	1.4	1.4	0.3	0.3		
	完成品	b	黒曜石B	5b上	1.2	1.3	0.4	0.3		
	完成品	b	黒曜石B	5b下	1.7	1.5	0.4	0.2		
	完成品	b	黒曜石B	5b上	1	1	0.2	0.1		
	完成品	b	黒曜石B	5b上	1.8	1.7	0.4	0.5		
	完成品	b	黒曜石B	5a	1.7	1.4	0.3	0.1		
	完成品	b	黒曜石B	5b下	1.9	1.5	0.4	0.1		
	完成品	b	黒曜石B	5b下	1.7	1.7	0.3	0.3		
	完成品	b	黒曜石B	5b下	1.6	1.3	0.2	0.4		
269	完成品	b	黒曜石C	5b上	2.25	1.65	0.3	0.7		
270	完成品	b	黒曜石C	5b上	1.65	1.3	0.2	0.4		
271	完成品	—	黒曜石C	—	1.8	1.1	0.3	0.3	片脚部	
	完成品	b	黒曜石C	5a	1.5	1.6	0.3	0.2		
	完成品	b	黒曜石C	5a	—	—	—	—		
	完成品	*	黒曜石C	5a	2.2	1.8	0.4	0.5		
	完成品	**	黒曜石C	5a	2.2	1.4	0.2	0.5		
272	完成品	—	黒曜石F	—	2	1.35	0.2	0.4	尖端、片脚部	
273	完成品	—	チャート	—	1.1	1.1	0.2	0.15		
274	完成品	b	チャート	5b上	2.2	1.7	0.2	0.7		
275	完成品	—	チャート	—	2	1.35	0.3	0.45	尖端部	
276	完成品	—	チャート	—	2.25	2	0.2	0.7	尖端部	
277	完成品	—	チャート	—	1.3	1.05	0.2	0.45	片脚部	
278	完成品	—	チャート	—	2.2	1.35	0.4	0.3	両脚部	
279	完成品	—	チャート	—	1.35	1.35	0.3	0.5	片脚部	
280	完成品	—	チャート	—	1.35	1.35	0.2	0.45	片脚部	
281	完成品	—	チャート	—	1.3	1.1	0.4	0.2		
282	完成品	—	チャート	—	2.4	1.35	0.4	0.7	片脚部以外	
283	完成品	b	チャート	1	2.55	1.4	0.3	0.4	尖端、片脚部	
284	完成品	—	チャート	—	1.3	1.1	0.4	0.15		
285	完成品	—	チャート	—	1.6	1.3	0.2	0.2		
286	完成品	—	チャート	—	1.9	1.3	0.4	0.45		
287	完成品	—	チャート	—	1.35	1.35	0.2	0.3	尖端部	
288	完成品	—	チャート	—	1.7	1.25	0.4	0.25		
289	完成品	—	チャート	—	1.3	0.9	0.15	0.1		
290	完成品	**	チャート	5b下	1.05	0.15	0.2	0.15		
291	完成品	—	チャート	—	1.5	0.15	0.15	0	尖端部	
292	完成品	—	チャート	—	1.7	1.3	0.3	0.2	片脚部	
293	完成品	—	チャート	—	1.35	1.05	0.4	0.1	下半部	
294	完成品	—	チャート	—	1.4	1.3	0.2	0		
	完成品	**	チャート	5b下	2.2	1.9	0.3	0.5		
	完成品	**	チャート	5b上	1.9	1.8	0.4	0.5		
	完成品	*	チャート	5a	2	2.2	0.4	0.2		
	完成品	*	チャート	5a	1.4	1.2	0.2	0.2		
295	完成品	—	サヌカイト	—	2.25	1.4	0.2	0.5	片脚部	
296	完成品	—	サヌカイト	—	2	1.1	0.3	0.4	片脚部	
297	完成品	—	サヌカイト	—	1.6	1.1	0.4	0.4		
298	完成品	—	サヌカイト	—	1.3	1.05	0.2	0.45	尖端部	
299	完成品	—	サヌカイト	—	1.8	1.05	0.2	0.4		
300	完成品	—	サヌカイト	—	1.95	1.3	0.4	0.45	片脚部	
301	完成品	—	サヌカイト	—	2.2	1.35	0.4	0.4		
302	完成品	b	サヌカイト	5b上	2.1	1.8	0.2	0.5		
303	完成品	b	サヌカイト	5a5b上	2.75	2.25	0.35	0.65		
304	完成品	—	サヌカイト	—	2.3	3	0.45	0.35	片脚部	
305	完成品	b	サヌカイト	5a上	—	1.95	0.45	0.7	尖端部	
306	完成品	**	サヌカイト	5a	2.2	1.05	0.3	0.15	片脚部	
307	完成品	—	サヌカイト	—	2.1	1.05	0.4	0.2		
308	完成品	—	サヌカイト	—	1.7	1.3	0.4	0.15		
309	完成品	—	サヌカイト	—	1.5	1.1	0.4	0.15	両脚部	
310	完成品	—	サヌカイト	—	2.1	1.5	0.15	0.15		
311	完成品	b	サヌカイト	5a	1.65	1.7	0.3	0.45	尖端、片脚部	
312	完成品	b	サヌカイト	5a 5b	1.6	1.3	0.3	0.2	片脚部	
313	完成品	—	サヌカイト	—	1.5	1.3	0.2	0.45	片脚部	

表17　石鏃観察表(3)

No.	製作工程	区	石材	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	挟り(cm)	欠陥部位	備考
314	完成品	—	サヌカイト	—	1.2	1.05	0.2	0.3		
315	完成品	—	サヌカイト	—	1.35	1.3	0.15	0.4	尖端部	
316	完成品	—	サヌカイト	—	1.4	1.05	0.3	0.2		
317	完成品	b	サヌカイト	5a 5b	1.35	0.9	0.2	0.3	片脚部	
318	完成品	—	サヌカイト	—	1.5	1.05	0.4	0.1	両脚部	
	完成品	＊＊	サヌカイト	5a	3	1.8	0.4	0.5		
	完成品	b	サヌカイト	5a	2.7	1.7	0.4	0.5		
319	完成品	—	頁岩系	—	2.85	1.3	0.4	0.5		
320	完成品	—	頁岩系	—	1.9	1.5	0.4	0.2		
321	完成品	—	頁岩系	—	1.3	1.3	0.3	0.2		
322	完成品	＊	頁岩系	5a	1.5	1	0.3	0		
	完成品	b	頁岩系	5b下	1.3	1.5	0.3	0.2		
323	完成品	—	石英	—	2.2	1.05	0.3	0.2		
324	完成品	—	石英	—	2.2	1.1	0.15	0.5		
325	完成品	—	石英	—	1.3	1.1	0.3	0.15		
326	完成品	—	石英	—	1.4	1.3	0.2	0.3		
327	完成品	—	石英	—	1.35	0.9	0.15	0.4	尖端部	
328	完成品	—	石英	—	1.05	1.05	0.15	0.2		
329	完成品	—	石英	—	1.65	1	0.15	0.4	尖端、片脚部	
330	完成品	—	石英	—	1	0.8	0.2	0.1		
	完成品	＊	石英	5b上	1.4	0.9	0.2	0.3		
	完成品	—	石英	5b上	1.6	1.2	0.2	0.2		
	完成品	＊＊	石英	5b上	2.2	1	0.3	0.5		
	完成品	b	石英	5b上	2.1	1.4	0.4	0.6		
	完成品	—	石英	5a	1.8	1	0.3	0.2		
	完成品	＊	石英	5b上	1.6	1.2	0.2	0.1		
	完成品	—	石英	5b上	1.6	1.5	0.3	0.2		
	完成品	—	石英	5b上	1.5	1.1	0.2	0.3		
	完成品	＊	石英	5b上	1.5	1.4	0.3	0.1		
	未成品	—	黒曜石A	5b上	2.5	1.5	0.2	-		
	未成品	—	黒曜石A	5b上	1.8	1.7	0.5	-		
	未成品	b	黒曜石A	5b上	2.2	1.8	0.7	-		
	未成品	b	黒曜石A	5b上	1.8	1.4	0.5	-		
	未成品	—	黒曜石A	—	1.7	1.3	0.5	-		
	未成品	b	黒曜石A	5b上	2	1.6	0.5	-		
	未成品	b	黒曜石A	5b上	2.4	1.6	0.6	-		
	未成品	＊＊	黒曜石A	5a	2.3	2	0.7	-		
	未成品	b	黒曜石B	5b下	1.5	1.8	0.5	-		
	未成品	b	黒曜石B	5b下	1.3	1.2	0.3	-		
	未成品	b	黒曜石B	6上	1.6	1.3	0.5	-		
	未成品	b	黒曜石B	5b上	1.7	1.7	0.4	-		
	未成品	b	黒曜石B	5a	1.5	1.2	0.4	-		
	未成品	b	黒曜石B	6上	1.7	1.9	0.3	-		
	未成品	b	黒曜石B	5b下	2	1.4	0.3	-		
	未成品	b	黒曜石B	5b上	1.1	1.5	0.3	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	21.3	0.4	0.3	-		
	未成品	b	黒曜石B	5a 5b	1.8	1.7	0.3	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	2.2	1.1	0.4	-		
	未成品	b	黒曜石B	5b下	2.2	1.4	0.3	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	1.9	1.5	0.3	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	1.7	1.7	0.4	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	1.9	1.7	0.3	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	1.5	1.1	0.4	-		
	未成品	b	黒曜石B	5b上	1.5	1.2	0.3	-		
	未成品	b	黒曜石B	5a 5b	2.4	2	0.4	-		
	未成品	b	黒曜石B	5b上	1.8	1.5	0.3	-		
	未成品	b	黒曜石B	5a	2.2	2	0.3	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	1.5	1.4	0.4	-		
	未成品	b	黒曜石B	5a 5b	1.9	1.8	0.4	-		
	未成品	b	黒曜石B	5a	2.3	1.6	0.4	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	2.1	2	0.6	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	2.5	2	0.8	-		
	未成品	b	黒曜石B	5a 5b	2.6	2	0.8	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	2.3	1.7	0.5	-		
	未成品	b	黒曜石B	5b上	1.5	1.4	0.3	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	1.4	1.2	0.2	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	2.4	1.4	0.6	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	2.6	2	0.7	-		
	未成品	—	黒曜石B	—	2.1	1.4	0.3	-		
	未成品	b	黒曜石B	5a 5b上	2.6	1.8	0.6	-		

表18　石鏃観察表（4）

No.	製作工程	区	石材	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	挟り(cm)	欠陥部位	備考
	完成品	—	黒曜石B	—	1.7	1.2	0.4	-		
	未成品	b	黒曜石C	5a	1.7	1.2	0.3	-		
	未成品	b	黒曜石C	5b上	2	2.2	0.5	-		
	未成品	b	黒曜石C	5b上	2	1.6	0.2	-		
	未成品	b	黒曜石C	5a 5 b	1.8	1.6	0.4	-		
	未成品	b	黒曜石C	5a	2.2	1.5	0.3	-		
	未成品	—	黒曜石G	—	1.4	1.4	0.5	-		
	未成品	—	チャート	5a	1.9	1.2	0.3	-		
	未成品	—	チャート	5a	1.9	1.3	0.5	-		
	未成品	—	チャート	5a	1.8	1.5	0.3	-		
	未成品	*	チャート	5b上	1.8	1.4	0.3	-		
	未成品	b	チャート	5b下	2.2	1.2	0.3	-		
	未成品	—	チャート	—	1.9	1.3	0.3	-		
	未成品	—	チャート	—	2	1.6	0.6	-		
	未成品	—	チャート	—	2	1.3	0.4	-		
	未成品	—	チャート	—	1.8	1.1	0.4	-		
	未成品	—	チャート	5b上	2.3	1.6	0.5	-		
	未成品	—	チャート	—	2.2	1.2	0.4	-		
	未成品	—	チャート	—	2.1	1.5	0.3	-		
	未成品	b	サヌカイト	5b下	1.5	1	0.2	-		
	未成品	b	サヌカイト	5b上	1.7	1.5	0.2	-		
	未成品	b	サヌカイト	5b下	1.7	1.8	0.5	-		
	未成品	b	サヌカイト	5b下	2.1	2	0.4	-		
	未成品	—	サヌカイト	—	1.8	1.4	0.3	-		
	未成品	—	サヌカイト	—	1.8	1.4	0.3	-		
	未成品	—	サヌカイト	—	1.8	1.5	0.3	-		
	未成品	b	サヌカイト	5a	2.1	2	0.4	-		
	未成品	—	頁岩系	—	1.9	2.4	0.3	-		
	未成品	b	頁岩系	5b上	2.1	1.7	0.3	-		
	未成品	*	頁岩系	5b上	3	3.2	0.5	-		
	未成品	b	頁岩系	a 5b	2.7	1.6	0.5	-		
	未成品	—	頁岩系	—	1.7	1.6	0.2	-		
	未成品	b	頁岩系	5b上	2.2	2	0.5	-		
	未成品	*	頁岩系	5b上	2.3	1.7	0.5	-		
	未成品	—	頁岩系	—	1.6	1.5	0.3	-		
	未成品	—	石英	5b上	1.5	1.2	0.4	-		
	未成品	—	石英	5b上	1.6	1.5	0.4	-		
	未成品	—	石英	5b上	1.5	1.2	0.3	-		
	未成品	—	石英	—	1.7	1.5	0.2	-		
	未成品	—	石英	—	1.6	1.2	0.2	-		
	未成品	—	石英	—	1.5	1.5	0.3	-		
	未成品	—	石英	—	2	1.6	0.6	-		
	未成品	*	石英	5a	2	1.7	0.4	-		
	未成品	—	石英	—	2.4	1.6	0.3	-		
	未成品	*	石英	5b下	2.2	2.2	0.5	-		
	未成品	—	石英	—	2	1.6	0.6	-		

表19　その他の剥片石器観察表（1）

No.	製作工程	区	石材	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　　考
331	尖頭状石器	＊＊	頁岩系	5b上	3.6	2	0.8	
332	尖頭状石器	*	頁岩系	5b上	3.6	2.4	1	
333	尖頭状石器	*	頁岩系	5a	4.1	2.5	0.9	
334	尖頭状石器	—	頁岩系	—	3	2.2	0.8	
335	尖頭状石器	b	頁岩系	6上	2.7	2.4	0.7	
336	尖頭状石器	*	頁岩系	5a	2.6	2	0.8	
337	尖頭状石器	*	頁岩系	5a	2.6	1.7	0.6	
338	尖頭状石器	b	チャート	5b上	2.4	2	1	
339	尖頭状石器	*	石英	5b上	2.6	1.9	1	
340	尖頭状石器	b	頁岩系	5b上	2.7	2.1	0.8	
341	尖頭状石器	*	頁岩系	5b上	2.4	1.8	0.7	
342	尖頭状石器	*	頁岩系	5a	2.7	2	0.5	
343	尖頭状石器	*	頁岩系	—	2.3	2	0.5	
344	尖頭状石器	b	頁岩系	5b上	3.3	2.4	0.8	
345	尖頭状石器	*	頁岩系	5b上	2.4	2.7	0.8	
346	尖頭状石器	*	玉髄系	5b上	2.9	2.2	1	
347	石錐	—	チャート	—	—	—	—	
348	石槍	*	石英	5b上	7.6	3.3	0.7	
349	石匙	b	サヌカイト	5a	6	3.8	0.8	
350	石匙	＊＊	サヌカイト	5a	4.6	2.9	0.8	
351	クレイパー	*	頁岩系	6中	7.9	4.4	1.8	
352	クレイパー	*	頁岩系	5a	4.1	2.9	1.6	

表20　その他の剥片石器観察表(2)

No.	製作工程	区	石材	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　　考
353	クレイパー	*	頁岩系	6上	3.9	2	0.4	
354	クレイパー	b	サヌカイト	5b上	4	3.2	1.2	
355	クレイパー	b	頁岩系	5b上	6	4.9	0.9	
356	クレイパー	*	頁岩系	5a	6.8	3	0.8	
357	クレイパー	**	頁岩系	5a	9.6	5.3	2.3	
358	石斧	b	頁岩系	5a	2.7	4.9	1.1	
359	石斧	b	不明	5b上	6.2	5	2.3	
360	面加工石器	*	石英	5a	3	3.5	0.9	
361	面加工石器	b	頁岩系	6中	4.7	3.8	1.1	
362	面加工石器	—	頁岩系	—	5.6	3.2	2.7	
363	面加工石器	—	頁岩系	—	3.7	5.3	2.5	
364	剥片	c	頁岩系	5a	6.2	2.5	0.8	
365	剥片	b	黒曜石B	5a	4	4.8	1	
366	トロトロ石器	c	サヌカイト	5a	3	2.3	0.7	二次加工あり

上部は欠損しており、石槍などの製作途中品である可能性も考えられる。(353)は、扁平な剥片の両縁に刃部を設けたものである。(354)は、肉厚の剥片の縁辺に刃部を設ける。(355)は、礫面付近の剥片の縁辺に、粗い剥離を施し刃部を作出する。(356)は、縦長を呈する剥片の片側縁に刃部を作出する。(357)も、剥片の片側縁に刃部を設けるが、礫面には研磨痕が認められ、柄にはめ込み、使用した際に生じたと考えられる。

石斧(第32図358,359)

(358)は、使用時に破砕した刃部である。両刃になるよう、両面から丁寧に研磨した痕跡が認められる。(359)は、剥離により全体の形状を整えた後に、研磨により仕上げた石斧の柄にあたる部分である。

両面加工石器(第32図360～第33図363)

(360)は、玉髄系の石材を、両面からの剥離により尖頭状に仕上げたものである。正面、側面共に不定形であり、石鏃若しくは尖頭状石器の加工途中であった可能性が考えられる。(361)は、側縁からの剥離を刃部とするとスクレイパーとなるが、石斧の柄とも考えられる。(362･363)は、船野型細石核に似た形状を呈するが、調整等の特徴から確証が持てないため、この器種に含めた。

剥片(第33図364,365)

(364)は、連続的な縦長剥片剥離作業の際に生じた剥片である。片側縁には礫面を持つ。(365)は、不定形な剥離を行い作出された剥片の一端に、抉り部を設ける格好で加工を行った剥片である。

敲石(第34図367,368)

(367)は、細長い尾鈴酸性岩の円礫を用いたものである。両端には、使用により生じた敲打痕が顕著に残される。また、全面に研磨痕が認められる。(368)は、研磨痕は両縁に認められ、両面に敲打痕が残される。

磨石(第34図369～第35図378)

(369･370)は小ぶりである。(371･373･376)は、扁平な円礫を用いたものであり、両面に研磨痕が残される。(377･378)も形状は似ているが、石材が粗く、使用痕は認められない。(372)は、隅丸の直方体

表21　礫石器観察表

No.	製作工程	区	層位	石材名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	敲打痕	研磨痕	備考
367	敲石	b	5b上		8.6	3.6	2.9	150	両端	全面	
368	敲石	b	5b上		12.9	5.3	2.6	238	端及び両面	両側縁	
369	磨石	*	5a		4.8	3.6	3.5	83	一端及び片面	両側縁	
370	磨石	b	5a		6.6	5	3.8	170	一端及び両側縁	両面	
371	磨石	b	5b上		8.7	9.6	4.1	515	周縁	両面	
372	磨石	b	5a		10	7.7	5.6	400	周縁及び片面	両面	
373	磨石	b	5a		9.6	8.9	4.1	400	一端	全面	
374	磨石	b	5a		14.9	8.4	5.6	340	無	全面	一部欠損
375	磨石	b	6上		8.6	6	4.7	1000	周縁	両面	
376	磨石	b	6上		11.3	10.2	4.3	600	周縁	両面	
377	磨石	b	5a		12.3	10	3.8	600	—	—	一部欠損
378	磨石	**	5b下		9	9	4	350	—	—	
382	磨石	b	5b上		10.3	9.4	2.7	600	周縁及び片面	両面	
383	磨石	b	5a		9.6	8.4	2.9	350	周縁及び両面	両面	
384	磨石	b	5a		10.1	11.2	2.2	600	周縁及び両面	両面	
385	磨石	**	5a		8.2	8.9	3.1	310	周縁	両面	一部欠損
386	磨石	c	5a		—	8.3	4.1	400	両側縁	両面	
387	磨石	b	5b上		9.4	7.1	2.9	400	周縁及び片面	片面	
388	磨石	b	5b上		—	—	5.9	180	—	両面	欠損
389	磨石	**	5b上		8.2	—	3.8	235	周縁	両面	欠損
390	磨石	b	5a		120	10.7	4.5	1200	周縁	両面	
391	磨石	b	5a		10.2	6.4	2.7	280	周縁	両面	
392	磨石	b	6中		10.4	9.4	2.9	600	周縁	両面	
393	磨石	**	5b上		8.7	6.5	5.2	350	周縁	両面	
394	磨石	**	5b上		8.9	7.6	5.3	800	両側縁	両面	
395	磨石	**	5a		6.3	5.2	3.7	200	周縁	両面	
396	磨石	b	5b上		12	10.2	3.2	800	周縁及び片面	片面	
397	磨石				8.4	6.5	4.1	295			
398	磨石				10.2	5.5	6.2	1000			
399	磨石				10.6	—	3.4	600			欠損
400	磨石				8.6	5.1	1.8	140			
401	磨石				10.6	9	3.3	600			
402	磨石				12.1	10.8	3.3	800			
403	磨石				10.4	8.2	3.4	600			
404	磨石				8.7	8	4.4	485			
379	石皿	—	—		18	12.4	4.1	1400	—	—	欠損
380	不明	*	5a		7.8	6.3	5	395	両端及び片側縁	両面	
381	不明	b	5a		7.4	6.9	3.5	285	—	—	欠損

状を呈するが、これは使用による形状の変化と考えられる。

用途不明石器(第33図366、第35図379～382)

(366)は、「Y」字状を呈するよう、両面より細かな調整を行ったものである。「羊頭状石器」または「トロトロ石器」と呼ばれる石器である。(379)は、砂岩の礫に急激な窪みが見られる。観察したところ、この窪みには使用痕は認められない。宮崎県総合博物館学芸課の松田清孝氏に鑑定を依頼したところ、タマネギ状風化により剥落した礫とのことであった。自然な状態で縄文早期の包含層に混入するとか考えにくく、遺跡が形成された時期に持ち込まれたと考えられる。形状は石皿に適しているが、使用痕に乏しい。(380～382)はノジュールである。加工痕や使用痕は全く認められない。

石錘(第35図383)

円礫の両端に、糸を巻きつけられるよう、浅い切り込みが設けられている。表面採集品であり、縄文時代前期以降のものと考えられる。

第Ⅲ章　まとめ

旧石器時代について

最も古いものは、調査区周辺から採集された剥片尖頭器である。ただし、包含層中からの出土ではなく、当該期の様相は不明である。

細石刃文化期の遺物としては、5点出土した細石核がある。分類上は野岳型にあたる。全て黒曜石製であるが、石材の採集地は多岐にわたっており、旧石器時代において既に石材交流が活発に行われていたことを示している。なお、縄文早期包含層中より出土しているため、これら石器群と縄文時代草創期の土器群との関係は不明である。

縄文時代について

縄文時代を述べるにあたって、まず出土土器から考察を行い、その後に遺構、出土石器について触れたい。

出土土器

本遺跡から出土した土器は、Ⅰ～ⅩⅥ類に分類を行った。

Ⅰ類の隆帯爪形文土器は2点のみの出土である。堂地西段階に相当し、この土器群の中では後出である。

Ⅱ類は岩本式土器であり、1点のみの出土である。

Ⅲ類Aは、典型的な前平式土器であり、1点のみの出土である。Ⅲ類Bは、口縁部直下に工具による刺突を行い、胴部に深い条痕を行った土器である。この土器はⅢ類Aと同じく前平式土器の範疇とされているが、田野町内ではⅢ類Aよりもはるかに多く出土しているほか、前ノ原第2遺跡ではこの土器のみで構成される時期が存在する。更に、鹿児島県でも志布志湾や大隅半島に分布が多いことから(文献1)、宮崎及びその周辺における前平式の亜種と認識できる。Ⅲ類Ｂは、出土量が50点近くにも達しており、一時的であるにせよ、調査区内に恒常的な集落が形成されていた可能性が考えられる。

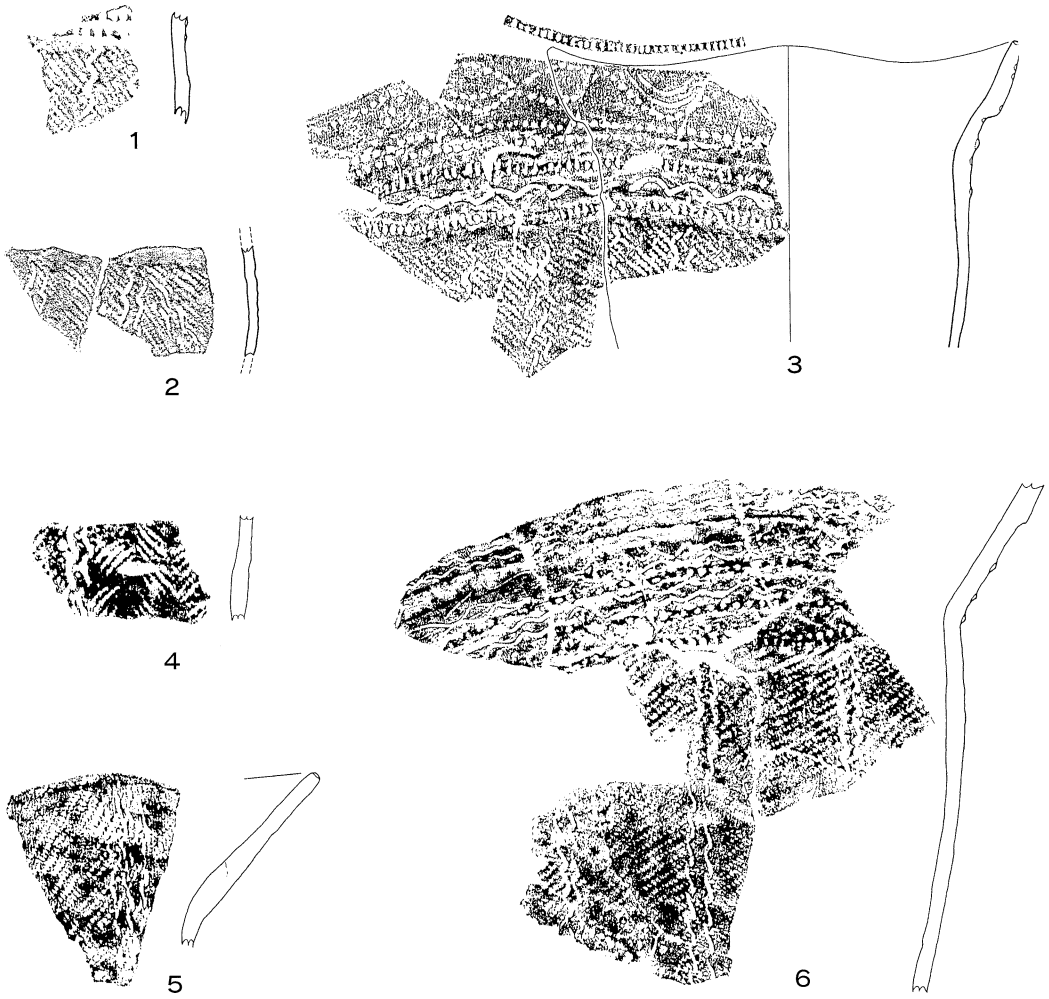
Ⅳ類は、胴部の条痕から鹿村野地区遺跡の報告書で「別府原タイプ」とした土器である(文献2)。胴部片のみであったため、器形や口縁部の文様の有無は定かでない。

Ⅴ類は３つに細分を行ったが、いずれも出土量は少ない。

Ⅵ類の押型文のうち、(24～28)は下菅生B式、(29～31)はヤトコロ式に該当する。ヤトコロ式は、町内ではそれのみで構成される時期が設定できるが(註1)、出土量は少ない。

Ⅶ類は、Ⅴ・Ⅵ類に併行する縄文または撚糸文土器である。ただし、(32)には縄文の施文後に沈線を施しているが、これは通常の縄文土器では見られない。(33)は撚糸文の施文後に器面が磨かれていることから、塞ノ神式土器の底部付近である可能性も考えられる。

Ⅷ・ⅨA類は、それぞれ単純期が想定されているにも関わらず、ごく少量しか出土していない。ⅨB類になると、出土量は増加傾向にあるが、この土器は細分が進んでおり、一つ一つの時期に用いられた土器の出土量は、さほど多くなかったと考えられる。なお、(45)は、縄文と撚糸の間に無文部が見られる。従来結節縄文とされてきた土器であるが、無文部の間隔が広く、縄文と結節部を一度に施文したようには見えない。更に、施文後にナデ消し等の処理を行った痕跡も認められない。第36図は、町内出土の、



第36図　町内出土平拵式土器の縄文
（1：元野河内，2：前ノ原第2，3：天神河内第1，4～6：前畑第1）

胴部に縄文を施文した平栫式土器であるが、いずれも縄文と撚糸が連動しておらず、縄文の後に縦位の撚糸を施文する。結果的には結節縄文を施文したように見えることから、模倣品であった可能性が考えられる。

Ｘ類の出土は多く、集落の規模が一際大きくなったと考えられる。

ＸＩ類の出土土器のうち、刻目突帯貼り付けを行うA類は、鹿児島県高山町鐘付遺跡の出土遺物に酷似する。また、波状の条痕文を行うB類のうち(75)は、鹿児島県隼人町宮坂貝塚で出土した資料に類例を見ることができる。C類は、文様構成が鹿児島県国分市上野原遺跡の同型式にも見られることからこの類に

表22　黒草第２遺跡出土土器点数表

分類	分　類　名	掲載	不掲載	合計
O	遺構内	2	0	2
I	隆帯爪形文	2	0	2
II	岩本式	1	0	1
IIIA	前平式(貝殻刺突)	1	1	54
IIIB	前平式(工具刺突)	4	1	
IIIC	前平式(胴部)	2	45	
IV	別府原タイプ	1	3	4
VA	下剥峯式	2	16	79
VB	桑ノ丸式	1	7	
VC	辻タイプ	1	2	
VI	押型文	8	27	
VII	縄文･撚糸	2	5	
VIII	手向山式	5	3	
IXA	天道ヶ尾式	1	1	21
IXB	平栫式	7	12	
X	塞ノ神式	21	105	126
XIA	苦浜式(隆帯文)	6	35	73
XIB	苦浜式(波状文)	3		
XIC	苦浜式(沈線文)	5		
XID	苦浜式(刺突文)	7	17	
XIIA	条痕文1式(格子目文)	10	148	198
XIIB	条痕文1式(規則性あり)	23		
XIIC	条痕文1式(不規則)	17		
XIII	条痕文2式	7	0	7
XIVA	無文(薄手)	10	144	154
XIVB	無文(厚手)	5	37	42
XV	その他	23	0	23
XVI	底部	16	50	66

分類不能…607点

含めたが、調整が他のものとは大きく異なっていることから、別型式である可能性も考えられる。D類に見られる「V字押引き」は、同型式に行われる典型的な施文手法である。XI類は、まとまった量が出土しているが、細分の編年的関係については不明である。

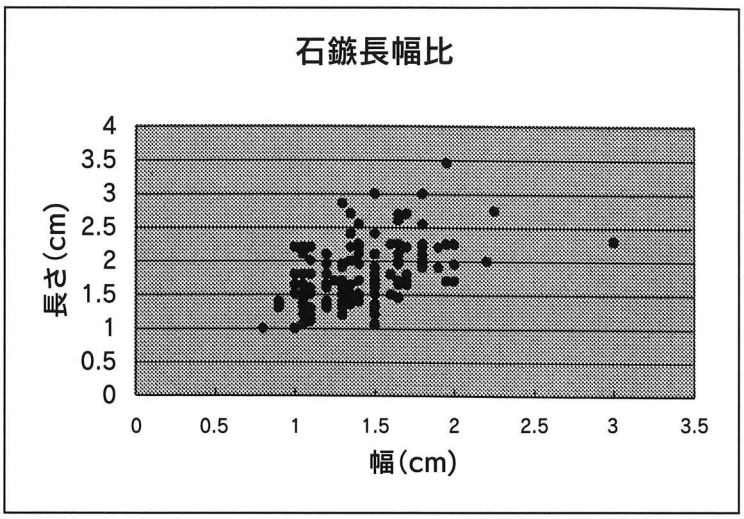
XII類は、本遺跡中最も多く出土した土器である。本遺跡の出土遺物は、その条痕文のパターンから、A～C類に分類を行った。A類の斜格子目状の条痕は、小山遺跡において類例が確認されている(註2)。この資料は斜格子目状の条痕に先んじて縦位の条痕を行っていることから、この類に含めた。ただし、(92～99)には縦位の条痕が行われず、X類に属する可能性も考えられる。B類に見られる条痕は、条痕文1式において最もポピュラーな一群であり、大部分が重留分類の1式Aに該当すると考えられる(文献3)。C類は、小片であるため文様のパターンが認識できなかったものもあるが、(128･138)などは、1式Cに該当すると考えられる。この一群は、塞ノ神式の後に位置付けられているが、1式と2式の編年的関係については、現段階ではまだ不明である。なお、アカホヤ火山灰層上位からの出土例もあるが、本遺跡は大部分が調査前に削平されており、アカホヤ上位の状況は定かでない。

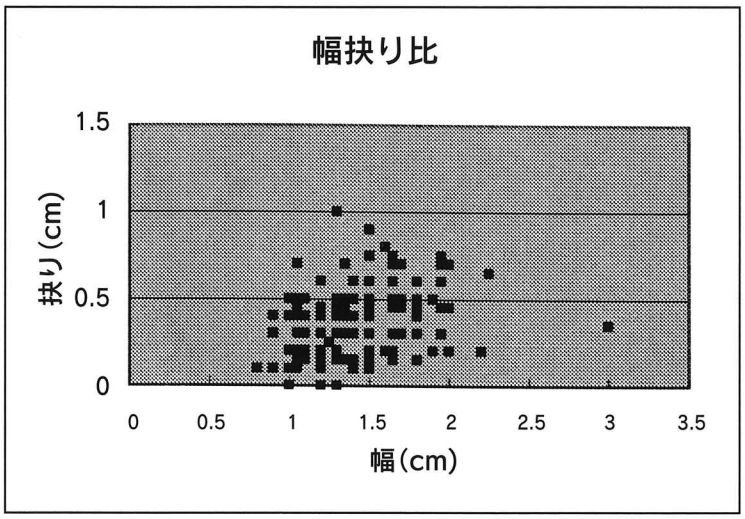
XIII類は、XII類に比べ出土量が極端に少ない。このうち、篦状工具による微隆起の意図が窺える資料は(139･145)のみであり、他は先の丸い工具による条痕に過ぎない。なお、XI～XIII類は、胎土に黒曜石を混入するという共通点が認められた。

XIV類のうち、薄手のA類は、鹿村野地区遺跡などで出土した薄手の無文土器とは異なり、器面調整はナデのみであることから、別種の土器と思われる。

XV類の中で(161･162)は、断面が場所によって大きく異なることから、「土器」であることすら定かでない。(180～182)はアカホヤ火山灰層降灰以降の土器と考えられるが、この土器の存在により、前期に至っても、この地域に集落が形成されていたことが判明した。

以上、出土土器の総括を行った。分類ごとの出土量は、表22のとおりである。これを見ると、本遺跡は草創期から条痕文1式にかけて営まれた集落遺跡であり、工具刺突を行う前平式期に一時的に大規模化した後、暫くは廃絶に近い状態が続き、平栫式期を経て、塞ノ神式から条痕文1・２式にかけて最盛期を迎えたと考えられる(註3)。また、アカホヤ降灰直後の条痕文土器期の遺物は欠落しているが、前期になり、再び集落が築かれた形跡も窺える。





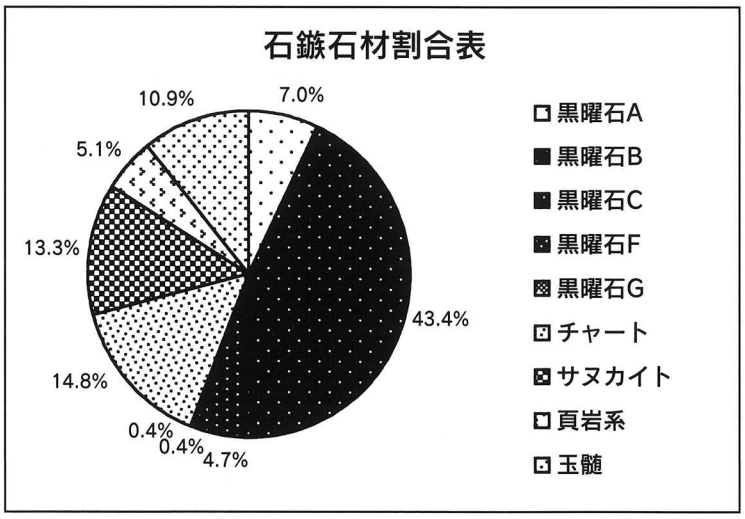


表23　出土石鏃分析グラフ

集石遺構

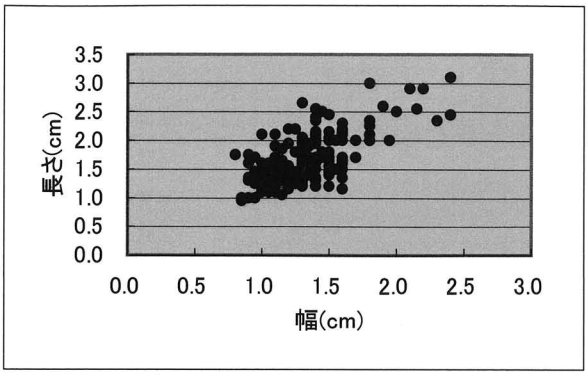
本遺跡から検出された集石遺構は、全体で22基である。これらの多くは、検出された層位から、アカホヤ直下に構築されたと考えられる。13基は掘り込みを伴うが、掘り込みの深さは一様に浅く、深さが20cmを超えるものは僅か2基であった。また、底石を伴う集石遺構は2基のみであるなど、殆どが至って簡単な構造であることも判明した。集石遺構は、縄文時代早期を通して次第に簡略化される傾向が指摘されているが(文献4)、それを裏付ける検出例となった。

出土石器

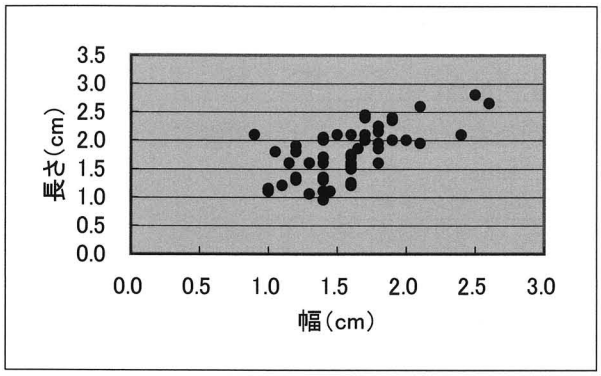
石鏃について

完成品は169点、未製品も含めると256点出土した。これは、鹿村野地区ズクノ山第2遺跡E地区の249点を超え、町内最多の出土量である。

石鏃は、石材によって形態差がある。すなわち、黒曜石Ｂやサヌカイトは両縁に肩を設けるものや、両縁が鋸歯状を呈するものが多くなる一方で、チャート製の石鏃は、基部の抉りがU字状を呈するものが多くなるのである。表23は、石鏃の形態を散布図に表したものである。参考として、鹿村野地区の出土石鏃を表24に掲載した。これを見ると、黒草第2遺跡の石鏃は、長さ・幅共にズクノ山２Ｅのものより一回り大きく、ズクノ山2Ｆに近くなりながらも、ドットがややばらついている。石鏃の製作された時期は、土器同様、殆どがアカホヤ直下であろう。この間に、石

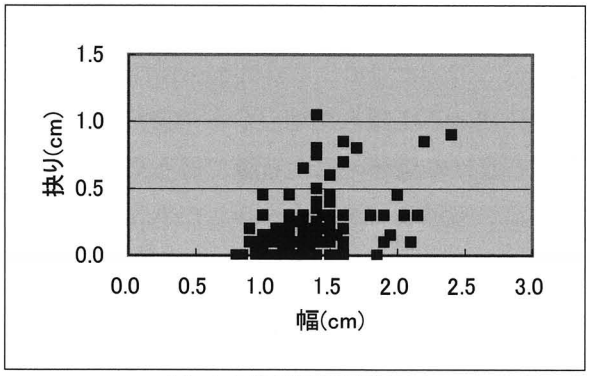


ズクノ山第2遺跡E地区

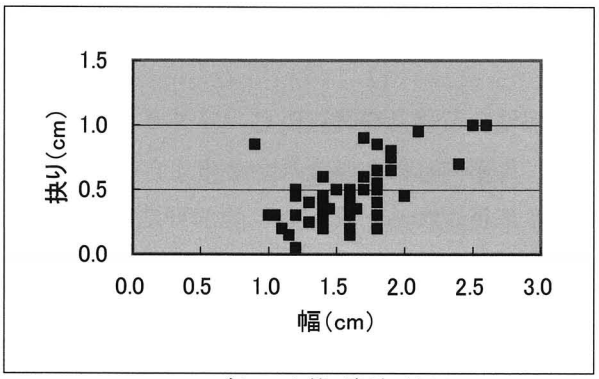


ズクノ山第2遺跡F地区

出土石鏃形態長幅比

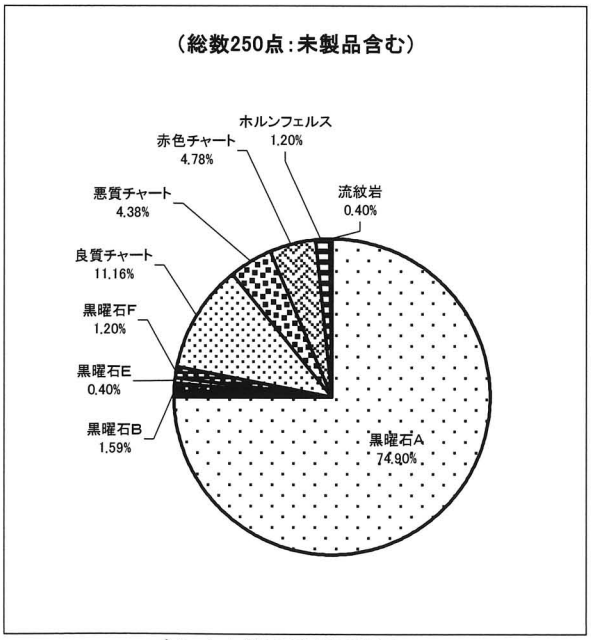


ズクノ山第2遺跡E地区

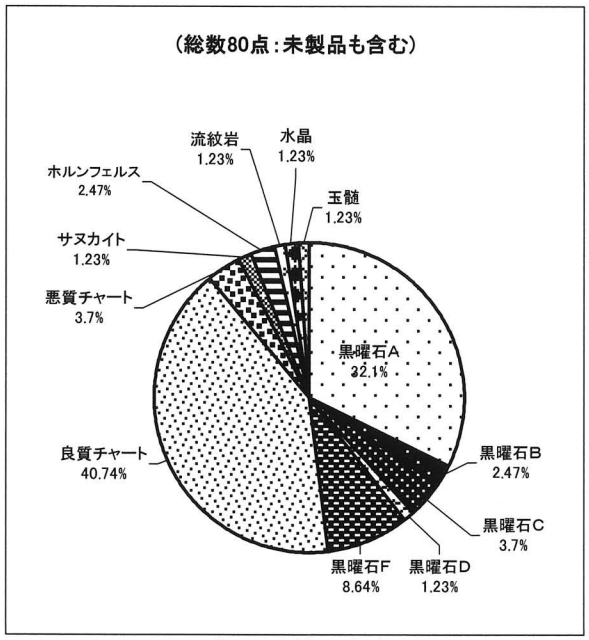


ズクノ山第2遺跡F地区

出土石鏃形態幅抉り比



ズクノ山第２遺跡E地区



ズクノ山第２遺跡F地区

出土石鏃石材割合表

表24　鹿村野地区遺跡出土石鏃分析グラフ

(ズクノ山第２遺跡E地区：早期前葉、ズクノ山第２遺跡F地区：中期前葉)

材と石鏃形態の両方が同時に変化したとは考えにくく、石材によって製作する石鏃の形態を選択していた可能性が高い。

表23の石材割合表のうち、黒曜石は、次の地点が採集地と考えられる(文献5)。

黒曜石　A：上青木･桑ノ木津留地域
　　B：姫島
　　C：針尾島地域
　　D：多久地域
　　E：市来地域
　　F：それ以外、もしくは判別不能
　　G：山野地域

遠隔地の石材は黒曜石B,C、サヌカイトであり、半径200km以上離れた地点からの直接間接の交易の結果、集落内に持ち込まれたと考えられる。殊に、黒曜石Bは本遺跡の出土石鏃で最も高い割合を示しており注目される。表24は、鹿村野地区の早期前葉、中葉の石鏃石材の割合を示したものであるが、それを踏まえると、年代が下るに従って黒曜石Aの割合が徐々に減少し、中葉にはチャートが、後葉～アカホヤ直下には黒曜石Bがそれぞれ増加する傾向が認められる。こうした変化に採集地の位置を考え合せると、西方からの遠隔地交易が徐々に廃れ、北方または東方からの遠隔地交易へと移行していった様子が推測される。一方、早期を通して恒常的に出土するチャート、頁岩系、石英は、半径50kmを越えない地域を採集地としていたと予想される(註4)。

その他の石器について

スクレイパーが7点、石匙が2点、石斧が2点、石槍が1点、石錐が1点と、非常に貧弱である。用いられる石材は、スクレイパーが殆ど頁岩系で占められる一方で、石匙は2点ともサヌカイトを用いている。調査区からは、大量の剥片類も出土しているが、細かなチップは黒曜石･サヌカイト類が多い一方で、大ぶりの剥片は圧倒的に頁岩系が主体であった。これは、石材を器種によって選択していたことと、石材の質と原石採集地までの距離が反比例していたことが原因と考えられる。礫石器としては、磨石は僅か33点しか出土しておらず、敲石は2点のみである。(379)にあるような礫は、78点と数多く出土しているが、人為的に遺跡内に持ち込まれたと考えられるものの、使用痕に乏しく、石皿として堅果類の加工に使用されたものは少ないようである。表25は、時期的に一括性の高い縄文時代早期遺跡の石器組成を表したものであるが、黒草第2遺跡の石器組成からは、南九州における一般的な縄文時代早期の遺跡に見られる植物質食料に依存した生業形態とは異なり、むしろ狩猟的な生業形態を窺わせる(文献6)。また、遺構が少なく、持ち運びが容易な道具が多いことは、居住地を移動しやすかったとも考えられる。

表25　縄文早期遺跡の組成(時期的に偏在した遺跡のみ)

遺跡名	所在地	主な時期	集石遺構	炉穴	打製石鏃	磨製石鏃	石槍	石匙	石錐	石斧	敲石	磨石	トロトロ石器
留ヶ宇戸	串間市	早期前葉	46	1	7	1				3		27	
別府原	西都市	早期前葉	48	307	約700	1	1		3	8		66	
ズクノ山2E	田野町	早期前葉	67	0	249	1	2		4	20		232	4
礼ノ元	田野町	早期前葉	84	49	69	1	2			8	16	137	
天ヶ城	高岡町	早期中葉	20	0	14		1	1		8	25		
ズクノ山2F	田野町	早期中葉	39	3	80					2		44	1
黒草2	田野町	Ah直下	22	0	256		1	2	1	2	2	33	1

(注意事項)　＊表中の分類は、報告書及びその資料を用いた論考の記述と一致しない場合がある。

周辺遺跡との関連

本遺跡の周辺には、同じく旧石器時代～縄文時代早期を主体とする元野河内遺跡が立地する。この２つの遺跡は距離的に近いことから、生活環境を共有していたと想定できる。周辺の当該期遺跡も踏まえて、元野地区の先史時代の変遷を考察したい(文献7)。なお、元野河内遺跡については、立地の違いから以下の３地点に分離した。

元野川旧河川沿いの低地及び中州＝A・B区

元野川旧河川の合流地点西側に立地する傾斜地＝C・D区

元野川旧河川北側の段丘上＝E・F区

旧石器時代

ナイフ形石器文化期

最も古い時代の出土遺物は、ナイフ形石器文化期であり、元野河内C・E・F区や黒草第2遺跡にて出土した。この時期の遺物が集中して確認されたのはC区である。ナイフ形石器、角錐状石器、剥片尖頭器、スクレイパーなどが確認された。遺物が出土した地点は西方の傾斜面上であり、崩落の結果Ｃ区に混入したことから、本来は更に多量の遺物が存在したと考えられる。ナイフ形石器は、本野原遺跡や高野原遺跡からも少量ながら確認されている。元野河内遺跡Ｃ区と、それ以外のナイフ形石器は形態が異なることから、時期差が考えられる。なお、この時期の遺跡は、標高の高い地点に分布するのが特徴である。

細石器文化期

細石核が元野河内遺跡A・E区より1点ずつ確認されている。しかし、最も出土しているのは黒草第2遺跡であり、計6点が出土している。全て黒曜石製であり、編年的には古い時期に該当する。ほかに、高野原E～G区、本野原遺跡からも出土している。

旧石器時代の遺物は、出土は少量であるものの、ナイフ形石器・細石核を通して出土が見られる。当時の遊動生活にベース･キャンプが存在したかについては意見の分かれるところであるが、いずれにしろ、水場に近い元野地区が、拠点的役割を果たした可能性は高い。

表26　アカホヤ降灰以前の土器出土状況表（田野町及び近隣）

出土量（◎：50点以上、○5点以上50点未満、△5点以下）

	遺跡名＼型式名	旧石器		草創期						早期前葉									早期中葉								早期後葉			他	Ah直下				Ah直上		
		ナイフ形石器期	細石刃期	神子柴	掃除山段階	奥ノ仁田段階	堂地西段階	水迫式	岩本式	前平式貝殻刺突	前平式工具刺突	加栗山式	別府原タイプ	吉田式	倉園B式	石坂式	薄手無文	川原田式	中原Ⅱ・Ⅲ式	下剥峯式	辻タイプ	桑ノ丸式	稲荷山・早水台式	下菅生B式	中原Ⅳ・Ⅴ式	縄文・撚糸文	田村・ヤトコロ式	手向山式	妙見・天道ヶ尾式	平栫式	塞ノ神式	壺形土器	苦浜式	条痕文Ⅰ式	条痕文Ⅱ式	条痕文Ⅲ式	条痕文Ⅰ式	轟B式	曽畑式
元野地区	元野河内A-B		△				△				○		△							○		△	○	○			○	△	○	○	○	○		△	△			—	
	元野河内C-D	○																												△				○	○	△	—		△
	元野河内E-F	△	△	△		△	○			△	△		○	△						◎		○	○	◎		○	○	△	△	○	○		○					—	
	黒草第2	△	○				△		△	△	○		△							○	△	○		○		○		○	△	○	◎		◎	◎	○			—	
	高野原E-G	△	△									△	○						△	△		△		△							△							—	
	高野原A																												△									—	
	畑田																																	?			?		
鹿村野地区	スグノ山2A-C		△																																				
	スグノ山2D																							△		△													
	スグノ山2E									△			◎			△	△	△		○		○	○		△					△	△							—	
	スグノ山2F	○	△									△	○							○		◎	△	◎		○	○		○	△	○	△						—	△
	スグノ山1												△									△		△							○		△		○				
	前ノ原2									△	○		○				○								△				○	○	△			△	△			—	
椎屋形・時屋地区	椎屋形1						◎																																
	椎屋形2									△		○	○			△				△		○		○															
	上の原1										△													△					△	△	△								○
	上の原1B	○	○															△									△	△		○									
	上の原2											○																			○								
	上の原3																																						
	白ヶ野2-3		○	△			△		△			○	△	○						○	○	○		◎			◎	○	○	◎	◎	○	△	○	○	○			○
	白ヶ野3B																							○		△	○	△	△	○	◎	△							
尾平	尾平・楢原																					○		○							△								
	楢原																										△	△			△								
船山	二ツ山1											○	△				△			○		○		○		△						△						—	
	馬渡1										○																											—	
前平地区	芳ヶ迫1								△	○		○	△				△	△		○	○	○	△	○	△		△	△										—	
	芳ヶ迫3						△													○				○	△		○											—	
	札ノ元	○	△				△			△	○	◎	○									△	△	△				○		○		△						—	
八重地区	前畑1										△	△	△							△	△			△					△	○	○								
	前畑2										△		○							△	△	○	△	○			△		△		○							—	
	宮田										△											△		○		△	△				△								
	砂田		△				○	△					○				△			○	△	△	△	○	△	△	△	△		○		△						—	
	永迫2																			○		△	○	○	△	△					△	△						—	
七野地区	七野4	○	△				○																								○						△	△
	丸野2										△													△							△								△
	長薮		△																					△							△							—	
	井手ノ尾		△	△			△	○	○	△	△						○			△	△	○		○	△		△	○				△						—	
天神	天神河内1		○							△	○										△	○		○		△	△	○		○	○		△		○			○	◎
	天神河内2																			○	△			△	△			△			○								
野崎	鹿毛3	△								△		△					△	○		○	○	○	○	○	○		△				○							—	

（注意事項）

＊表中の型式分類は、報告書及びその資料を用いた論考の記述と一致しない場合がある。

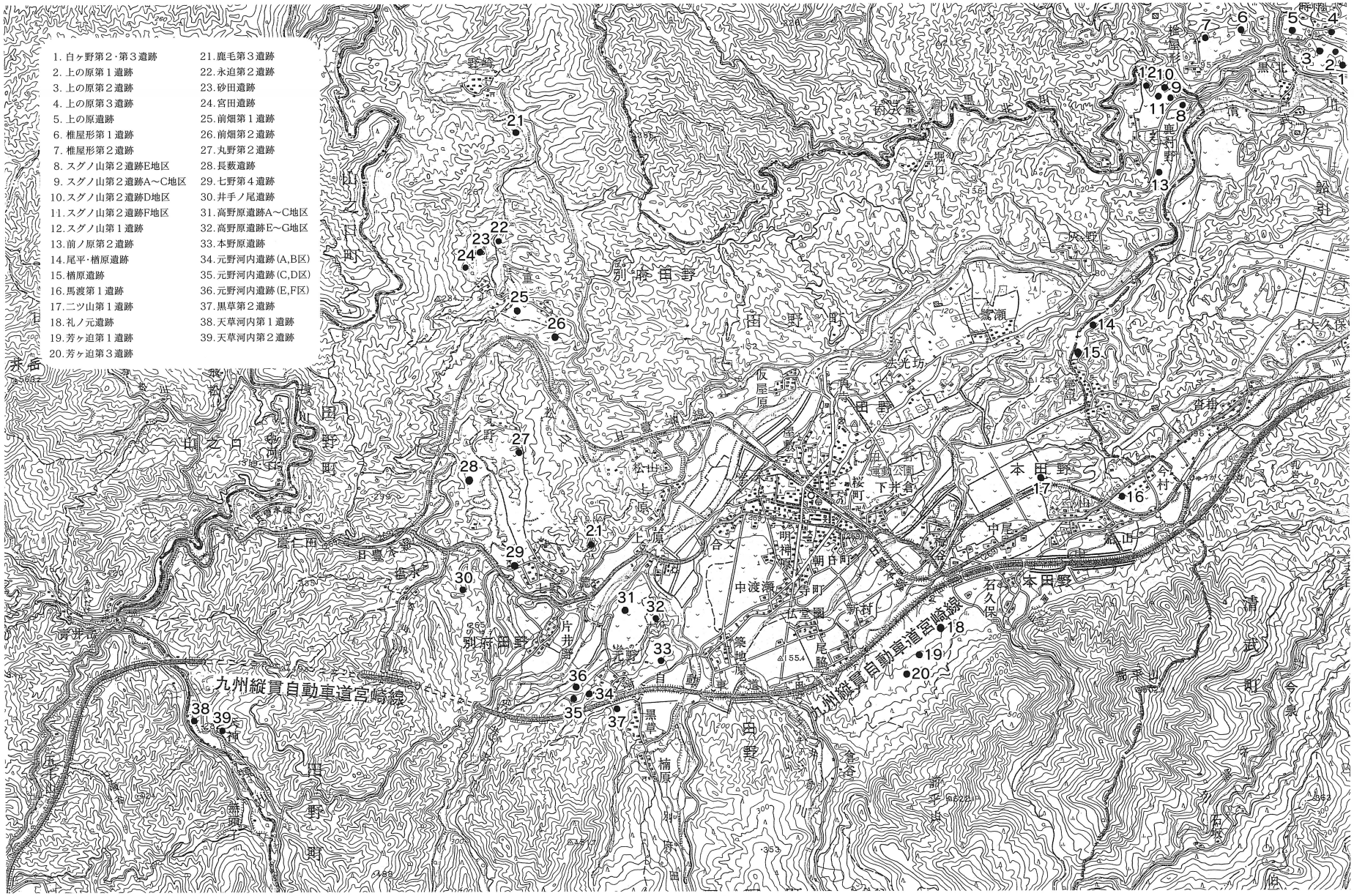
＊出土量は、元野地区・鹿村野地区は実際の出土遺物から導いたが、他の地区は報告書に記載された遺物の数を基にした。

＊押型文土器は、分類し易いよう統合し図示した。なお、型式の認定にあたっては、文様と施文方向を重視し、器形・底部形態は認定対象除外した。
これは、「東九州編年」から逸脱する器形が多いほか、ヤトコロ以前の文様を施文する平底の土器が多く確認されるためである。
編年的位置を定めるにあたっては、南九州の平底化が早かったものと仮定した。

＊遺物包含層が調査以前に削平されていた場合、Ah直上を—で示したなお、撹乱層から前期土器が出土した場合は、そのその型式抜き出し記した。

＊表中で灰色で記した部分は、早期前葉が別府原式土器と、早期中葉が下剥峯～桑ノ丸式土器と同時期とされる土器である。

＊畑田遺跡は、アカホヤ火山灰層が確認されず、出土した条痕文１式はAh直下、直上両方の可能性があるため、？で示した。



第37図　町内のアカホヤ降灰前遺跡分布図（S＝1/60,000）

縄文時代

草創期

最も古い段階の遺物としては、元野河内E区より出土した槍先形尖頭器が上げられる。また、土器は元野河内A区から奥ノ仁田Ⅰ式が1点出土しているが、これは草創期の中葉に位置付けられる。続いて草創期後葉には、黒草第2遺跡と元野河内A区からは羽状に指の摘み痕を残す土器が、E・F区からは隆帯上に爪形文を施文する土器が出土している。更に、早期との過渡期である岩本式は、黒草第2遺跡で1点出土するのみである(文献8)。

以上、縄文時代草創期は、中葉以降恒常的に遺物が認められるものの、いずれも少量である。しかし、東側の台地上ではこの時期の遺物は確認されていないことから、遺物の分布がこの一帯に絞り込まれる可能性が考えられる。

早期前葉

前平式は、工具刺突を行う一群が黒草第2遺跡から多く出土し、元野河内遺跡ではA区から一定量出土している。この土器群は、草創期より出土量が多いが、続く加栗山式は、元野地区西側では全く確認されなかった。しかし、東側に立地する本野原遺跡では、集中的な分布が見られるほか、高野原遺跡E～G区からも少量確認されている。また、加栗山式に後続すると考えられる貝殻条痕文土器(別府原タイプ)は、高野原遺跡のB・C区、E～G区から、多量に確認されている。

このことから、早期前葉の集落の中心は、前平式期には元野地区西側に、加栗山式期には本野原台地に、別府原タイプ期には高野原台地に移動したと考えられる(註5)。

早期中葉

再び遺物の分布が顕著になる。特に元野河内遺跡E・F区では、早水台式、下菅生B式、田村式や、これに一部併行する下剥峯・桑ノ丸式が多量に確認された(文献9)。調査区からは、この土器群に伴うような形で礫群や、多くの集石遺構が確認された。この中には、田野町及び清武町において縄文時代早期中葉に定形的に認められる、V字の掘り込みを持つ大型の集石遺構も含まれる(文献10)。また、この土器は元野河内遺跡A区でも確認されており、この状況は、後続する手向山式まで変わらない。なお、黒草第2遺跡及び東側の台地では散発的である。

以上、この時期は、主に元野地区東側の元野川両岸に集落が形成されたと考えられる。

早期後葉

後葉になると、良好な天道ヶ尾式の資料がA区から集中的に出土しているほか、平栫式の出土は、A区とE・F区でほぼ同じ量である。また、この時期以降、黒草第2遺跡からもまとまった量が出土するようになる。塞ノ神式になると、出土状況に変化が見られ、塞ノ神１式古段階はA区に、Ⅱ式はE・F区に、Ⅲ式新段階以降は再びA区に遺物が集中する。一方、黒草第２遺跡では、Ⅱ式からⅢ式の中段階に至るまで、一定して遺物が確認できる。周辺では、高野原遺跡A区より妙見式が１個体出土するが、他では殆ど出土しない。

この時期は、元野河内遺跡において、川を挟んで集落が繰り返し移動した様子が窺える一方で、これまでごく少量の遺物が出土するのみであった黒草第2遺跡でも、一定量の遺物が残されるようになるなど、変化の兆しが窺える。

アカホヤ直下

苦浜式が元野河内E・F区で一個体出土するが、この時期の集落の中心は黒草第２遺跡であり、多様なバリエーションの苦浜式が多量に出土する。条痕文１・２式は、黒草第２遺跡が最も隆盛を迎えた時期であり、多くの土器が製作されただけでなく、多量の石鏃も製作された。

この時期、元野河内遺跡では、C・D区の傾斜面下部において多量の出土が見られ、集落が局地的に営まれたようである。

アカホヤ降灰後は、元野河内遺跡D区、畑田遺跡で少量、本野遺跡において一定量の曽畑式が出土する。

黒草第2遺跡から確認された数点の遺物は、それよりもやや古い時期になる可能性が考えられる。しかし、それらが出土するまで、元野地区一帯は空白期が存在する。

表26には、田野盆地及び周辺のアカホヤ降灰までの遺物出土状況を表した。これを見ると、旧石器時代から縄文時代早期前半にかけて、田野盆地では出土遺跡・出土量共に増加し、中葉から後葉にかけて、田野盆地では多くの集落が展開した様子が窺える。これに対し、アカホヤ直上にあたる轟B式は、七野第4遺跡と天神河内第1遺跡しか確認されていない。この現象は、かつてはアカホヤ火山灰の降灰による自然環境の悪化が原因とされてきた(文献11)。しかし、注目すべきはアカホヤ降灰直前であり、塞ノ神式期まで存続した集落の殆どが途絶えているのである(註6)。原因は現時点では不明であるが、黒草第2遺跡の石器組成から窺える、狩猟を主とする生業形態や、移動に適した石器組成は、考察を深めるための有力な材料になると予想される(註7)。

(註)

(註1) 貝殻文系土器群と押型文系土器群の併行関係が(文献9)のとおりであった場合、田村・ヤトコロ式期は、押型文の単純期が存在したことになる。

(註2) 重留康宏氏の御教示による。

(註3) もちろん、多量に出土したとしても、使用時期が長ければ集落の規模が増大したとはいえない。ここでの分析は、あくまで参考である。

(註4) 松田清孝氏の御教示による。

(註5) この別府原タイプが、出土量が僅かであった元野河内遺跡B区で出土している点は注目に値する。この地点は川の中州であることから、集落の構成員が、この地を利用して内水面漁撈を行った可能性が想定できるためである。

(註6) 周辺市町村では、出土遺跡数の減少は田野町ほど顕著ではないが、出土量の減少傾向は確実に認められる。

(註7) ただし、早期全体を通して多量の遺物が認められる白ヶ野第2・第3遺跡でも、アカホヤ降灰直後は遺物の出土に断絶期が存在していることから、この火山灰のもたらした影響は、決して小さくはなかったと考えられる。

(文章中の参考文献)

文献１：南九州縄文研究会　2002「南九州貝殻文系土器」Ⅰ～鹿児島県～『南九州縄文集成』1

文献２：田野町教育委員会　2003「鹿村野地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第47集

文献３：重留康宏　2002「縄文時代早期末の条痕文土器(予察)」『宮崎考古』第18号

文献４：八木澤一郎　1994「南九州の集石遺構」『南九州縄文通信』No.8

文献５：馬籠亮道　2002「南九州の黒曜石原産地について」石器原産地研究会研究会発表資料

文献６：米倉秀紀　1984「縄文時代早期の生業と集団行動」『文学部論叢』第13号

文献７：田野町教育委員会　1999「本野遺跡(縄文時代遺物編)」『田野町文化財調査報告書』第32集

田野町教育委員会　2000「高野原遺跡(A区)」『田野町文化財調査報告書』第34集

田野町教育委員会　2000「高野原遺跡(E～G区)」『田野町文化財調査報告書』第36集

田野町教育委員会　2001「黒草第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第38集

田野町教育委員会　2001「元野河内遺跡」『田野町文化財調査報告書』第39集

田野町教育委員会　2001「畑田遺跡」『田野町文化財調査報告書』第40集

田野町教育委員会　2004「本野原遺跡一」『田野町文化財調査報告書』第48集

文献８：雨宮瑞生　1992「南九州の縄文草創期土器(補)」『南九州縄文通信』No.6

雨宮瑞生　1994「南九州草創期土器編年」『南九州縄文通信』No.8

雨宮瑞生　1992「南九州縄文時代草創期土器編年(補遺)」『南九州縄文通信』No.11

文献９：桒畑光博・上田耕・雨宮瑞生　1993「貝殻文円筒系土器と押型文土器の関係」『南九州縄文通信』No.7

文献10：伊東　但　2003「清武町船引地区遺跡群出土の集石遺構及び炉穴について」『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』

文献11：新東晃一　1995「南九州の火山活動と遺跡の古環境」『南九州縄文通信』No.9

成尾英仁　1999「アカホヤ噴火時の火山災害の諸相」『南九州縄文通信』No.13

文献12：知覧町教育委員会　2003「前原遺跡群」「鹿児島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書」第11集

（執筆終了：2003年6月9日）

（追記）　執筆後、秋成雅博氏より、50番の外面に用いられる施文工具の使用例が、清武町下猪ノ原遺跡でも出土しているとのご教示を賜った。施文は横位の連続刺突のみであり、器形は直口で寸胴形を呈する。本遺跡の資料も、分類どおり（X類：塞ノ神式）ではない可能性が高い。また雨宮瑞生氏からは、鹿児島県知覧町南一ノ谷遺跡西側(文献12)の出土石鏃が、早期末条痕文系土器と共伴関係にあるとご教示を賜った。石材・形態ともに本遺跡の出土例に共通した特徴が見受けられ、土器型式を共有する2遺跡の関連性が注目されよう。

付編　町内縄文遺跡出土の「鉄丸石」について

田野町内の縄文時代遺跡からは、器面に渦状の凹凸を持つ礫が出土することがある。『田野町史』には、「水石愛好家によって「鉄丸石」と命名されている」と記されている。

第38･39図は、田野町内で出土した「鉄丸石」である。(1,3,4,7～10,12,13)は、中央の芯を中心として、器面の渦が明瞭に認められる。このうち(1,4,8,10)は、中心部が露出しているが、(4,10)は空洞化している。形状は、(1,3,7,8)は饅頭形であるが、(9,12,13)は不正形な棒状を呈する。また、(7,9)は器面が脆く、僅かな衝撃でも表面が剥がれ落ちる。この2点は色調が黒く、比重も大きい。

この石材について、宮崎県総合博物館学芸課の松田清孝氏に鑑定を依頼したところ、「ノジュール」という回答があった。堆積岩中に含まれた、生物遺存体などの異物の周りに鉱物が集積し、成長したものとのことである。器面に見られる芯はその異物であり、芯の部分が空洞化する現象は、風化により異物部が消失したものであろう。比重が高く、黒色となるものは、主にマンガンが集積したためと考えられる。四万十層群、宮崎層群の両方から確認例があり、採集可能な地点は田野盆地に限らないとのことであった。

田野町内では、これまで野崎地区鹿毛第3遺跡、鹿村野地区ズクノ山第2遺跡E地区、八重地区永迫第2遺跡、宮田遺跡、七野地区井手ノ尾遺跡、元野地区高野原遺跡、元野河内遺跡、畑田遺跡、本野原遺跡と、早期から後期に至るまで、町内のほぼ全域の遺跡から確認されている。自然堆積で包含層中に混入するとは考えにくく、加工が行われなかったとしても、人為的に遺跡内に持ち込まれた「遺物」と考えるべきであろう。

加工は、(1)には部分的に擦痕、(2)は全面にわたって擦痕と敲打痕、(3)は両面に擦痕及び研磨痕、(4)は片面に研磨痕、(5)は一端に敲打痕、(11)は片面及び周縁に敲打痕である。なお、(10)は、垂飾のような概観を呈するものの、成形された痕跡は見られない。このように、擦痕、敲打痕、研磨痕が行われるが、(5)以外は、通常の磨石に見られるような痕跡―平坦面への研磨痕・一端及び周縁部への敲打痕―とはやや趣が異なるようである。そもそも、この石材の多くは比重が高く、磨石・敲石等には適さないことから、ペット・ストーン等、「第2の道具」として使用された可能性が推測される。

(参考文献)

田野町史編纂委員会　1983『田野町史　下巻』田野町

田野町教育委員会　1998「鹿毛第3遺跡」『田野町文化財調査報告書』第28集

田野町教育委員会　1996「永迫第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第21集

田野町教育委員会　1994「八重地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第19集

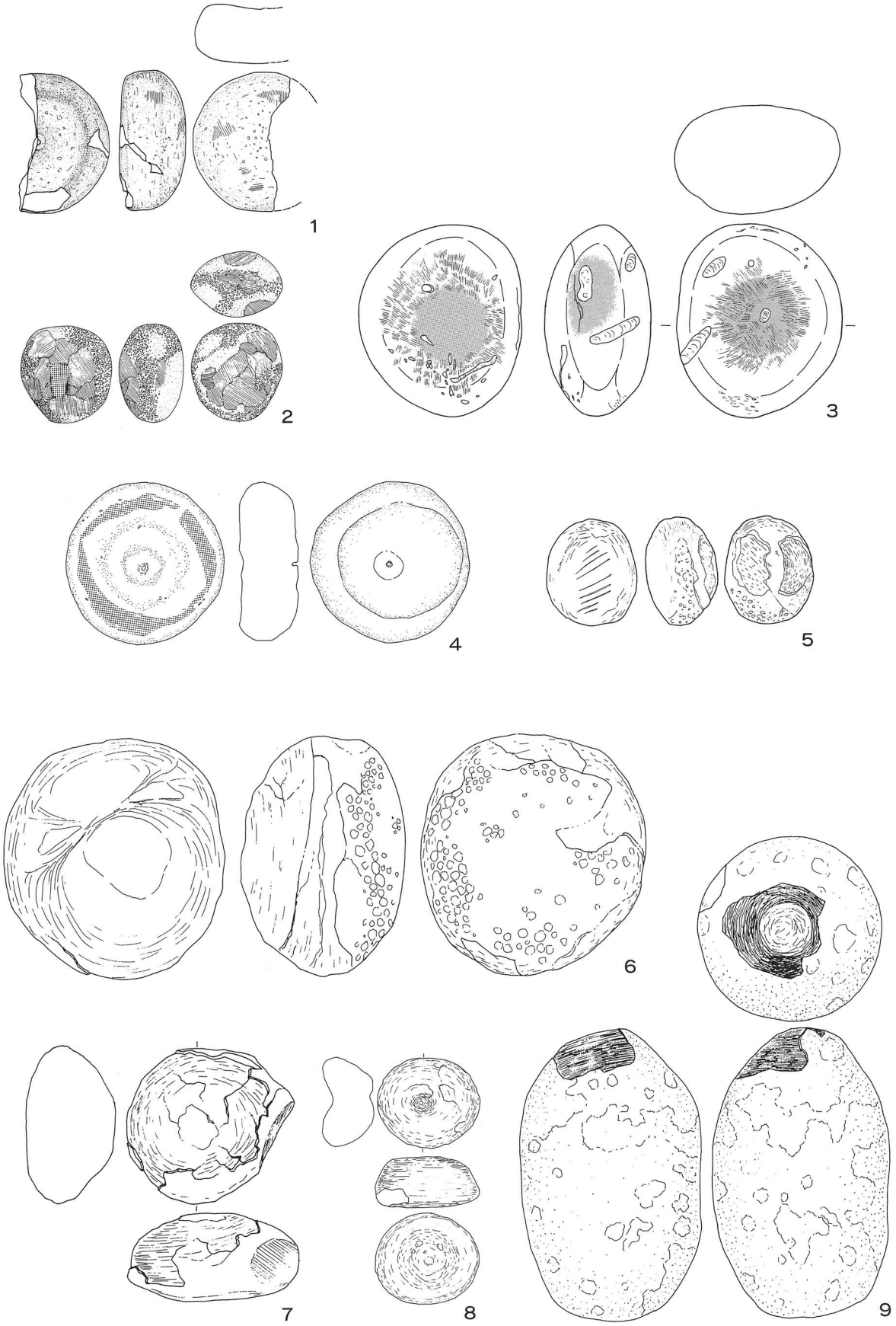
田野町教育委員会　1998「井手ノ尾遺跡」『田野町文化財調査報告書』第14集

田野町教育委員会　2000「高野原遺跡(E～G区)」『田野町文化財調査報告書』第36集

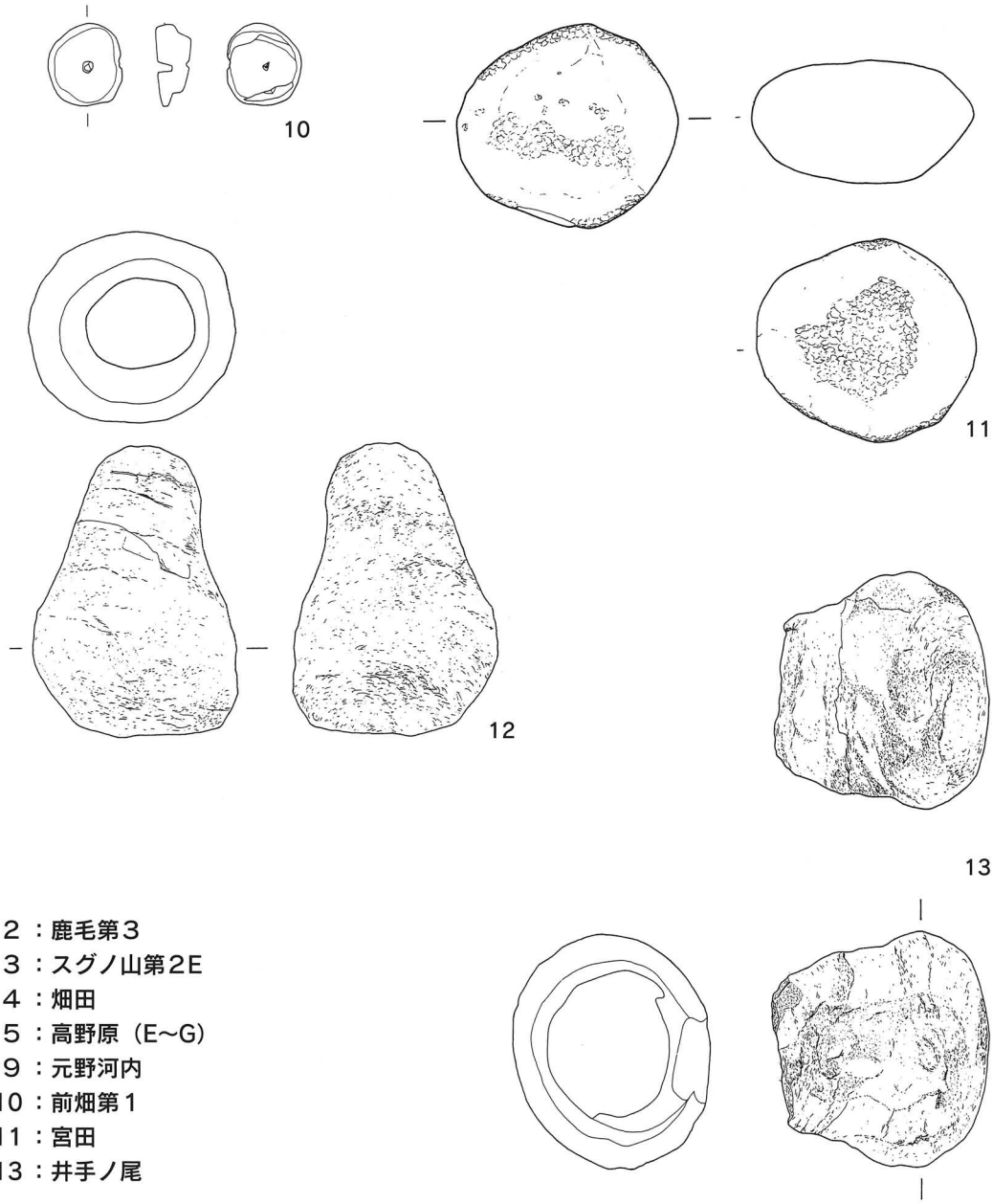
田野町教育委員会　2001「元野河内遺跡」『田野町文化財調査報告書』第39集

田野町教育委員会　2001「畑田遺跡」『田野町文化財調査報告書』第40集

田野町教育委員会　2003「鹿村野地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第47集



第38図　町内出土の「鉄丸石」（1）

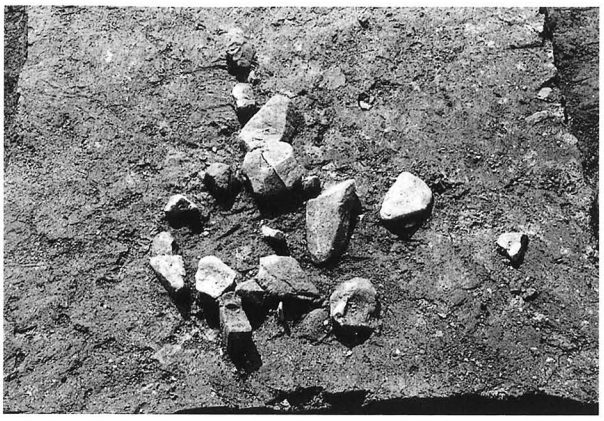


1・2：鹿毛第3
3：スグノ山第2E
4：畑田
5：高野原（E～G）
6～9：元野河内
10：前畑第1
11：宮田
12・13：井手ノ尾

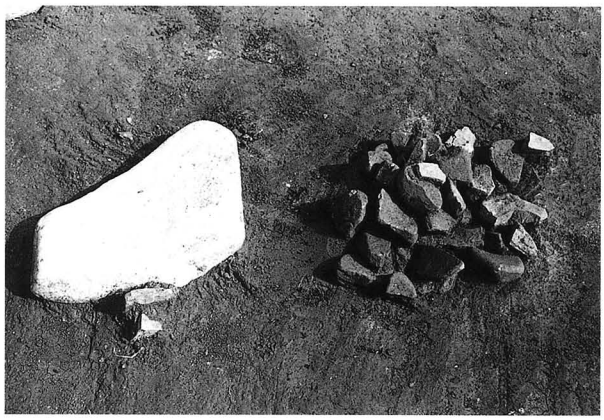
第39図　町内出土の「鉄丸石」（2）

図版1

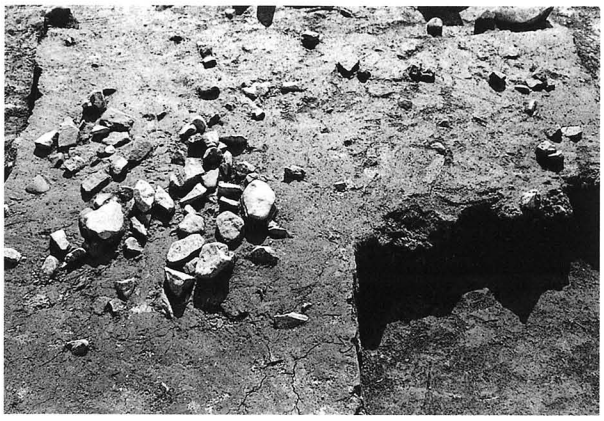
SI-02　検出状況



SI-03　検出状況



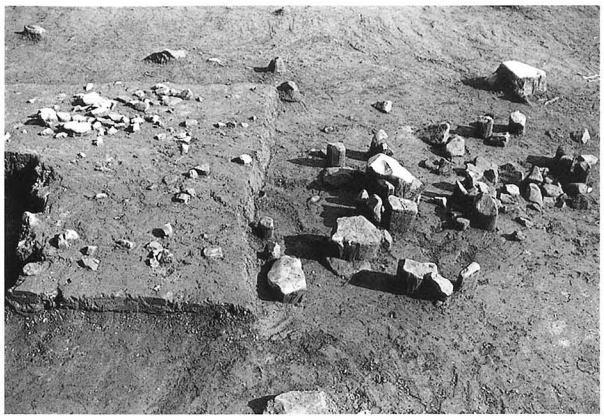
SI-04　検出状況



SI-05　検出状況

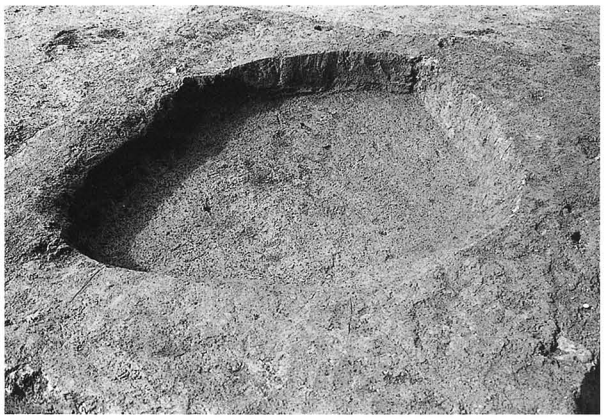
SI-06　検出状況

SI-06　完掘状況

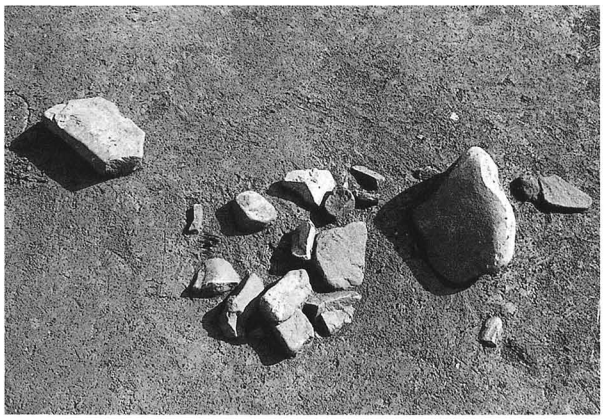


SI-05・06　検出状況

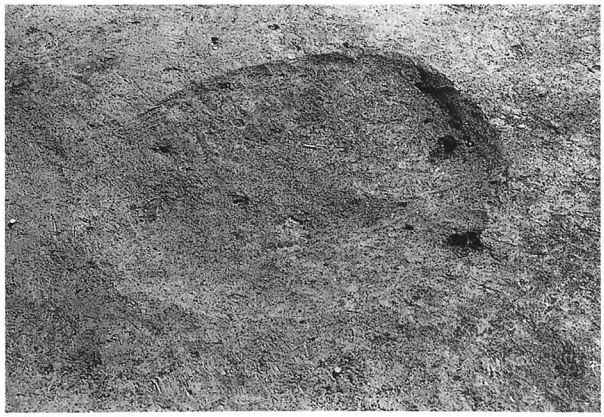
SI-07　検出状況



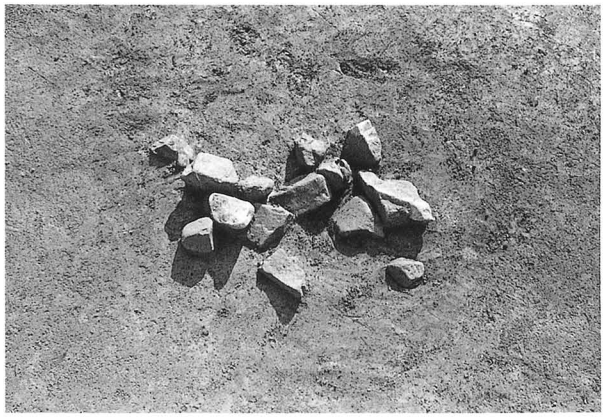
SI-07　完掘状況



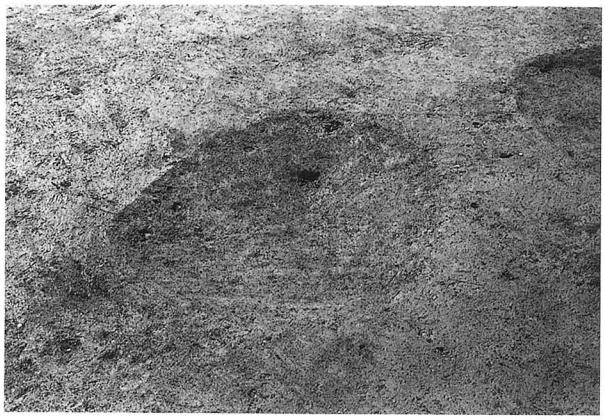
SI-08　検出状況



SI-08　完掘状況

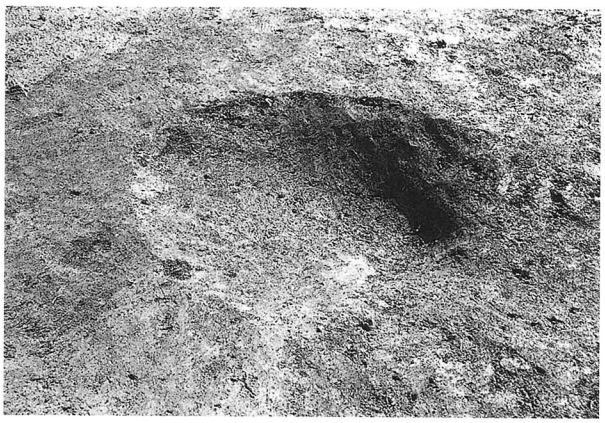


SI-09　検出状況

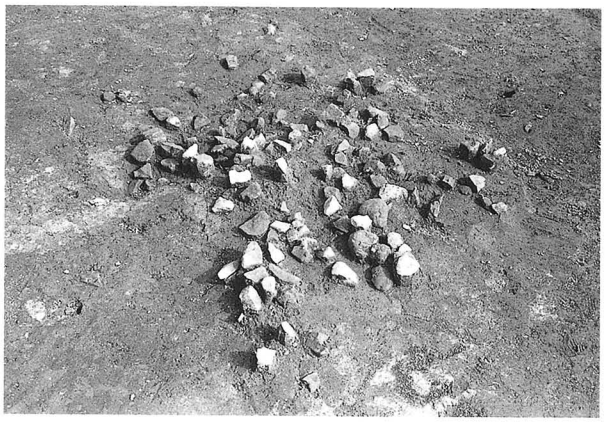


SI-09　完掘状況

SI-10　検出状況

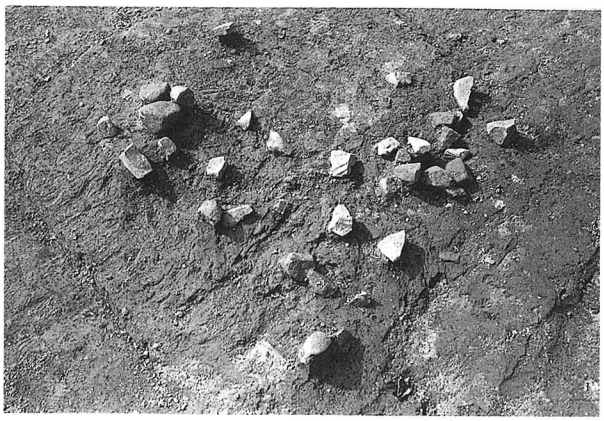


SI-10　完掘状況



SI-11　検出状況

SI-11　完掘状況



SI-12　検出状況